

木場きゅんに憑依した俺は皆に勘違いされながらも生きていく

暁紅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホモ疑惑のある木場きゅんに憑依してしまった、極々一般的な男子高校生は、周りの皆を守るために動く。

現在は何か色々あって「（↑、○、）」状態です

極力アンチ・ヘイトは作るつもりはありません。けど、もしかしたら軽くなるかもしれないです。

目次

教会脱出編

油断していると転生するよ	1
投影開始って誰しも1回やるよね	6
イザイヤ初めての危機	12
原作とは何だったのか	20
覚醒回？何それ？おいしいの？	27
教会脱出決行（そう簡単にいくわけもない）	32
イザイヤの宿命	38
禍の団編	
新たな出会いそして復活のK	48
木場さんマジやばくね	53
自分の本当の居場所	59
死んでないって信じてくれないよね	66
木場祐斗の宿命からは逃れられない	73
まあそうなるよね……マジかよ……	80
死の天使降臨	83
裕斗の最強のパートナー	88
Re：呪いは再び発動する	93
原作突入編	
原作組と初のご対面	97
巡り巡って誤解は拗れる	103
オタクは強し……時と場合によるが	109
聖剣はビームこそ至高。他の能力などいららない	116
新たな被害者現れる。	122

アーサー×ギヤスパークがギヤスパーク×アーサーか迷いどころ

129

因縁の激突。まさかの展開??

予想だにしない方向へ会議は終了する。

過去編

アザセルの思い出。または黒歴史?

通い妻始めました。

堕天使への道のり

終わりの始まり

最終決戦

コカビエルの憂鬱

ウホツ☆男だけの温泉回くホモを添えてく

平和が崩れる音が聞こえる

最終決戦開幕、偽物VS復讐者

世界は刻一刻と崩れ壊れる。

ルシファールとルシファールの妹

英雄は誰ぞどこを見る?

二対一の最終決戦

愛とは何ものよりも強い

225

221

216

208

201

194

185

182

177

166

161

156

149

141

136

教会脱出編

油断していると転生するよ

ミスってたので再投稿

何でこうなった!!!

少年はそう心の中で叫んだ。

少年は今牢屋のような隔離部屋に閉じ込められていて、外とは隔離して生活をしている。だが、そんな事で叫んだのではない。

この少年は1度死んでおり、目が覚めると自分の良く知る物語の世界にいたから叫んだのだ。



俺は平和な日本で高校生をしていて、その日はバイトから家へと帰宅する途中だった。

普通ならバイトが終わっても11時30には家に着くのだが、その日は『ハイスクールD×D』の新刊の発売日で、それを買っていたためもう12時過ぎだ。

「ううー!はあ…… 全くまだ家に10冊ぐらいあるのに、また買っちゃった…… はあ…… 時間が欲しい」

常々思っていた事をボヤキながら、歩いていった。すでに日はくれ、電球の切れかかっている照明がいたり消えたりしていて、夜の怖さが一段と増していた。

けど、いつも通りの帰り道。

正直両目を瞑っても帰れ…… いや言いすぎました。片目で許してください。

そんな普通の高校生には、何処ぞの高校生見たいに特殊な力や、ハーレムを作るために必要な難聴スキルなど無く、簡単に死んでしま

う。

「は？」

人通りも少なく静かな夜の街に、車の大きなクラクションが響き渡り、少年の視界は車から放たれたライトにより真っ白になっていた。

「いててて… はあ酷い目にあつた… まさか車に跳ねられるとは… しかし無事って事は病院に運ばれたのか」

とりあえず明かりが付いていないので真っ暗なため、病室のどこかにある明かりをつけるスイッチを押すために立ち上がる。

立ち上がると何だか視界が低く感じ、身長がかなり縮んだ気がする。

高校生にしては高い185cmあつただけ、今は何だか120cm程しか無いような… 不思議だなどと考えていると、ドアの向こうから何やら足音が聞こえ、病院の人が来たなど思い声をかける。

「あのすいませんここは」

「何だ起きたのか、被検体No. 09」

「え？」

「目覚めたのなら明日から、貴様も協力してもらおうぞ主のためにな」

「え… ああはい…」

男は手に持っていたライトの光を当て、少年が生きている事を確認するとほかの部屋にも光を当てながら、どこかへと帰っていく。

突然の訳の分からない展開に頭が混乱し、思考が纏まらない。

被検体No. 09って事は、何かしらの実験の被験者って事は間違いない。けど、何故自分がそんな事になっているのか分からず、頭を傾げていると、部屋の上の方にある鉄格子の窓から月の光が入り、部屋に飾られている鏡を見る。

そこには黒髪で日本人顔の人物はおらず、金髪で日本人とはかけ離れた美形な顔をした子供がいた。

だが何となくどこかで見た事があった。どうにか思い出そうと頭に全神経を集中させると、とあるアニメのワンシーンを思い出した。それはハイスクールD×Dのリアス・グレモリーに拾われる木場祐斗のシーンだ。その時の木場祐斗の姿と今の少年の姿はまるつきり同じで、いや同じどころか同一人物のような……………

はエエエエ!!!なんで!嘘だろ!!

そうだこれは嘘なんだ。だからこうやって「魔劍創造」ソード・パースとか言っても、剣なんか……………イヤあああ!!何で出てきてるのオオ!!

彼の手には先程まで無かった西洋剣風の剣が1本あった。けれど、少年の身体では支えきれずに地面に落とす。

その音に反応し誰かが駆け寄ってくる音が聞こえ、バレたら不味いと一生懸命消えろ消えろと念じた所、男が到着する前に剣は跡形もなく消える。

駆けつけた男には気のせいじゃないですか?と言いつけ、どうにか帰らすと硬いベッドに腰をかけ、考える像のようなポーズをとる。

まさか冗談抜きで木場祐斗に憑依するとは……………

そんな冗談のような事が起き、これからどうするべきか寝落ちするまで考え続けた。

朝目が覚めるとやはり少年の身体のままだった。これが、夢ならと確率は低いながらも思っていたが、結局は夢ではないようだ。

眠い目を擦りながら、他の部屋の人と一緒に別の部屋へと集団移動していた。

「ふああ」

やはりこのような子供の身体には深夜寝はキツかったのか、口を手で抑えながら欠伸を出してしまう。

それを見た1人の青年が声をかけてくる。

その青年は身長は170を優に超え、周りとは比べ1人だけ大人びていた。過去の自分と同じ真っ黒い黒髪だ。

「眠そうだな」

「うん。昨日寝るのが遅くて・・・ふああ」

「そんな深夜に寝てると、身長が伸びないぞ」

「別にいいよ」

「そうか・・・まあ、一応初めてだから自己紹介からだな。俺は虞淵グエン宜しくなえつと・・・名前は」

「名前は・・・」

名前一体何を名乗ればいいんだ？

前の人生の時の名前の田中太郎か？それとも木場祐斗か？

どうしようどうしようと悩んでいると、自然と口が動き名前を名乗る。

「イザイヤだよ」

「イザイヤか・・・名前と身体からしてヨーロッパってどこか」

「そういう虞淵は・・・ドイツ？」

「ああ違う違う。俺の名前は漢字でな、中国の出身だよ」

「へええ」

中国の名前にそんな洒落たのがあるとは思っていないく、意外とびつくりした。

その後ご飯の時間等を使ってこの施設の事を色々聞けた。

ここに集められたのは全員親から売られた子供達で、苗字が無くここでは被検体N.O.と呼ばれている。

ここは原作通り聖剣の実験をしていて、今は世界中から大量に子供達を集めている途中らしい。

そのため、多種多様な人種が集められている。黒人白人等々。

さらに言えば大体の子供は皆親から捨てられたショックで、笑顔がなく死人のような目をしている（虞淵とイザイヤのみは元気）

そして、全員が主のためにと心に言い聞かせている。それは正しく洗脳意外の何物でもなかった。

てか何でそんな多種多様な人種がいるのに、言葉が通じるのかはあんまり深く考えなくていい。これ大事要チェック!!

食事も取り終わると、ストレスで死なないようにか自由な遊びの時間がやって来る。

しかし誰も遊ぼうとせず、どこかに座って空を見上げる事しかしていない。

そんな中2人はどうすればいいかを話し合っていた。

「何か面白い事をしてよ」

「無茶ぶりにも程があるぞイザイヤ。残念だが熊やライオン程度しか殺れないからな……皆が楽しめる事は流石に」

おい、何か今普通に面白そうな事言つたろ。熊とライオン殺る？なにそれ超見たい。すこぶる見たいんだが。

話し合いをその日続けても一向に考えは纏まらず、結局何も解決すること無くベッドへ飛び込む。

ほんのり柔らかい枕に顔を押し付け今後の課題を考える。確かに笑顔がないのは問題だが、一番の問題は因子を取り除いた後全員始末される事が問題なのだ。

一体どうすれば皆を助けられるか考えながら、ゆっくりと瞳を閉じ自然と眠っていく。

投影開始って誰しも1回やるよね

1週間も経つ頃にはすでに全員集められ、本格的な実験が始まる。現在30人いる中から2人組を作り、午後と午前に分けて2回行っている（午前中に2回午後にも2回で計4回）

実験には隔離された部屋に2人が入り、そこにあるベッドに横になり、手足に拘束具をつけると始まる。

実験が始まると身体中にとんでもない激痛が走る。痛さは内側から刃物が飛び出すぐらい。かなり痛い。

それが五分程かけて終わると、拘束具が解かれ実験は終わる。言葉で言えばシンプルだが、やられている方からして見れば数時間やっている気分だ。

今日も無事に何事も無く終わり、皆の元へと戻る。

「イザ兄!!」

「イザ兄お帰り!!」

「イザ兄アレやってよアレ!」

「ほら皆落ち着いて、準備するから少し待つてね」

イザイヤに群がっていた子供達は、いつものステージの前に座るとマジックが始まるのを今か今かと待つ。

イザイヤは3日前に子供達を楽しませるために、マジックをした。それは簡単な石を消すマジックとかだ。

それを見た子供達は大興奮して、目には生気が戻り活発な元気な子供になっている。

何故マジックを出来るのかは、田中太郎時代にニートをしていて、その時に暇でマジックを覚えていたからだ。

それに、ここは意外にも娯楽にはある程度親切性があり、あやとり・ベイゴマ・ファミコンなど言えば持つてきてくれ、トランプも貰えた。そのお陰でマジックの幅も広がり、子供達の3日に1回の楽しみに

なっている。

準備が終わり子供達の前に立ち、マジックを始める。マジックが進む度に子供達から楽しむような声が聞こえる。

その声を聞くと自然と心が穏やかになり、いい気持ちになる。

数十分にも及ぶマジックショーが終わると、子供達は皆拍手をして満足の内に終わる。

後片付けをしていると、一緒に虞淵も片付けをし始める。

「別にしなくても」

「いいんだよ。好きでやってるんだから。それにこれがないと、あいつらはこんな笑顔にはならなかったからな」

片付けをする手に自然と力がこもる。

だが何も虞淵がしなかった訳ではなく、子供達が楽しめるように色々したのだが、やはり楽しめる訳がなかった。

まあ、イザイヤとしてはかなり楽しめていたのだが……



そんな自由時間も終わり今は風呂の時間だ。

そこは流石は教会。かなり風呂は大きく男達が全員入っても問題ない広さだ。

「イザイヤ背中流すぞ」

「いやいいよ、僕はゆっくり洗いたい派だから。あの子達を見てあげて」

「そうか……なら今度洗わせろよな。ほらお前達こっち来い」

ゆつくりと言つても入浴時間は限られているので、あらかた洗うと湯船に入る。

その湯船の暖かさから自然と声が漏れる。

「ふうああ…。」

その声は隣の人と被ったようだ。

誰がいるのか見るとそこに居たのは、数少ない日本人で綺麗な黒髪、ぷつくりとじていて食べたいぐらい美味しそうな唇をしている、告白して無理やりベッドに押し倒して、野獣のように食ってやりたいと思う程可愛い、だが男だ。もう一度言おうだが男だ。

「気持ちいいかい？」

「う、うん…。」

胸をタオルで隠す様はまるで女そのものの、声も高いし見た目も女っぽい…可愛いな

「ひえあ！あの、その」

しまった心の声が漏れてた。しっけいしっけい。

うん男の子に可愛いは失礼だね。

「結婚しよ奏汰」

「あああああ」

奏汰の細い右手を包み込むように掴んで告白すると、あまりの衝撃に顔が一瞬で真っ赤になり、頭から大量の煙が立ち上る。

そのまましていると卒倒して溺れそうなので、手を離して冗談つて言うど、いつも通り少しだけ頬を膨らませ湯船に口元を沈ませる。

「イザイヤさえ良ければ…別に良いのに…」

「何か言った？」

「プププププ」

湯船につけた口元から大量に空気を吐いて、ぶくぶくと泡立てながら返事をする。

何で拗ねてるのか分からなくて頭を傾げていると、入浴時間終了の

チャイムがなり皆湯船から出ると、寝巻きの新しい服へと着替える。
男子の入浴時間が終わると次は女子で、就寝時間こ9時まで娯楽物が沢山ある一室へと集められる。

丁度子供達もファミコンやサターンで遊んでいるので、今の状況の整理をする。

まず5歳以下の子供達は男女合わせて22人いる。

そして、6歳以上は男子が3人で女子が5人だ。

男子のメンツはイザイヤと虞淵と奏汰だ。

女子とはあんまり関わりがないので、名前が不明だ。だが、脱出をする前までにはある程度、コミュニケーションを取つとかなないとまずい。

次に現状の戦力について、これは俺しか戦える者はいない。そもそも神器を持つてるのが俺だけなので、そこは仕方がない。

最後はどう処分を回避して逃げるか。

基本的にこういう場合は逃げるかルートを見つけるのが定番なのだが、ここ一体は森で通称迷いの森と言われる程複雑な森だ。

そんな場所の抜け道など見つけることなど出来なく、進展なしそれに処分の際に放たれる毒は、俺の神器の成長にかかっている。

結論あんまり進んでいない。

「はあ…… どうするか」

「どうしたの?」

「少しね」

「ほほう…… 恋の悩みか?」

「恋…… もしかして僕と……」

「違うよ。何て言うのかな、この先のことについてって感じかな」

「この先か……」

今の行われている実験は人体にも大なり小なり影響を及ぼしてい

る。それは、子供たちの髪の色素が薄まり、だんだん白に近づいていく事だ。

今はあんまり目立たないが、これ以上進むのであれば、もしかしたら身体にも何か出るかもしれない。そんな不安があるのだ。

(まあ確かにそうだが… イザイヤお前は一体何なんだ？ 何で俺よりも年下の、それも7歳の奴がそんな事を考えられる…)

虞淵は正直イザイヤの事をしつかりと信じられてはいなかった。

やたらと理解力の早い頭脳に、数々の知識と技術。そこから推測するにもしかしたら協会側のスパイかもしれない、そんな考えが頭から離れない。

信じたいたのは山々なのだが、やはりそこはダメらしいと、自分の惨めさにため息を吐く。

いつか信じられればいいなと思いつながら、その日最後のコンテニューをする。

「死んだだと…」

「グエン兄弱い！」

「くそう！もう一回だ、次こそは勝つ！」

「いいよグエン兄かかってきな。俺に常識は通用しねえ!!」

虞淵はファミコンのコントローラを強く握りしめ、3度再戦をする。通算30戦30負に白星を入れるために。

結局また黒星が増え、今度こそ勝つと誓った。

皆が寝静まり、巡回もこない少しの間に神器の特訓をする。

右手と左手を前に突き出し『投影開始』トレイス・オンと言いつ、2本の魔剣を創り出す。

それはかの有名な夫婦剣。黒と白の対の剣。衛宮士郎が最も使う事の多い剣干将・莫耶。かんしやう ぼくや

2次元の武器を創り出し、それをぶつけ合わせ強度を確認する。

2回ぶつけた所で粉々に砕け散った。

まだまだ強度が低い、だからまた創り出す。

今ではこれが日課だが、正直しつかりと剣を振るえるようになりた
い。

そして今日も終わっていく。

イザイヤ初めての危機

転生イザイヤの朝は早い。

硬い枕のせいで痛めた首をほぐすように回した後手首もほぐすと、どこぞのヒーローがしていた腕立て100回腹筋100回背筋100回をして、片手腕立てを左右50回する。

これは、先日夜に剣を作った時に子供の筋肉を舐めていて、次の日に筋肉痛になったのでそれが起こらないように始めた。

今はうんその・・・きつと成果もあるさ！

誤魔化しているが始めて数日なので、あんまり効果がでない。

その朝練が終わると、部屋の移動のため丁度教会の人間が来て、いつもの娯楽室に連れていかれる。

その娯楽室では子供達と軽く遊んだりするぐらいで何も特訓はせず、この後の昼食が終わった後の昼の自由時間で特訓をする。

内容としては1分全力で走って10秒休憩を時間ギリギリまでする。それだけでも意外と疲れるが、剣を振るために体力も必要なのでこれは是が非でもする。

その後は晩飯、夜の神器練習といつもの事をする。

そんな生活を1年続けた結果、かなり筋肉がついて背が伸びました。

むふふ今は何と8歳になりました。うん後数ヶ月もすれば9歳なんだけどね今はそれはいい。

一番良かったのがなんと！背が130を超えました!!嬉しい良かったわ！下手に筋肉つけると背が伸びないって聞いてたから、最悪背伸びないかな？って思ってたけど、伸びて良かったまじ安心したわ。

けどさ……はあ…… やっぱり女子とは会話なし。これってなんだろ高校生を思い出すよ、女子と話したいけど緊張しちゃうか

ら、男子だけ会話をしていたらホモ扱いされたあれと一緒にの感覚……
つらい……。

そんな事を考えながら自由時間の時に走っていると、庭の周りにある塀を登って越えようとしていた女子が、手を滑らせ頭から落下を始める。

「キャッツ!!」

「しまっ!」

虞淵は一番近いのですぐにキャッチしようとしたが、足元にある自らの汗に足を持ってかれ、その場で転倒して女子をキャッチする事ができない。

足元に汗がある理由は、彼の父が八極拳の使い手らしく、それを教えてもらったのでここでも忘れないようにと、1人黙々と八極拳をやっていたからだ。

これを聞いて思ったのは父が教えるって事は、それなりに愛しているはずだ、なのに捨てた……正直考えられない事だ。何かあったのかもしれない……。

虞淵が死を覚悟し目を瞑った瞬間、脇を突風が通過していく。

それに違和感を覚え恐る恐る目を開けると、そこにはイザイヤが少女をキャッチしているのが見えた。

「良かった……助かったよイザイヤ」

「間に合ったのはたまたまだよ」

そんな事を言っているが、イザイヤが一番遠い位置にいて、虞淵ですら全力で行って間に合うかどうか程度だ。それをしっかりとキャッチしているって事は、かなり身体が鍛えられている証拠だ。

軽くイザイヤの成長速度に恐ろしいと感じてしまうほどに。

イザイヤはゆっくりと少女を降ろすと、少女がお礼を言おうとした時教会の人間が今の叫び声を聞き、急いで駆けつける。

「何があった!!」

皆ビクビクと怯え何も言えずにしていると、イザイヤが前に出て手を上げる。

「すみません。脱獄をしようとしてあの扉から落ちて、彼女に当たりそうになり悲鳴を上げさせてしまいました」

少女は違う！と言おうとしたが、あまりの大人の剣幕に恐怖して何も言えず、大人に引つ張られるイザイヤを大人しく見ることにしか出来なかった。

イザイヤは引つ張られ、入っては行けないと言う場所に入ると、階段を降りてとある部屋に放り込まれる。

いや部屋と言うよりも、空間と言ったほうがいいものだろう。

辺りに穴などなく光もない。

そこらかしこは岩が向き出っていて、部屋として整備された形跡がない。

「そこで反省している」

大人の声が色々な所に反響してどこで喋っているか分からないけど、聞き取る事は出来た。

何かが閉まる大きな音がした後、完全の無音になり時々自分の動く時に擦れた服の音しかない。

いつ来るか分からないので神器をする事もできない。だからとりあえず座禅をする事にした。

一体何時間過ぎただろ…。未だにこの部屋から出れない。

もう限界だ……。死にたい……

「「いざにいいい!!」」

子供達皆は涙を大量に流しながらイザイヤに飛びつく。飛びついてきた子供達の頭を撫でると、安心したような表情になる。結局みんなを相手してたら数分がかかった。

やっと解放されると虞淵が目に入りそちらに向かう。

「僕はどれ程閉じ込められました?」

「そうだな... 2日だな」

「2日... 一週間ぐらいいたような気がしてたけど... 勘違いか...」

思ったより短かった事に驚きつつ、虞淵の周りを見ると数名の女子が集まっていた。

「もしかして... 彼女?」

「ふははは! 違う違う。これは脱出のために集まってるだけだよ」

あまり外に漏れたくないのか、イザイヤの耳元でつぶやくように言う。

脱出だと! 何たる事か!! まさか脱出の話が出ているとは!

衝撃を受けていると、虞淵と同じぐらいの歳で金髪のヨーロッパ風の女性が前に出て手を前に出してくる。

「あの時は琴音を助けていただき、ありがとうございます。私の名前はシエルです。以後お見知りおきを」

「琴音さんですか?」

「そう言えばまだ自己紹介してませんでしたね」

握手を交わして聞くと軽くふふふと笑い、背後に隠れていた女子を前に出す。

その子はその時塀から落ちた少女で、髪は黒で見慣れた日本人顔だ。

「あの... の... と、時は」

「イザイヤです宜しくね」

「はう...」

何故か頬を赤めた少女に首を傾げると、双子の姉妹が抱きついてく

る。

「うわっ、」

「いい人いい人!!」

「この人いい人!!!」

元気がいいなと思いつつながら、落ちると危ないので降ろすと突然手を上にあげ名前を名乗る。

「私がレン」

「私がリン」

「二人合わせて魔法少女プリキュア!」

「えっと……プリキュアさん?」

「リン!」

「レン!」

「ああそつちなのね。リンちゃんレンちゃん、イザイヤです宜しくね」
イザイヤが手を差し出すと、2人とも別々の手を掴み、握手みたいな事をする。

その光景が可愛くて少し笑うと、笑った笑ったと声を上げ踊り始める。

和んでいるイザイヤに虞淵が近づき、今の現状を話す。

琴音が塀を登りかけたところで見た光景は、言われてきた事とは違い森などなく、さらに大きな塀に囲まれていた。

その事からここがただの施設ではないと気づき、ある程度成長している者達で集まり情報を集めている。

原作との食い違いがある事に気づき、首を傾げていると突然天井から、1人の少女が飛び降り着地する。

「どうだった焰」

焰と呼ばれた少女は首を横に振り、否定的な行動をとる。

それにため息を吐くと、頭を抑えながらこれからの事について考える。

イザイヤはそもそも誰か分からず首をかしげていると、奏汰が耳元

に来て説明をしてくれる。

「彼女は焰ちゃんって言って、忍者の末裔らしいよ」
「忍者の末裔？」

「うん、それでその能力を見込んでここの情報を集めているんだけど・・・あの様子じゃダメだったみたい」

「うん、ありがとう奏汰」

満面の笑みを浮かべると何故か奏汰が赤くなるが理由がやはり分からない。

熱でもあるのかな？とおでこおでこをくつつけると、かなり熱いことが分かり風邪だと判断する。

「熱いね。やっぱり風邪だと思うよ」

「違うよこれは・・・その・・・ね・・・ イザイヤのせいだから・・・ せきに」

「大丈夫です！奏汰は大丈夫です、けど心配ですのであつちに連れていきますね」

何かを言いかけていた奏汰を引っ張り隅っこに行くと、イザイヤに聞こえないように小声で話をする。

「何を言おうとしました貴女？」

「責任を取ってもらって」

「言わせませんよ！全く・・・ 抜け駆けは無しだと言ったじゃないですか」

「だって突然の事で頭が・・・」

「それは分かります。アレを天然でやってるんですね・・・」

「はあ・・・ ライバル増えそう」

この2人は同じ人を好きな人同士とある関係を結んだ。

イザイヤに駆け抜けはせずに、話しかける程度にする。

接触はあまりしない。

襲わない。

これが内容だ。そんな彼女らの組織の名前はイザイヤ大好きですの会。会員二人だが、あの天然からしてさらに増えそうな気がしてならない二人だった。

その日も会議は続いたが、成果のような物は得られなかった。

原作とは何だったのか

その日の自由時間にとある作戦を決行しようとしていた。

その作戦は1人が外に飛び出て、周りの様子を事細かに調べることだ。

この作戦を聞いた時すぐにイザイヤは自分が行くといい、他にも行くと言ったものを断固拒否した。

理由はもし戦闘になった時に戦えるのが自分ぐらいのと、ある程度痛みにもなれ罰なら余裕で耐えられるからだ。

「ここ最近聖剣の実験が痛くない……何故だろ？」

そして遂にその時間は来る。

大人が全員広間に入れ帰っていったあと、協会本部に繋がる小さな窓から中に入る。

ぐぎ！

着地の時に嫌な音がしたけど大丈夫……大丈夫だ。何か感覚が何も無いけどどうにかな！

足音が聞こえ曲がり角に飛び込み隠れ過ごす。

コツコツコツコツ……

足音はだんだん遠のいていき、やり過ぎさせた事に安堵のため息を吐く。

「はあ……良かった……いきなりゲームオーバーかと思った……よし！切り替えていこう」

頬を両手で叩き気持ちをリセットすると、外に出て何があるのかを紙に書いて進む。

外門教会の順番にあり、その門の鍵穴は特殊で特殊な鍵が必要なのが分かった。その鍵穴の形を記録すると次の場所へと移動を始めた。すると地べたを這うように隠れながら進んでいると、とある部屋の

窓が少し空いていてそこから声が聞こえてくる。

「すま………イ………ほ………シエ………」
「?なんだ?」

本来なら逃げるべきはずなのだが、これに関してはどうしても聞きたい。そう思ってしまった音が立たないようにゆつくりと動いて行くと、少しずつよく聞こえ始める。

「私のせいだな…イザイヤ」
「!」

イザイヤその名で呼ぶ者は子供達しかいない、ならば誰が呼んだのか気になり近づく。だが、その時は好奇心が強くなり足元の小枝に気づかず踏んでしまう。

その音に気づいた言葉を発していた男は、勢いよく窓を開け顔を乗り出す。

「何者だ!」
「しまっ」

すでに顔も見られた。今から逃げても間に合わない。なので大人しく投降して皆は関係ないと訴える事にした。



自由時間が終わる寸前になってもイザイヤが一向に帰ってこない。何かあったのでは?と心配していると、広間の扉が開き大人が入ってくる。

やばい時間を稼がなくては!

隣にいたシエルとアイコンタクトを取ると、シエルも領き意図が伝わり時間を稼ぐ、

「すみません。先程遊んでいたらブランコが壊れました」

「子供達が危険ですよ」

「何も壊れていないようだが?」

「な、治したのです」

「ああ、仮に治したただけだからな、しっかりと治してくれないだろうか？」

「そうだな・・・後で治しておこう」

だめだ2人は同時に思った、だからさらに伸ばそうとしたが、逆にそこを怪しまれる。

「何やら貴様ら隠していないか？」

殆ど核心の言葉に驚き声が出ずに固まる。

その隙に子供達の数を数えると一人いなく、N.O. 09がいなく、とが分かった。

「おい、どういうことだ！何故N.O. 09がいなく！」

「それはその」

「えつとそれが」

言い訳を言い訳を言わなくちやイヤイヤが本当に殺される。

どうにか言い訳を捻り出そうとするが、突然の事に考えていなく何も言えない。

「フェース落ち着け」

「バルパー様！どうしてこのような場所に」

目の前にいる大人とは違い、司祭のような黒い服を着ているバルパーと呼ばれるおじさんが出てくる。

バルパーはフェースと呼んだ男の肩を叩き、誤解があった事を伝える。

「すまないな。N.O. 09は少し私の仕事を手伝ってもらっていてな。つついそれ言い忘れていた」

「はあ・・・そうだったんですか。なら大丈夫ですね。私はこいつらを連れていくので、後で連れて行って置いて下さい」

「了解した。それと今度はあらかじめ言うとするさ」

フェースはホントですよと言いながら子供達を連れていく。

子供達の心の中には、イヤイヤがどうなってしまったのが気になっっていたが、目の前の男の口調の変化からかなり格上の存在なのは

分かったので、下手に機嫌を損ねるとイザイヤがどうにかなるかもしれないので、聞くことが出来ない。

バルパーは全員が行ったのを見送るとイザイヤのいる書斎へと行く。

書斎に入ると中にはイザイヤの姿はない。

それが、さも当たり前のように進んでいき、本棚の前に行き赤い本と青い本をとって入れ替える、すると本棚が横に動き地下へ続く階段が現れる。

そのには階段には明かりがないなか慣れた足並みで降ること数分、目の前に古臭い木の扉がありそれを開くと、中にはイザイヤと10匹の魔犬が戦っていた。

イザイヤを囲むように5匹の魔犬が囲み齧りつきに飛びかかると、上空に作っていた剣が綺麗に落下し、魔犬の口を上から貫通し地面に突き刺さる。

口を地面に封じられた魔犬は、ドタバタして抜けようとするが抜けられず、イザイヤの持つ二本の剣に頭と首を切り離される。

5匹の魔犬を片付けると、姿勢を低くし地面を這うように円を作りながら走る。

その円は徐々に大きくなり残りの犬達へと近づく。

イザイヤの走る速度は魔犬の目を持ってしても追えず、動く線としてしか見れない。だから犬達は上に飛び、安全であろう真ん中を指す。

そこは予想通り安全地帯のようで安心したら、突然イザイヤが消え周りの円が消える。

犬は一瞬にして辺りを警戒するが、イザイヤは上空に飛んでいるので気づかれず、3匹の犬の頭と胴体に剣を投擲し針山状態にする。

残った2匹はイザイヤの着地の瞬間を狙って噛みつきに行くが、手に持っていた剣が羽のような形状になり、リーチが長くなったので呆

気なく水平に真つ二つになる。

「ふう…」

イザイヤは手に持った剣を消すと、額から流れる汗を服の胸元の部分で拭うと、その場に倒れるように座る。

「上達したようだな。まさか、本当に100匹倒すとは」

「けど疲れましたよ、ははは」

イザイヤの周りには色んな殺され方をした犬の死骸が転がっている。

その殺しをしたのは全てイザイヤだ。

そして、この魔犬達は何なのかと言うとバルパーの魔力で作っている人工魔獣だ。

これは神滅具の一つにある魔アナイアレインシオン・メーカー獣創造を参考に作り出した、バルパーオリジナルの魔術だ。

だが、その魔術はかなりの失敗作で、指定した場所でしか使えず準備に2年かかる。なので今までストレス解消程度にしか使ってこなかった。

この場所もそのためにつつたのだ。なのに何故そこにイザイヤがいるのか、それはバルパーが原作のような極悪人ではなかったからだ。

「どうでした皆は？」

「イザイヤの事を心配していたよ。まあ、あんな危険な事をしようとするとは、頭が痛いがね」

「確かに… けど、いい出会いもありましたよバルパーさん」

「そうだな、私達は共犯者だなイザイヤ」

バルパーは地べたに座っているイザイヤに手を伸ばし、手を掴むと思いつき持ち上げる。立ち上がると尻の土埃を払い、剣を作ってバルパーを見つめる。

ふむと頷くと地面に突き刺さっている魔剣を引き抜き、イザイヤに構える。

そして、イザイヤは地面を思いっきり蹴り二本の剣をバルパーに振り下ろす。



戦いの少し前、バルパーに見つかった直後の時。

見つかった時はオワタと思っていたが、今は何故か椅子に座り紅茶を出されている。

出された紅茶を警戒することなく口をつける。

「毒を警戒しないのか？」

「見つかった時点でアウトですよ？今更警戒しても」

「そうだな…… それでどこまで私の独り言を聞いた？」

しっかりと聞き取れたのは「私のせいだな…… イザイヤ」だと言
い、何がバルパーさんのせいなのか聞く。

そうすると上を見上げ手で頭を抑える。

数秒そうしていると、ため息を吐きながらイザイヤの方を向き答える。

「それはな君達を指名したのは私だからだ」

「指名？」

「ああそうだ、だがあの時はこんな事になるなんて思っていなかった」
そう言つて机の引き出しの中にある紙をイザイヤの前にある机の上
上に投げる。

バラバラになりかけた紙をひとまとめにして、何が書かれているの
かを見ていくと、知っている通りの事が書かれていた。

聖剣計画、子供達、因子、そして処分。

この事からやはり処分は免れない事だったのが分かる。

「まるであらかじめ知っているかのようだな。そこまで驚かないと」

「それは… あはは」

しまった。素直にそう思った。

普通であれば何かしら動揺なり何なり見せなければおかしい所、それを知っていたため何も反応しなかったのがミスだった。

けどなんて言う、僕は転生者ですか？実は物語として知ってたから？馬鹿だ。頭がおかしくなったと思われる。

それは不味く何か言い訳を考えようとしていたが、バルパーは手前に出す。

「別にいい。君が特別なのは元から知ってるさ」

「元から？」

「ああだが今はその事は言えない。いづれ分かる時が来る……」

元から？えっ、何イザイヤさん何か秘密あるの？スゲー知りたいまじ知りたい。てか、何か原作と違っていい人？

「それより君たちは脱出計画をしているのかね？」

「はい」

「そうかならば脱出経路は私に任せろ。だが、後の事は出来ん…だからイザイヤ私に戦闘を教わるつもりは無いか？」

「戦闘…」

イザイヤはいくら転生したとはいえ、前の人生でも何かしら戦闘をした経験はない。

今の武器は剣を作って適当に振り、投擲するぐらいだ。

正直戦闘を教わるのはかなりいいと判断して、了承するとバルパーは本棚をいじり、階段をだす。

その階段を降り、出た先の空間で少しだけ剣を教わり、大量の魔犬との戦闘が始まった。

その間にバルパーはイザイヤの不在がおかしくないようにしていると、部屋から出かけて行った。

覚醒回？何それ？おいしいの？

何か唐突に色がついてビックリしました。

高評価付けて下さった方ありがとうございます！

今後とも頑張っていきます。

イザイヤとバルパーの戦闘は数分が経過した。

イザイヤは攻めに行くも必ずと言っていいほど剣を弾かれる。

この工程も見慣れるほどだ。

剣を弾かれたイザイヤは距離を取ると、持っている剣を槍のように伸ばし全力で投擲する。

投擲された剣は地面を抉りながら進む。それをバルパーは水平に飛び上がり、剣で切り裂く。

着地も無事に決めると今度はバルパーが攻め立てる。

地面に突き刺さっている剣をさらにもう一本引き抜きながら走り出し、2対の剣を交互に振る。

その攻撃一つ一つがイザイヤの全力に値する威力だ。

それを必死に受け流しているが、全ていなせずにかすり傷がだんだんついて行く。

「くっ！魔劍創造!!」
ソード・ベース

その掛け声とともに地面から大量に剣が突き出る。バルパーは咄嗟に後ろに飛びどうにか躲す。

バルパーが後ろに飛んだ事で隙ができ、手元に夫婦剣2セットを作り出すとそれをすぐに投げる。投げた物と同じ剣をさらに作り、今度はそれを持って瞬く間にバルパーの懐に入る。

「なッ！」

「かくよくさんれん
鶴翼三連!!」

投擲していた剣がまるで磁石に吸い付くように孤を描きながら、四方からバルパーに向けて飛ぶ。

さらに、オーバキルレベルの追撃として、イザイヤ本人が持っている

る剣による斬撃、上級悪魔ですら倒せる技だ。

しかしバルパーは過去に最上級悪魔を倒した経験を持ち、その時の勘は衰えるどころか格段に上がっていた。

自分の服に施されている防御術式に魔力を込め起動させると、飛来してくる4本の剣を無傷でしのぎ、イザイアの斬撃は手元に持っている剣2本を犠牲にして耐える。

「そんな！」

「まだまだ甘いな」

バルパーは剣が無くなったタイミングで回し蹴りをする。

その回し蹴りを手をクロスさせて防ぐが、威力を受け止めきれずに軽く吹き飛ばされる。

「ふう……トレス・オン 投影開始」

軽く数メートル吹き飛ばされるが、足を地面に突き刺すようにして勢いを止める。

落ち着け落ち着け、まず深呼吸だ。

軽く深呼吸した後前に両手を出し、気持ちを切り替える一言を発する。

その言葉を発した瞬間頭がクリアーになり、次にどんな武器を作れば良いのかが分かった。

だがそれを作るには分からないところが多すぎる、ならばと頭の中にある知識を総動員して作る。

両手の前に何か剣のような物ができ、それを思いっきり地面に叩きつけると、その形がしっかりと現れる。

その剣は魔剣の中でもトップクラスの魔剣『魔帝剣グラム』もどきだ。

「それはグラムかー」

バルパーは資料としてか見た事がなく、実際に見るのは始めてだった。

イザイヤの作ったグラムの形は、デュランダルの色のメインを黒に変え、形を少し禍々しくした物だ。

そもそも知識としてはあると知っていても、実物など見た事が無いので、デュランダルの形をモデルにした。

さらに龍殺しを抜くことにより、より破壊力を上げた代物となる。

その破壊力は叩きつけた地面が物語る。

この空間は五大龍王が暴れても1時間は持つぐらい、耐久力は高い。だがイザイヤの周りには大きなクレーターが出来ていて、推定直系5mあると思われる。

もしあの一撃を受ければ確実にバルパーは負ける。素手では間合いが足りない。ならばと地面に突き刺さっている剣を取りに加速する。

だが、それをイザイヤが予期していない訳が無い。

イザイヤは自分の身体以上の剣を肩に乗せ、バルパーより早い速度で後ろから追いかける。

バルパーはつかれるより先に剣を触るために手を伸ばす。それをさせないように剣を思いつき振り上げ、振り下ろそうとするがそれは大きな隙になる。

突然加速をやめ、イザイヤの方に振り向き腹部に発勁を叩き込む。

その威力はイザイヤの移動にかかっていた力とバルパーの力も合わさり、とてつもない威力になる。

発勁を喰らったイザイヤは口から大量の血を吐き出し、武器を落として後方にバウンドしながら飛んでいく。

数メートル飛んでいくと、備え付けの大きな岩にぶつかり、大量の土煙と共に勢いが完全に停止する。

土煙の上がついている場所にゆつくりとバルパーは歩いていく。

「咄嗟に後ろに飛んだな……ならばまだ立てるはずだ。こいイザイ

ヤ

その声に応えるように、土煙をなぎ払い立ち上がる。けれど、すでに身体は満身創痍だ。

「まだ… やれ… …る」

けど、武器はあと一回ぐらいしか作る力はない。またグラムを作る？無理だ… どうすればいい。

突然頭に言葉が響き渡る。

——俺を使え

誰だ！

——今はそんな事はいい… 勝ちたいだろ？

勝ちたい… ああ、そうだ勝ちたい！

——契約はなされた、叫べ！

頭なの中に響いた声に従うように、大きな声で叫ぶ。

『バランス・ブレイカー禁手化アアアア!!!』

イザイヤの手にはグラムですら可愛いと思える程の禍々しさ放つ剣が現れる。

「なんだあれは… 亜種の禁手か？… あれはまずい!!」

「があ、あ、あ、あ!!」

イザイヤは剣を握り1歩前へ出ようとした瞬間、身体中に伝わる激痛にその場で蹲る。

肩から頬にかけヒビのような物が入り、そこから黒い靄が飛び出て、背中に2つ山が出来る。その山は段々と大きくなり、今着ている服を破りそうになる。

その山の正体を知っているバルパーにとってはあれは危険だと判断し、急いで駆けイザイヤの隣に行くと、首に思いつきり衝撃を加え意識を奪う。

イザイヤが意識を失うとヒビと背中の山も消える。

教会脱出決行（そう簡単にいくわけもない）

今日は自由時間がなく、ずっと娯楽部屋との事だ。それを聞いた瞬間今日があの日なのだと分かった。

1度娯楽部屋に集められ大人が消えると、虞淵達数名を呼び今日について説明を始める。

最初説明した時は冗談だろ？と馬鹿にしていたが、自分が本気なのだ態度で示すと全員信じてくれた。

信じてくれた事に安心したため息を吐くと、懐から何個かアイテムを出す。

「これを渡すね」

「これは？なんだ…剣？」

虞淵が今触っているのは、地面に突き刺す事により一時的に結界を張れる魔剣。その他にも切れば解毒できる剣。切れば治療できる剣。

そして、今回最も重要なアイテム。

脱出の道の書かれた地図。

これは、バルパーさんが制作した物で、この日のために着々と進めていたらしい。

そこには道以外にも隠れ家の場所も記載されている。

虞淵は今まで探してきた物をたったの1人で揃えたイザイヤに、少しだけ恐怖していた。

一体何をしたらこんな事を…いや疑うのはなしだ。仲間だからな…

虞淵は自分に言い聞かせながら、紙を受け取り頭に詰め込む。

「タイミングはどうする？」

「それは大丈夫だよ。地面が揺れるぐらい大きな揺れが起こるから、それに便乗して実行してください」

「分かった…絶対に戻ってこいよ」

「もちろん」

2人は片手を前に出して、拳をぶつけ合わせる。

この日はイザイヤと琴音が一緒の日だ。

無論イザイヤがこの日なのはバルパーさんのご協力のおかげだ。
琴音は適当に選ばれた。

「緊張してるの？」

「う、うん…… は初めてだから……」

「?まあ頑張ろうよ」

琴音には今回の脱出の作戦は何も話していない。

理由としてはこの性格なので、もしかしたら隠せない可能性がある
ので言っていない。

それに脱出してしまえば変わらないし。

そんなこんなで大人2人に連れられ部屋に入る。

大人達は拘束のため手錠を持って近づいてくる。脱出では拘束さ
れると面倒なので先に潰す。

「これをつけッ！」

「よいしょー！」

イザイヤは上に飛び上がり、顎に向け思いつき蹴りを入れる。

今のイザイヤの蹴りは岩も粉碎する程度はある、その一撃喰らった
大人は完全に意識を失う。

意識を失った大人が倒れた事で琴音を拘束しようとしていた大人
がこちらを向く。

こちらを向いたタイミングで顔面にドロップキックをかます。そ
の大人は拘束のため軽くしゃがんでいたの、丁度いい位置に頭が
あった。

蹴られた大人は吹き飛ばされ、壁に背中をぶつけると口から空気を
吐き出し、トドメの一撃として腹部に爪先を刺される。

「がハッ」

「ふう…… 終わった終わった。さて行こうか琴音ちゃん」

「ふえ?」

「さあさあ、おっとその前に」

手元に集中し『魔帝剣グラム』破壊特化を作り出し、地面に全力で

叩きつける。

すると、地面がひび割れまるで地震のように揺れる。

これは虞淵達への合図でもあり、注意を引きつけるための物でもある。すぐにでも大人達が駆けつけるだろう。だから急がなくちゃいけない。

「早く逃げよ」

「あっ」

イザイヤは琴音の手を握ると急いで駆け出す。

琴音が転ばない程度に速度は出しどンドン進んでいく。ここから出するための道はすでに覚えているので、間違うはずが無い。

しかし、何故か出口のある場所が壁になっていた。

「これは…」

「どうしたの？」

道が分からないって素直に言うか？いやダメだ。それは不安を煽るだけ…… けど何で？本来なら

「出口があるはずか？イザイヤ」

「バルパーさん」

声のした方向にはバルパーさんと、今まで見たことのなかった大人が5人ほどこいる。

さらにバルパーさんの手にはここに保管されていると聞いていた
エクスカリバー・デイズトラクシオン
『破壊の聖剣』が握られている。

バルパーさんの手には武器、間違った情報に知らない大人達…これは誰がどう聞いても理解できる事だ。

「裏切りですか」

「違うなイザイヤ…裏切りなどではない。初めから味方などないないさ」

「くっ、」

イザイヤは自分の歯を噛み締める。

原作の知識でもあったように、あの男は危険な存在だった。そんな奴を簡単に信じてしまった自分が嫌いになる。

そんな思いで噛み締めていると、隣にいる大人が1歩前に出て背中から白い羽を4枚出す。

そうその羽は正しくアニメで見た、ミカエルと同じ形だった…。数は違うが。となるとその物の正体は丸わかりだ。

「天使：… 何でこんな所に…」

「ふふふ、ここは偉大な実験の場でしてね。あのミカエル様の指示でしていた事なのです。そんな場所に天使がいない訳ないですよ」
「まずい、もし戦闘になりでもしたら琴音を守りながら戦えるわけがない。」

バルパーさんには1度も勝てた事がなく、相手には天使がいる。絶望的だった。

さらに追い討ちをかけるように周りにいた4人の大人も、白い羽を2枚生やす。

ははっ笑える本当に笑える。

他人を信じた結果がこれだ。

けど、せめてでも琴音ちゃんだけは逃がす。

手に持つ『魔帝剣グラム』破壊特化を壁に投げつけると、その威力から壁に大きな穴があき建物を囲んでいる扉までも破壊した。

天使達はその光景に驚く。

教会の壁に関しては何も施していないので壊されるのは理解していた。だが扉に関してはもしものために、壊れないように力を使っていたのに目の前の少年はいとも簡単にこれを壊した。

もしこの少年が成長すると確実に我々の邪魔になる。

一瞬でそう判断した4枚の羽を持つ中級天使は、他の天使とバルパーに指示を出す。

「その2人を逃がしてはいけない！仕留めなさい！」

1枚羽の下級天使達は、手元に光の槍を作りそれを投擲する。

イザイヤはその槍が投擲されぶつかり瞬間に、原作でも木場が使っていた『光を喰らう剣』を使い、槍を無に帰す。

槍が消された事に驚き天使達の動きが止まったので、琴音の手を改めて掴み穴から外に出る。

「それで行けたと思ったのかね」

「やっぱり来ますか!」

琴音を後ろに隠すと、背後から突然現れたバルパーが聖剣を振り下ろすので、それを防ぐように『魔帝剣グラム』破壊特化を作りぶつける。

数秒拮抗すると2人とも剣をぶつけ合い少し距離を取る。

「勝てると思ってるのか?」

「やって見なくちゃ分からないですよ」

その言葉を聞いてバルパーは高笑いをする。

何がおかしいと聞き返す前にバルパーは勝手に語り出す。

「勝つか… ふははは!間違えているぞイザイヤ!我々の目的は決して勝負に勝つことではない!貴様らを生きて帰さないことが目的だ」
イザイヤは後ろに隠した琴音を見ると急いで駆け出し、突き飛ばす。

琴音は何故?と思うとイザイヤの身体を大量の光の槍が貫通する。

「いや… イヤあああ!!!」

琴音の叫び声が辺りに響き渡る。目からは大量の涙がこぼれ落ちる。

その涙をイザイヤは明らかに力のない指で拭うと、琴音の頬を撫でる。

「琴… ね… ちゃん… は… … 無事?…」

「うんうん無事だよ。イザイヤ君のおかげで… けど」

「なら… 良… かつ… … た」

懐から1枚の紙を出す。

その紙はイザイヤの血に濡れ、赤く染まり始めているが記載されている事はどうにか読み取れる。

それを貰い何を?と思うとまた突き飛ばされる。

突き飛ばされた事で尻餅をつく、イザイヤに駆け寄ろうと立ち上が

ると、目の前に炎の壁が現れる。

「なん…で」

「逃げて!… 僕が… 時間を… 稼ぐ」

身体に無数に刺さっている光の槍を、『光を喰らう剣』ホーリィレイザで消しなけなしの体力で干将・莫耶を作り構える。

「いやだ! 逃げたくない!」

「逃げて! 君に生きて欲しいんだ… 琴音ちゃん! 紙を見れば分かる… 最後の… 最後のお願いだと思って!!」

逃げたくない逃げたくないけど、身体が勝手に動く脳が逃げろと言
う。

やだやだやだやだ

いくら心で言おうとも死の恐怖に抗えず、イザイヤから離れてい
く。

琴音が離れていき姿が見えなくなった瞬間、干将・莫耶を地面に落
とし両膝をつく。

「ありが… とう… ございま… す… 待って… くれ…
て」

「私達は天使です。別れ際ぐらい待ちます。それに貴方を殺した後で
あの子も殺しますから… あの世で先に待っていなさい」

剣が無慈悲にも振り下ろされ、大量の血液が宙を舞う。

イザイヤの宿命

やっとこの章が終わる。これで原作に… 入れないだと…
もう少しオリジナルは続きます。

イザイヤの下には血の池ができる。

その池は留まるところを知らずにどんどん広がっていく。

人間が流したのであれば到底生きていられるはずもない…
う人間ならば…

「がアア!!」

「天使でも叫ぶようだな」

「貴様アア!!」

イザイヤにトドメを刺そうとした下級天使は、手に持っていた光の
剣ごと腕を切られそこから大量に血が流れる。

それを止めようと手で抑えているが、止まらずに逆に沢山なれてい
く。

この惨事を起こしたのは裏切ったはずのバルパーだった。

「なん…で…」

「はあ… イザイヤいつまでそんな演技をしている。はやくしろ最後
の目的があるだろ」

イザイヤは残念と言う顔をして懐からイザイヤの顔をした人形を
取り出す。

その人形を前に突き出すと頭を握りつぶし、そこら辺に投げ捨て
る。

すると、イザイヤの身体中にあつた傷が何も無かつたかのように消
え、落とした干将・莫耶を手に取りバルパーの横に並ぶ。

「それは身代わり人形だと！何故持っている！」

「貴方がたが渡したではないか」

「なに？」

中級天使はバルパーの返答で何故持っているのかを思い出した。

そもそも身代わり人形とは死以外の傷であれば何でも身代わりにできる人形だ。欠点として身代わりにする傷は受けてから10分以内しかできない。

だがそんなデメリット傷を受けてすぐに身代わりにすれば、あつても無いような物だ。

しかしその人形は絶対数が著しく少ない。

原因としては作成方法にある。

手順としては天使達が1ヶ月間一定の量の光力を人形に送り続け、やっと1個が完成する。そのためフェニックスの涙のように一般的に出回らず、教会のトップの人間が1個持っている程度だ。

そこをバルパーはイザイヤの危険性を話し1個念のために貸し出してもらった。

結局すぐにイザイヤに横流しにしていたが。

「どうして裏切るのですか？」

「？何を勘違いしている？… 私は初めから貴様ら屑の仲間になどなっていない」

「屑ですか…」

「ああ屑だ。私は確かに今回の実験の事を計画した。それは教会のためを思ってだった… 実験が進むうちにとある話があがった」

そこからは皆わかっている事だった。

被検体の処分。口封じの意味合いもあつたのだろう。それを聞いた瞬間バルパーは抗議した。

けれど誰にも聞き止められるずにどんどんその話は進んでいき、決定事項となっていた。

子ども達の命を守るために脱出の作戦を考えていた。その過程で

イザイヤと出会い今に至る。

今回も裏切ったふりをしたのは最初から作戦だった。

教会を囲んでいる塀は天使達が作った物で、破壊でもされればすぐに天使達が気づいてしまう。しかし、出るにはその塀を壊さねば出れない。なので違和感のないよう自然に壊すしかない。

バルパーの計算ではイザイヤの作った『魔帝剣グラム』で壊せる。だが逃げるために壊すと気づかれ天使達と戦闘になる。もし戦闘になればたちまち殺される。

だからこそバルパーは内側から騙し、イザイヤは外側から騙した。

結果は大成功してイザイヤ以外全員逃げられた。

「それでは始めましょうか… 僕の喧嘩を」

「違うな私達の喧嘩だよ」

「来るがいい人間！騙した罪高くつくぞ!!」

バルパーは片腕を失った下級天使と、周りに比べ1回りほどいい体格をした下級天使を相手にする。

イザイヤは残った3人を相手にする。

天使達は基本空を飛んでいるので攻撃を届かせるために、雲にまで届くほどの剣を地面から生えされる。

流石の天使もそれに驚くが別に避けられない速度では無いので、余裕で躲すと剣に視線を移したためイザイヤの姿が消える。

「どこだー!」

「どこにいる…!」

「…まさか上か!」

中級天使は全員の視線が下に向いていることに気づき、咄嗟に視線を上にあげると上空から雲すら隠す量の魔剣が降り注ぐ。

他の天使達も上に気づいたが、気づくのが遅く中級天使以外の天使は身体中に突き刺さりながら、地面へと落下していく。

降り注ぐ剣はある一定の場所だけで、そこから逃げるために全力で飛んだので、かなりの疲労が体を襲う。

1度その疲労を回復させるために地面に足をつくると、足を拘束するように魔剣が挟み合い、ピクリとも動かなくなる。

「これで終わりです」

「まさか人間がここまでやるとはね」

「ならあなたに聞きます。この事を決めたのは誰ですか」

「決めた…… ミカエル様かしら。もう十分だろさつさと殺してくれない？」

「そうですね」

「終わりよね」

「貴方達人間が」

「がハッ」

トドメを刺そうと振り上げると、突然身体の奥底から血がこみ上げ吐血をする。

何事だと腹部を見るとそこには光の槍2本突き刺さっている。

その光の槍を持っているのは魔剣で押しつぶして倒したと思っていた天使2人だった。

油断したな…… ミスった。

「ぶふア」

「イザイヤ!!」

倒れるイザイヤを支えようと駆け寄ろうとするが、2体の天使が前に出て妨害する。

静かに眠るように瞳を閉じて思う。

最悪だな・・・最後の最後でこれかよ・・・

——諦めるのか？

初めて禁手化した時と同じ声が頭に響く。

それと何故かこの声を聞くと安心する。

諦める？仕方ないだろ・・・だってもう無理だ。身代わり人形も1個しかなかった。これ以上何をしろって言うだよ！

——立てそれがお前にできる事だ。

そんな力はない・・・それにもう疲れた。頑張っただる俺！皆を助けるために動いた！それで充分だ！！2度目の人生もこれで終わりさ
いなら！

——本当にいいのか？

言いつつてんだろ！！

——心からそう思っているか？

ああ思ってるよ！

——最後に聞くぞ本当か？

.....嫌だ・・・また皆に会いたい。だってあんなに頑張れたのは、皆が好きになったから！だから頑張れたさ・・・けどもう無理だ・・・立ち上がれないよ。

——その言葉が聞けたのなら充分だ。貴様の枷を解こう・・・それにこんな堅苦しい言い方疲れるし。

帰れるのか？

——お前次第だよ・・・イザイヤ。頑張ってこい！

ああ、任せろ！！絶対にみんなの所に帰る！

視界はまた光を拾い立ち上がる。

イザイヤが立ち上がった事に驚く。どう考えてもあの血の量は致死量のはず。なのに何故立ち上がれると・・・しかし次の瞬間には目を疑う事になる。

イザイヤの方からヒビが広がりそこから黒い靄が溢れ、背中で大きくなり続ける突起物により服が膨らみ、数秒もすれば破れさる。

妨害する物がなくなると、さらに大きく広がっていき、イザイヤの背中には黒い翼が生える。

その翼は天使達のもつ羽を黒く塗りつぶしたように全く同じ形をしている。それを見て中級天使を驚愕の声をあげる。

「何故墮天使の翼を持っている！何故だ！」

その質問にイザイヤは答えることはせずに、手元に1本の剣を握る。

その剣は全てが同じ黒で作られていて形も歪、剣とすら呼んでいいものか分からない。しかしその剣にはたつぷりとイザイヤから溢れる黒い靄が付いていて、明らかに危険だ。

だからこそバレないように逃げようとしたが、ハイライトの消えたイザイヤの瞳から逃げる事はできない。

後ろにちよつとずつ下がっていた天使は小石に躓き転ぶ。痛！と思っただが今はイザイヤがいた事を思い出し前を向くと、すぐ目の前で剣を振り上げていた。

「はっ。」

その剣が振り下ろされ切られた天使は身体全体が粒子レベルまで破壊され死ぬ。

その光景を見たもう1人の天使は自分も殺されると、振り返って逃げようとする。

それを止めようと中級天使は声をかけようとするが、すぐにその相手は目の前で消える。

何が起きているのか理解ができない。

中級天使ですら目で追えない速度で動いて、一撃で仕留めていき墮天使の羽を持つ少年。

人外を持つてすらバケモノと思える。

「黒い翼：：だが墮天使と人間の子供など基本ヤツらが許すはずが……いや待てよ……確か昔に墮天使と人間の子供が……」

イザイヤの正体を掴むためにかなり昔に見た文献を思い出す。

その内容すらも殆ど覚えていないが、人間と墮天使の子供ができそれを処分に行ったと言う話だ。確か親が300人ほどいてその全員を処分したとか……

関係ないかと頭を横に振りイザイヤを見ると、突然苦しみだし片膝をつくと新たに翼が2つ生2対2の翼になる。

ありえないこんなスグに進化するなど……いや待てよそれは普通の墮天使の子供であればだ……もしそれが……

「そうか分かったぞ!! 貴様の正体! 貴様はアザ」

その中級天使の視界は半分に分かれる。切られたということにする気づくまもなく消えていく。

「ひいー!」

「逃げろ!」

急いで空を飛んで逃げようとするが手元に作った2本の剣を投げ、その剣が突き刺さると身体が破壊され死ぬ。

それは一瞬の出来事だった。時間にして1分。

バルパーは聖剣を地面に落として驚く。

今の工程は目で見ていた限りはただ前に動いて切る。そのの繰り返し。ただそれだけの動きで天使達を殺し尽くした……異常。異常以外の何物でもなかった。

それと同時に思った事もある。終わったのだと……



禁手で墮天使となり天使達を瞬殺したイザイヤは、全滅を確認すると禁手を解く。

解いた瞬間身体中が痛み前に倒れる。それを瞬時に察しバルパーが受け止め地面と一緒に座る。

「終わったなイザイヤ」

「はい… やつとです…長かった…」

「そうだな… どうする合流地点まで送ろうか？」

「大丈夫ですよ、自分で歩けますから」

「しかし」

「大丈夫です。それよりバルパーさんは何をしますかこの後？」

イザイヤの質問に今後何をしたいか考える。

そう言えば脱出させる事は決めていたが、それ以降は決めていなかったことに気づく。

自然と笑みが零れる。

こんなダメダメな作戦が通用した事。上手くいった事。何から今まで嬉しいことづくし。

その笑みに合わせるようにイザイヤも笑う。

2人は数分間もの間今までの苦労を労うように笑い合う。

笑い合いが終わるとポツリと呟く。

「教会に戻るよ」

「何ですか？」

「イザイヤ達のような子供がもう産まれないようにするためだな」

教会に戻ると言うことは周りから責められるなど茨の道だ。そんな道をあえて進む… 凄いと普通に思う。

なら全滅って話になるんだろう。隠れながら生活するのは至難の技だ、だから少しでも追手を軽くするために死んだことにするんだろ。

となるとイザイヤの名前は使えないな……どうする？前の名前を使うか？いやダサいな。せつかくここまで来たんだ、何か別の名前を……

ふとバルパーが目に入る。

そうだせつかくならと名前をつけてもらおう事にする。

「名前か……活動場所はどこだ？」

「えっと……日本かな？」

「日本か……」

頭を上下横に振りながら考える。

名前つけとはそこまで重要な事なのだろう。

「木場……祐斗、木場祐斗なんてどうだ？」

「木場祐斗？」

「ああ、フェンリルの牙のように強くなれと言う思いを込め木場。祐斗は日本に多い名前だと聞いてな」

もしかしてリアスもそうなずけたのかな？そう思いながらも新たな名前を呟く。

「木場祐斗」

「嫌か？」

「ううん気に入ってるよ……父さん」

「え、」

「名前をつけてもらったんだから父さんだよ」

「しかしだな」

「ありがとう父さん」

「……全くこのバカ息子め」

「はは、怒られちゃった」

そこからは他愛もない話を数分するとイザイヤが立ち上がり、皆との合流地点へと向かうために別れる。

別れる前にハグをし合うと、森の中へと入っていく。バルパーの姿が見えなくなるほど中に入ると、その場に崩れ落ちるように倒れ胸を抑える。

「があ、ああ」

その痛さからエビゾリをするほど曲げる。

せつかくカツコつけたのに、目の前で倒れるわけにもいかずわざわざどこまで来て倒れたのだ。

「ははっ……後少しなだけどな……」

そう後少し後少しで全てが終わる。

しかし世界はやはり残酷だ。

イザイヤ改め木場祐斗はそこで瞳を閉じて、長い間眠り続けることになる長い長い7年間の間も。

その倒れたイザイヤを見つめる1人の少年。その少年の肩には神器と思われる槍が担がれていた。



世界は思い通りにいかない。

木場祐斗は倒れ。

虞淵達は合流地点に行くも、いくら待っても現れず死んだと判断してその場を後にする。

琴音は必死に走ったせいで自分がどこにいるのかもわからず、死にそうな所を1人の赤い髪をした少女に助けられる。

例え歯車がズレたとしても勝手に歯車は動き出す。

禍の団編

新たな出会いそして復活のK

かの有名な聖剣計画はバルパー・ガリレイが主犯とし、異端の烙印とその危険性からとある山奥に牢獄されている。

そんな事件から7年も経つ中ようやく長い眠りから1人の少年が目覚めようとしていた。

何か久しぶりに目を開くような…

そんな感覚で目を開き最初に視界に入ったのは

知らない天井だ…あれ？口動かないんだけど…何故だい？

知らない天井だと言おうとしたが何故か口が動かない。疑問に思いなながらも立ち上がろうとすると、今度は身体も動かない。

どうして？何故？そんな言葉が頭をグルグル回ってる時、扉らしきものが開く音がして金髪の女性が顔を覗いてくる。

その女性と目が合うと『目と目が逢う瞬間好きだと』的な音が流れるが今は無視。女性は起きた事に驚き慌てて外にでて、大声を出すとさらに大きな物音を出しながら部屋へと突入してくる。

「やつと起きたか」

お前は誰だ？

と心の中で聞く。無論口が動きません。

次に顔を覗いて声をかけてきたのは、軍服を着ている青年…青年？…何か違う気がするがまあいいか。

返事が無いことを疑問に思い青年は声をかけ直す。

「？どうし」

「筋肉が落ちているのが原因でしょう」

「…筋肉か…まあ7年も寝ていればそうなるか」

今度は金髪の男が乱入して青年の言葉に重ねるが、今はそんな事はどうでもいい。問題なのは7年そのキーワードだ。

7年その言葉で頭の中がクリアーになっていき、何が起こったのか全て思い出した。

人間をやめ墮天使化をして、その代償として意識を失う……まさか7年長すぎる。

皆どうしてるかな？と考えていても青年達の話はどんどん進んでいく。

「そうなるややはり当初の予定通りか……」

「ええそれしか無いでしょう」

「あまり気は乗らんが……頼むぞオーフィス」

「我了解」

オーフィス!!何でここに?てか待ってオーフィスがいて軍服?……曹操やん。オワタ……よく良く見ると金髪の男アーサーやし。てことは……禍の団じゃん!!

まさかテロリストに拾われるとは……皆に拾われておきたかったけど、まあ合流地点とはかなり遠いし無理だとは思ってたけど、テロリストか……キツイな。

そう今いるのは原作でも大暴れしていた渦の団。トップはお飾りのオーフィス。指揮をとっているのがかの有名な曹操の子孫で、最強の神器を『黄昏の聖槍』トウルー・ロンギヌス持っている曹操と呼ばれている男。

他にも『聖王剣コールブランド』と呼ばれる最強の聖剣を持っているアーサー・ペンドラゴン。

世界最強のオーフィス……やめて!乱暴するきでしょ?エロ同人誌みたいに!

視線で訴える物もことごとくスルーされ、オーフィスが頭の近くまで近寄ってくる。

「始める」

その言葉と共に額に触れ辺りが一変する。

ベッド以外は全て真っ白に変化する。風も何かが動く音もない。まさに『無』。

「ここは次元の狭間。筋肉戻せって言われてる」

次元の狭間ですかさいですか……えつまつて筋肉戻すの貴方が担

当するの？。貴方最強の龍でしょそんな人に教えられたら

「死ぬ？大丈夫手加減する」

おい！今心読んだろ。そらならさ！ほら・・・色々あるでしょ。

「？性処理？」

確かに確かに7年ぶり溜まって・・・違う、そうじゃない。

今でこそこんな感じにふぎけていたが、筋肉を戻すのは三途の川を何回も見ることになる。

そもそもオーフィスは人間の限界を知らなさすぎる。

ありえないでしょ。リハビリでケロベロス連れてこられても困るし、最終試験とか言ってティアマト連れてこないでよ。

まじ死ぬ冗談抜きでええ!!!

「巫山戯るなよ人間!!」

「死ぬうう!!!」

ティアマトから放たれる魔力弾を必死に躲しながら、遠くへと逃げる。オーフィスはこれで筋肉が戻るか分からないが、それでも続ける。



「そろそろか」

曹操は壁に掛けられている時計を見てそう呟く。

そろそろとは木場が帰ってくる時間である。時間にして6時間と4分待っていた。あと1分過ぎれば帰ってくる。

木場は筋肉を戻すためにこのこの時間とは隔絶されている、次元の狭間に行っている。

そこでは1日過ぎることに我々の住む世界では1分経過する、まさに精神と時の部屋状態だ。

前に修行の一環で使わせてもらっ時はすごかった。なにせ飯も水も要らずにずっと戦えた。

「そうね・・・一応大量のご飯はあるけど」

「必要だろう。何せ多少の飯しか渡してないからな」

「そうね」

そんな無駄話をしている間に針は五分をこえ、6分を指す。その瞬間目の前に大きなヒビが現れ、そこから金髪の長髪になりしつかりと立っている木場が出てくる。

「なっ」

「おいー」

「く」

「ふ」

木場の帰りを待っていた禍の団幹部の、ヘラクレス・ジャンヌ・曹操は武器を構え警戒する。

それはベッドに横になっていた時のような優しい雰囲気ではなく、まるで全てを拒絶するかのような雰囲気。

その雰囲気のせいで手が震える。

今まででもたくさんの人外と戦う中似たような経験があった、それは格上の相手だ。だがその時も仲間がいると安心し自然と戦えてた。

しかしこれは違う。

心は戦いたいと言うが、脳が拒絶し逃げろと言う。

他の仲間も全員同じ状態らしく手が震えている。

そんな曹操に木場は近づいていく。

「止まれ！それ以上くくるなら」

木場は刃を触りながらその場へと倒れる。

「へ？」

「ぐ…飯…」

その言葉と同時に部屋全体に木霊する音で鳴らす。

腹かと皆が安心して地面に座り込む。

どこ？と催促する木場のために用意していた数キロにも及ぶ食料を目の間に置く。

目の前に食料が置かれた瞬間、目から赤い閃光を放ち食料の上を通り抜けると、一瞬で大量の食料は消え失せる。

「ふう…ご馳走様でした」

「お、おう」

異常の速度に軽く引く。

「えつと曹操さんこんばんは。会話するのは初めてですよね」

「そうだな。よろしく頼むよ」

2人が握手をするのを皮切りにその場にいる全員と握手していく。先程の霧囲気がまるで嘘のように消え、既に馴染もうともしている。一体どちらが本性なのか分からない。

木場が何故そんな霧囲気を纏っていたのかはオフィスが原因だ。まさかグレートレッドと戦わされたのだ、軽く怒っていてそのせいで破壊の霧囲気を纏っていた。

それと食事は全く何も食べておらず、そのせいで一瞬で食料の山を消した。

まあそのお陰でどうにか馴染めたのだが……

木場さんマジやばくね

何かいつの間にか300人行きそうでビックリしました。
執筆が久しぶりなので少し書き方変わったかも。

何か今期はアニメ豊作ですね。

特にロクでなし魔術講師の禁忌教典は最強だと思います。どこまでやるかは知りませんが楽しみしています。

リエル愛してるうう!!

食事を高速で終わらせ伸びきった髪を魔剣で切った後、ジャンヌが入れた少しお高めな紅茶を啜る。

「うん……無理だこれ……ガはっ」

「おいおい大丈夫か?」

「だがは!じょうぶふだ」

「一回落ち着け」

前世では全くと言っていいほど紅茶が飲めなかったので、この身体なら飲めると思ったがやはり飲めず、むせた上に口から零れでる。

曹操は手のかかる弟を思い出し苦笑いしながら、新たに緑茶を入れる。

緑茶なら飲めるだろうと差し出し話を続ける。

「ふーふーふー」

「筋肉が戻ったようで何よりだ」

「ふーふーふー」

「早速で悪いが君には私達の仲間に」

「ふーふーふー」

「いつまで冷ましてるんだ!猫舌にも程があるだろ」

「すみません猫舌なもので……ずっ熱!」

曹操は深いため息を付くとかなりめんどくさいヤツを勧誘してるのでは?と思い始める。

周りの皆もそうらしい。

格闘すること数分。

熱も落ち着いたのか緑茶全てを飲み終え、やっと本題に入れる。

「我々が君を助けたのは仲間になってももらいたいからだ」

「仲間？そもそもこここの説明もされていけないんですが」

「そうだったなすまない」

説明していなかった事にたいして軽く謝罪をすると、どこから取り出したか分からないホワイトボードを使って説明を始める。

やはりここは原作との違いはないみたいだ。

ここは『禍カオス・ブリゲードの団』の英雄派の本部。とある山奥にある秘境に位置しているらしい。

それとここにはメインとして出てきた曹操達に加え、まだヴァーリと出会っていないためここにいるアーサー兄妹、原作にはあんまり登場しなかった他の団員達がいる。総勢150人だそうだ。

そんな英雄派の目的はやはり変わっていないく、英雄の子孫だから人外を倒す。

これは原作を見ても思っていたが、

可哀想な人生だな」

「なに？」

しまった声に漏れてた。てか心の声漏れすぎワロタ。

……はあ…… やってしまった物は仕方ない、もうどうにでもな

れ！

「君達は英雄の魂を受け継いでいるから人外を倒すだよね」

「ああそうだ。私達は英雄なのだから」

「それが可哀想なんだよ。だって君達は自分の意思で行動していないからね」

「自分の……意思？」

原作を見てていつも思ってた。

「いつだって人外を殺すのは」とか「俺らは英雄の」だとか全くもって自分の言葉で喋っていない。

何なのさ英雄って言わないと会話できないの？ってレベル。

「君達は英雄である前に1人の人間だ。ならば何かしら夢があるはずだよ」

周りにいる皆を見つめる。

すると、ぽつりぽつりと夢を語り出す。

「私は服屋かな。あんなきらびやかな服作ってみたかった」

「俺は地元のように畑を作りてえな」

「釣りをしたいな」

どんどん自分の夢を語っていく。

その語る時の表情はどこか楽しげだ。

やっぱり自分の夢あるじゃん。

じゃあ最後に君は？

曹操の方を見つめる。

曹操は何かを言おうと口を開くがすぐに口を閉じる。

木場は曹操が語るまで聞くスタンスなので、見つめ続ける。

その視線に耐えられなくなり口を開く。

「一度戦ってくれないか？それで分かるはずだ」

「いいよそれじゃあ行こうか」



曹操と戦うためにオーフィスの作り出した空間へと行く。

その空間に着くと曹操は神器『黄昏の聖槍』を取り出す。

その槍の刃を木場に向けて突き出す。

それじゃあこの状態の本気出そうかな！

トレース・オン
「投影開始」

両手の先に禍々しいオーラが集い、それが結合するといつぞやに使用していた『魔帝剣グラム』を二本作り出す。

その2本を見た曹操は顔がゆがむ。

最強クラスの魔剣を二本も出さられれば恐怖もするだろ。それに

曹操の身近には本物を扱う者もいるのが余計に後押しをしているのだろう。

「ふう…… イザイヤ行くぞ！」

「違うよ今の名前は木場祐斗だよ!!」

地面を削る程踏み抜いた曹操は1秒にも満たない時間で木場の背後をとる。

そのまま聖槍を振るおうとするが地面から大量の魔剣が飛び出し、1本の魔剣を踏み台にして跳躍しその場から離れる。

跳躍がそこそこ高く着地に片膝を付いてしまい、視界を上げた時には木場の姿を見失う。

「しまったどこにいる」

辺りを見渡すがいない。

そもそも曹操の戦い方は相手の情報を収集し、予め対策を立て戦う。なので一応木場についても集めていたが、根本的に情報が足りない。

それでも今まで戦いを全く経験していないと言う訳でなく、この場合の敵の移動位置は予想できる。

「上かー!」

「そうだよ」

聖槍の切っ先と『魔帝剣グラム』の刃がぶつかり合う。しかしぶつかり合っているのは1本の『魔帝剣グラム』のみで、もう1本のグラムは振られていない。

こうなれば不完全ながらも使うしかない!

曹操は意を決して未完成な禁手を使う、槍の形状は変化はしないが背後に光の輪が現れ、三つの黒い球体が浮かび上がる。

木場は曹操の禁手の能力を原作を通して知っているので、黒い球体は何なのかも知っている。

黒い球体の中には対木場用のような代物もあり、すぐに距離を取る。

今曹操のそばを浮いているのは『輪宝』『女宝』『象宝』のみだ。『女

『宝』に関しては女にしか作用せず『象宝』は空を飛ぶことしか出来ない。まともに戦闘に係わるのは『輪宝』だけだ。

さらに言えばこれが木場と相性のいい能力だった。木場の武器を破壊できるのだから。しかしタイミングを見謝れば対策をされてしまう。

だからこそ普通なら最初に使わない。

だが、曹操はあえて最初に使う。これは相手も知らない事だ。下手に隠して奥の手があると警戒されると面倒なので、初めに使って速攻で蹴りをつける。

その球体を槍の用に形状を変え木場に向けて突撃させられる。

それを木場は二本のグラムを交差させ防ごうとするが、それは悪手となる。

二本のグラムは『輪宝』ともに消え大きな隙になる。

「まさか！最初から使うのか！」

「何故とは聞かん。だが終わりだ！」

曹操はグラムが砕かれ何も防ぎようのない木場に、聖槍を突き刺す。

聖槍は木場の腹部を直撃し、柄の部分を伝って生暖かい赤い液体が流れる。

曹操は勝ったと確信を持った瞬間まるで地面にガラスのコップを落としたように、木場の身体が砕け散る。

「いつからそれが僕だと錯覚していたんだい？」

「なっ！」

背後に木場がいることに気づく頃には、手に剣の柄を当てられ槍を落とし、そのまま両手を後ろで締めあげられて地面に倒れる。

木場がしたのは簡単な事だ。

魔剣で自分に擬態出来るものを作り、それを使用して人形を作ると魔力の糸で操っていた（わかり易く言えば傀儡のようなもの）

それを曹操が視線を外した最初の瞬間に入れ替えた。自分は光を屈折させて姿を消していた。かなりな初見殺しの技だ。

組み倒された曹操はポツリと呟く。

「なるほどな．．． やつと分かったよ。 そうだな自分の夢を語るよ」
そう言つて曹操は自分の出生を話した。

普通の家に生まれたのだがやはり曹操と言う名前は、英雄と言う印象よりも悪と言つた印象が強く、物心つく前に捨てられたそうだ。
そこをとあるおじさんが引き取つた。

その人の生活は楽しく毎日が楽しかった。 しかしそんな日も突然に終わり、逃げ出していたはぐれ悪魔におじさんは殺された。

そのショックで神器も目覚めどうにかおじさんの仇を打てたが、そのショックは酷く暫くの間寝込んでいた。

その時に夢でおじさんとの楽しい思い出が蘇り、生きる元気が湧いてきた。

それで決めた「自分と同じような人間を作っちゃいけない」

そこからの行動は早く瞬く間に自分と同じような人間集めた。 しかしいつからか目標が変わつていき「人外を倒す」それになつてしまった。

「だからだ．．． 決めたよ。 私は初心に戻り皆を救う。 それだけだ」
「やっぱり君は立派な英雄だよ」

木場は手を差し出し曹操はその手を掴んだ。

自分の本当の居場所

何か英雄派（笑）がかっこよく見えてきた。

次元の狭間から帰ってきた2人は目の前にポツンと置かれている、ポカリをがぶ飲みする。

ポカリの側には雑な字で『疲れたでしょ。飲んでいいわよbyジャンヌ』と書かれたメモ用紙が置かれている。

2人はジャンヌらしいなど少し笑う。

「さて皆に説明せねばな…それとどこか適当に役職を付けることになるがいいか？」

「……いいよ」

まあ曹操を倒したんだからある程度役職ないとダメだよな。そこは諦めるしかないか。

曹操は木場の返事を聞くとスキップしてその場を後にする。確かにキャラ崩壊してる気がするが無視だ。

曹操の足音が消えるまで待ち消えた所で、近くにいるであろうオーフィスを呼ぶ。

すると近くにあるタンスの扉が開き、中で足を抱えて体操座りしているオーフィスが現れる。

ぶふうう!!危なかった!ロリコンだったら死んでる所だぜ!!
ふう…俺はペドフィリアだからな…あれ?そっちの方が不味いのか?

1人で心の中で会議をしていると、いつの間にかすぐ近くに来ていて顔を覗いてくる。

「ジーーーー」

「えっとどうしたのかな?」

「ジーーーー」

「本題に入れてることかな?」

コクつと首を縦に振るとまた「ジーー」と言いながら見つめてくる。どこぞの宇宙人だよと思いがら、もう一度次元の狭間を作って一緒に来てもらう。

次元の狭間に来るとひとまず上半身の服を脱ぐ。

いや別にいやらしい意味は無いよ。そこーふうーとか言わない！てかどこで知ったのそんな言葉！そんな言葉を言う子に育てた記憶はありません！あつ、さつきあつたばかりだから当たり前か。

テヘペロと下を出して頭をぽかんと叩こうとしたが、木場の顔でやったらかなりシニールになるのでその気持ちを抑えた。

オーフィスに見てもらうのは原作の木場には無かった物だ。

「これを見て欲しいんだ。

フランス・ブレイク
「禁手」

あるワードを呟くと背中に黒い鴉の羽のようなものが生える。その数は教会脱出時よりも増え、現在は5対5の系10枚の羽が生えている。

目からはハイライトが消えるが、ひび割れは起こらない。今は制御が出来るので抑えられる。

この姿を見たオーフィスは一瞬頭を横に傾げると、羽をペタペタと子供が玩具で遊ぶように触れ、羽を数枚もぎ取り食べると確信を持つた用に語り始める。

「血の中に薄らと墮天使の血が流れてる。生えた理由は神器にある」
明らかに説明不足のような気もするが、こちらもあらかた仮説が立っていたので、オーフィスの発言により確信を得る。

薄らととの事から何世代もこの血が受け継がれてきたのだろう。初めは朱乃さんのように普通に羽も出せたが、次第に出せなくなり忘れていったと思う。

そこで奇跡とも言える事が起きた。

神器の禁手だ。

俺の神器は『魔剣創造』ソード・パースそう『魔』なのだ。

墮天使とは聖なるチカラから魔・悪に落ちたものを言う。

聖は元から持っていた聖剣の因子が補い、魔の力を神器の禁手が補った事で目覚めたのだろう。

正しく神の不在だからこそ起こりえた奇跡。

てかこの木場祐斗の存在そのものが、神の死を意味していると言っても過言ではない。

まあここまでは分かった。問題はこの次だ。

抑えてた力を解放する。

上半身裸になった事で分かったが、ひび割れは心臓の箇所から伸びていて、太ももく顔の頬に向けて広がっている。

やはりそのひび割れからは謎の黒い靄が放出される。

その靄にオーフィスが触れると、触れた指先が粒子になって消えてく。

それに驚き急いで魔力を当て治療をする。顎の部分に手を当て暫く考える。

「分からない」

「ダメかな？」

「無理。我は見えてきた知識しかない。こんな物見た事ない」

「そっか」

羽のことについては分かったが、この靄については以前不明。今は諦めるしかないかと羽をしまう。

すると少し後遺症がでて、ふらっと倒れかけ片膝をつく。

「魔力が殆どない。羽が原因？」

「多分ね。子供の時もそれが理由で倒れたんだと思うよ。今は多少なりとも増えたから、これだけですんでるみたいだね」

立ち上がろうとするも足が痺れて立ち上がれない。そんな中オーフィスが段々と近づいてきて、突然唇を奪う。

は？いや、あのえあ

そのままオーフィスは舌を入れ口の中をまさぐる。時間にして1分。童貞の男には充分堪える時間だ。

舌を抜いて唇を離すと一筋の涎が伸びる。

「何…を？」

「我魔力上げた」

「魔力？」

「魔力少ないのが倒れる理由。なら魔力増やせばいい。だから私の無限に近い魔力の半分を上げた」

半分？ちよつと待っててことは、まさか今天龍より魔力持つてんの！ふえあ！何それ！とんだチートだよ。

「どうして？」

「我お前のような人間見てきた。その人間達は皆死んでいった。何故かは分からないけどお前に死んで欲しくない」

はは、感情ないとか言われてるけどちゃんとあるじゃん。

それに感動しオーフィスの頭を撫でると、少し擦ったそうにして木場の肩に乗る。

「どうしたの？」

「我どうすればいい？」

「？」

「話聞いてた。戦わなくなれば、私の利用価値が無くなって捨てられる」

捨てられる。何か道端に捨てられてる子猫みたいだな。うん可愛い。

随分と可愛い事で悩んでいたオーフィスに、クスツと笑うとオーフィスが頬をふくらませる。

「笑い事じゃない」

「ごめんごめん。随分と可愛いこと言うなって思ってたね」

「ぷー」

「だつてさそれ言うって事は、ここが居心地がいいんでしょ？次元の狭間よりも」

「居心地…いい。けど我以外は」

「思ってたない？そんな事無いと思うけどな。後で聞いてみるといいよ」

「分かった後で聞く」

2人は親子のように仲睦まじく次元の狭間から出る。



いつもの世界に戻ると目の前には、曹操とヘラクレスとゲオルグとジークが麻雀をして待っていた。

「すまないロンだ」

「ち！また負けた」

「馬鹿な作戦は完璧なはずだ」

「はあ… お小遣いが減る」

「賭け麻雀かな？」

「む、帰ったリーダー」

「リーダー？」

何か聞き捨てならない言葉が聞こえた気が。

「？役職を決めていいと言ったのはリーダーだろ？」

「けど僕は」

「あんまり居ないか？別にいいさ。名前さえ貸してくれればな」

ならいいのかな？てか今はそんな事じゃなくて。

後ろに隠れているオフィスの背中を押して前にだす。オフィスは身体の前で手をモジモジさせながら、何かを喋ろうとしてやめる。

何これ可愛いすぎる。

「どうしたオフィス」

「我… 我の事… 嫌い？」

ぶふうう!!

その場にいた全員が鼻を抑え、飛び出しそうな鼻血を抑える。

「我考えた。戦わなくなったら、不必要。いらぬ子だから」

「全くオフィスは変に考えすぎだ。ここがオフィスの居場所だろ」

「我… の…」

「そうだけぞオフィス。それにお前の事嫌い？そんな奴いるはずないぜ！」

「ああ全くだ。ずっとこの先もずっと一緒だろ？何せ家族だからな」

「俺も同意だ」

「なに…これ…」

オフィスの目からは大粒の涙が溢れる。

それは生まれたきた中で初めて必要とされた瞬間だったからだ。初めてここにいたいと思ったからだ。

次元の狭間こそが自分の居場所。そう心に言い聞かせてきたが、しつかりと居場所はあった。

だから心からこの言葉をみんなに贈る。

「我…皆の事大好き」

その一言により抑えてた鼻血が溢れ、5人ともその場に倒れビクンビクンと痙攣を起こす。

「大丈夫？」

「だだだ大丈夫だ。ももんんだいいいい」

「ならよかった皆がいないと我寂しい」

もう死んでもいいのかな？

そう心に思い5人は意識を失う。



木場の目が覚めたのは既に夜のようにで辺りは真っ暗だ。

丁度いいと少し身支度をする。

まあ持つものと言っても非常食ぐらいだが。

持っていくものを大量に詰めた鞆を背負い、1人バレないように外に出る。

なんかあの家族を見てたら余計に早くみんなの元に戻りたくなつた。

結構長い間会ってないから、きっと皆成長してるだろうな。

皆がどんなに大きくなっているのか胸が期待が半分、もし忘れられてたらと悲しい気持ち半分と言ったところだ。

無事に差し足忍び足で外にでると一度深呼吸して、英雄派のアジトに一礼する。

「ありがとうございます。また会えたら」

木場は背を向け皆の元に向けて足を前に出す。

「ふむ随分とかつこよく終わらせたな」

「だから言ったじゃない。てことで私達の勝ちね」

「すまないギャンブルに強くてすまない」

「また負けた！」

木場の目の前には曹操、ジャンヌ、ヘラクレス、ジーク、ゲオルグ、オーフィスが待ち構えていた。

「何で」

「何コンビニ行こうと思っただけ」

「私は服の雑誌買わなくちゃ」

「俺は畑に植える種だ」

「釣り道具を買いに」

「俺はふっ… 全てを語らない方がカッコイイだろ」

「ゲオルグ中二病？」

「皆…」

「たまたま会ってたまたま行く方が同じなだけだ。それならたまたまリーダーの家に行ってもいいんだろ？」

心強い味方が増え、皆で木場の家に向かうことになる。

死んでないって信じてくれないよね

やっちまったぜ (・>ωω・)

右目を邪王真眼してしまったので、その反省の意を込めて連日投稿

！

それと視点がコロコロ変わるので注意を

ゆゆゆの映画楽しみだぜ！

過去の記憶を頼りに森の中を進んでいると、何故だか同じ場所をグルグル回っている気分になる。

やはり過去の記憶が行けないのかな？と考えていると曹操が一つの木に切り傷をつけて、また進もうと言う。

それは良くアニメとかで見かけるアレだと分かったので、そのまま進むでみる。すると近くの木に曹操が付けた傷が残っていた。

「ゲオルグ確認できるか？」

「少し待て……ふむ……ほほう……なに……」

ゲオルグが独り言を語り始め地べたに座り込む。座り込んだから数分が経つと、何か満足した表情で立ち上がる。

「神器の能力だな」

「壊せるか？」

「余裕だ。いいところ行って二流程度の力だぞ？この一流すら凌駕する俺にかかれば余裕だ。まあ破壊するとランダムにテレポートするっばいかな」

「防げるか？」

「無理だな。ここは既にあちら側のテリトリー。あちら側のマイホームだ、そこに侵入出来るだけでも上出来だろう」

「仕方ないか……それでは各人警戒しておけ。最悪戦闘に発展する可能性がある。だが、決して殺すな、私達のリーダーの家族だ絶対に生きて合わせるぞ」

木場以外の皆が「おう！」と声を上げて目的を決める。

も見当たらない。

畳は六畳で竹刀などが飾られている事から、何かしらの道場では？
と考える。

結局それ以外分ならず出口がない……寝るか。

正座していた足を崩してその場で横になる。

「！」

「やっと出てきた」

屋根裏から the 忍者の格好をしている子供らしき人物が、短刀を
向けて落ちてくる（体格が子供だから短刀しか持てない）

その短刀を簡単に白刃取りすると、すぐに短刀から手を離し飛び離
れる。飛んでいる間にも攻撃の手を緩めず、10個ほどの手裏剣を投
げる。

ジークは手元にグラムを持ち全て叩き落とす。

「話をしよう」

相手の子供は首を横に振り否定するが、それでもジークは勝手に話
を続ける。



「ああ？何処だここ？」

「分からない」

「おっ何だいたのかオーフェイス」

「我参上」

オーフェイスのボケ？にヘラクレスは高笑いをする。その笑いは虚
しくその場に響き渡る。

2人がいるのは廃工場のように、そこら辺にボルトやネジが転がっ
ていて、壁のいたる所が欠けている。

爆発するか？と考えていると聞いたことのない二人の声が聞こえ
る。

「敵きた！」

「敵きた！」

「お姉え敵だよ敵」

「そうね皆殺しよ皆殺し」

その2人は双子なのか顔が全く同じで、唯一の違いは服の色ぐらいだ。

その双子がとてつもなく物騒な事を言っていて、何か聞いてた話と違うなど首を傾げながら、オーフィスを後ろに隠して前が出る。

「我は」

「おいおい子供ぐらい守らせろ」

「かつくいいい！」

「けど敵よ」

「残念」

「一応言っとくぜ俺は子供殴る気は無い。だがクソ餓鬼は別だ…大人の教育をしてやるよ」

「死んじやええ!!」

「ぬるいぞオラー！」

双子は地面に転がっていたナイフを突き刺しに行くと、ヘラクレスは拳をぶつけてナイフを粉々にする。

「硬すぎいい！」

「ならこれ使おう！」

双子は手に光を纏わせるとその光が変化し、独特な形をしたナイフになる。

その形状はかなり歪で先端は軽くうねっていて、柄の部分の装飾に罫罫が付いている。明らかに何かしらの神器だと判断し、警戒を強める。



「あら？ここは」

「何だジャンヌと一緒に来たか」

「ゲオルグ何か知ってるの？」

「もちろん。アレを破壊する時に誘われてな、それでここに来た。まあ相手はランダムだと言われていたが…まさか貴様とはな」

何やら知ってる風な事を話しているが、全く要領を得ずオーフィスの通訳がいるのかな？と考え始める。

辺りは何かの城の前の中庭のようで、目の前に大きな扉がある。その大きさは5mはありそうだ。

その扉を感心して見ていると扉が勝手に開き始める。

「ようこそおいでませ」

その扉が完全に開かれると、そこには長く綺麗なブロンドヘアー靡かせ、スカートの裾を少したくしあげて会釈をしている1人の女性がいた。

突然の事にビックリしていると、女性がこちらへと指示をしてきた。

最初は拒否しようとしていたが、ゲオルグが勝手について行き仕方なくジャンヌもついて行くことになる。

城の中に入るときらびやかな夢にまで見た、豪華絢爛な光景が広がっていて、白の中をずっと見つめている内にとある部屋へとつく。

その部屋の中に入ると奥に本棚とイス机があり、その前にある小さな椅子に座らされる。

「紅茶とコーヒーどっちがいいかしら？」

「俺は漆黒に落ちし痛ッ！」

「馬鹿言わない！2人ともコーヒーをお願いします」

ゲオルグを思いつきり叩くために作った聖剣を消して、コーヒーを待つ、

数分もするも入れたてホヤホヤのコーヒーが運ばれてきて、そのコーヒーの匂いに少しうっとりする。

いい匂い…… 家じゃ皆飲めればいいだから、こんなに本格的なの久しぶり。

基本英雄派では男が多いのも作用して、コーヒーはインスタントだ。それにたいしこの女性はインスタントではなく、手作りの物だった。

「よろしくお願い致します。私はシエルです。貴方達は？」

「我が名は！」

「私はジャンヌ。それでこっちに倒れてるのがゲオルグよ」

何やらまたふざけようとしたので、今度は聖剣を思いつきりぶつ刺して、その場に放置する。

軽くシエルは頬を引き攣らせ本題に入る。

「貴方達の目的は何でしょうか？」

ジャンヌはゲオルグをハツ倒しながら説明をする。



「うーん。ここは…何処？」

木場は辺りを見渡すもその全てが黒で覆われていて、窓も何も無い。

なのに何故か部屋の中が見える。不思議だなあと思っていると、コツコツと誰かが歩いてくる音が聞こえる。

誰が来たのかな？と音の聞こえる方を向くと、黒い髪と白い髪が入り混じっている。

そんな子いたかな？と顔を覗くと誰かすぐに分かった。

「久しぶりだね奏汰」

木場は久しぶりの家族にスマイルを飛ばすと、オッドアイに変化してしまった目と木場の目が合う。

「どうしたの？随分とイメチェンした見たい」

「その声で喋るなあア!!」

奏汰が今まで一緒にいたなかで聞いたことのないぐらい怒鳴り声をあげる。

「その声で！その身体で！その顔で！僕に近づくな!!イザイヤは死んだ！偽物めえ！殺す僕のイザイヤに化けたのを死で償エエエ!!」

両手を引つ掻くように振り下ろすと、振り下ろしたライン上に氷の粒ができあがり、木場に向けて飛んでいく。

氷の粒を防ぐために夫婦剣を作りぶつけ合わせると、氷の粒と夫婦剣が碎け散る。

「な！どういう事だ？！一番強度があるはずだ…！」

「ひやははは!!偽物死ねええ!皆死んじやえええ!!」

今度は奏汰の周りいっばいに氷の粒が現れ、それら全てが木場に向けて発射される。

何処の英雄王だ!と叫びたい気持ちを抑え、回避に専念する。

剣をぶつけてもこちらが壊れる。

それなら当たらねばどうという事は無い!その信念に従い全てを回避する。

「へえ... 避けるんだ... なら一番痛く殺してあげる。摩訶鉢特摩」
それってエスデスさんの!

木場の腕は奏汰の持っている氷の剣で、切られ宙を舞う。

木場祐斗の宿命からは逃れられない

なんと嬉しいことにこの作品の色が黄色になりました。

1度みて見間違えだろ？と見直してもやっぱり黄色。

あまりの嬉しさに授業中に叫びかけてしまいました。

曹操は虞淵の強さに驚いていた。

三分の二程の力で振る聖槍をいとも容易くいなし、相手の攻撃はいなしても手が痺れてしまう。

だが、それは人間にしてはだ。

人間でありながら圧倒的に規格外の男。木場祐斗と戦ったのだ。

昔であれば強敵となっていたであろう男だが、木場祐斗に比べれば天と地程の差がある。その事を考えていると自然と笑みが零れる。

「何がおかしい!!」

虞淵は連続で拳を打ちながら声を上げる。

それに応えるために聖槍と腕を絡ませ、攻撃を1度やめ応える。

「君以上の男と戦っていてね。彼と比べるとあまりに違いすぎて自然とね」

「俺よりだと… まさか来てるのか！ここに！」

「ああそうだとも」

「しくったな。奏汰が当たっていればいいが…」

「彼の名前は木場祐斗… 君たちに分かるように言えばイザイヤだな」

イザイヤの名前を聞いた瞬間顔色が一瞬で変化する。

「まさか来てるのか！イザイヤがここに！」

「もちろん」

虞淵は右人差し指で空を切ると、切った場所に魔法陣が現れどこかに連絡を取り始める。

それを見ていた曹操はやはりイザイヤの家族なんだなと思った。木場祐斗と同じようにすぐに他人を信じる。そこが弱点と言う者も

いるだろうが、逆にそこが強みだとも思っている。
今度も曹操は笑みを浮かべるが今度の笑みは先程のとは違い、孫を見るおじいちゃんのような暖かさがあった。



「なるほど…… やはり生きていますね」

「無論だ。この俺が治療をしていたのだからな！」

「ごめんなさいね。こいつ馬鹿なの」

「馬鹿とは何だ馬鹿とは」

駄目だこいつ… 早くなんとかしないと… と言いそうな顔で
ジャンヌは横に首を振る。

2人の仲の良さに久方ぶりに笑っていると、突如魔法陣が現れ虞淵
の声が聞こえてくる。

『シエル実は』

「イザイヤが生きていたですね。既に聞いています」

『そうか、ならば誰が戦っている？ 連絡が無いことから考えるともし
かして奏汰なのか？』

シエルは少し待ってと言って、指パッチンを鳴らすと目の前に大き
な見取り図のような物が現れ、1人とチェックをしていく。

違う、違う、違う、いた！ イザイヤの相手をしているのは… 最悪。

「マズイわね。貴方の予想通り奏汰が戦っているわ」

『な！ 急いで俺を飛ばせ！』

「待ちなさい。逃げられないように結界が張つてあるの…… 自分
でやっというて何ですが、時間が少しかかりますわね」

「ふはははは！ それならば！ この俺に任せろ！」

『その声はゲオルグか… ならばどうにかなるな』

「確かに貴方ならば… お願いします」

「ふ、任せろこの世界最強にして、究極の魔術を操りし」

「早くしなさい！」

ゲオルグがカツコつけるために立って、目の前で手を交差させた夕
イミングで、ジャンヌが後ろからドロップキックを叩き込んだ。

壁を数枚破壊して飛んどいったゲオルグは、すぐに立ち上がり凄
剣幕でジャンヌに近寄る。

「貴様！殺す気か！」

「ち、生きてたか」

「ほうジャンヌ・ダルクとあろう者が舌打ちか…いい度胸だな」

「貴方の方こそ。今は急いでるの早くしなさい」

「貴様に俺が命令できるのか？」

「当たり前よ。私は恥ずかしいことなんて何もしてないもの」

ジャンヌの一言にゲオルグは笑いが止まらない。

恥ずかしい事をしていない？それは全くの嘘だ。

「ならば言ってやろう」

「別にいいわよ。どうせ嘘でしょから」

「ジャンヌお前は、ジークソツクリの人形を使って夜な夜な」

「きやああ！何であんたが知ってるのよ！」

「俺に不可能等なし！」

「くっ……後で殺す絶対殺す」

「良いのかそんな事を言って。ジークに知られたらどうなるか分かる
よな？」

ゲオルグはジリジリと近寄っていく。

「くっ私が悪かったわ。だから言わないで」

「気持ち足りん！」

「私が悪かったです。本当にごめんなさい」

ジャンヌはすぐさまその場で土下座をして、許しをこう。彼女は
さっきの反応通りジークの事が好きなのだ。

出会いとしては物心ついた時から同じ教会の施設にいて、そこから
脱獄してからもずっと一緒だった。

だがずっと一緒にいると逆にくつつきにくく、夜な夜な1人で慰め
ることしか出来ていなかった。

それがもしバレれば嫌われるどころか、関係が絶たれる可能性があ
る。だからここそここでは謝った。

ゲオルグは馬鹿なので鼻を鳴らした後、すぐに結界の解除の作業に

取り掛かる。

殺す殺す殺す殺す殺す殺す。百回殺してまた殺してやる…
ジャンヌは呪うように誰にも聞こえない声で呟き続けた。



木場は物陰に隠れて上がっていた息を整える。

身体中に氷が転々についていて、辛うじて出血死はしないようになつているものの、片手がなくあまりの寒さに手がかじかみ上手く剣を握れない。

奏汰の神器は氷系統の物らしく、辺りにもその氷の影響を与えかなり温度が下がっている。さらに今いるのは隔離空間。

1度下がった気温はまともに上がらず、逆にどんどんどんどん気温が下がっていく。

「どこにいるのお？偽物くん！アヒヤハハハ！そこかな？それともこつちかな？」

奏汰はそこらじゅうの物陰に攻撃をしていく。

鉄骨すら氷で貫き、氷でその物陰ごと凍らせる。

今は覗けないが、足音は反対の方に向かってるので、その間に息を整えて

「みいつけたあ！」

逆にいると思っていたのに、突然屋根から下半身を氷で吊らせて不気味な笑みを浮かべて現れる。

奏汰の周りに氷の粒が100個現れ、それらが高速回転して木場を狙う。

それを切るために『魔帝剣グラムVer. FLAME』にして、残っている左手で握り氷の粒を全て切断する。

「はあ… はあ… 危なかった」

「いがいにやるね！けどもう無駄だよ。私は本気で行くからね！

バランス・ブレイクウウ

禁手!!!

奏汰の背中に六つの氷塊が集まり始め、氷塊が砕けると六つの蜘蛛

のような足ができる。

氷の蜘蛛の足で地面に立ち、奏汰の身体が上に浮かび上がる。その足と地面の接触部分は凍っていく。

さしずめ『氷結の女王蜘蛛』だろう。

「くっぐら」

「おそいよーあははー！」

地面から突き出てきた氷の刃が木場の最後の片腕を切り飛ばす。

完全に意識外からの攻撃に避けきれなかった。

「おしまあー！」

最後に四つの足が一つにまとまり、巨大な氷の剣となって木場の胸を貫く。

ちようど全てが終わったタイミングで虞淵と曹操達が入ってくる。

「そんな…」

「あ、虞淵どうしたの？珍しいねここに来るなんて」

「なんで… なんて殺した！」

「え？だってイザイヤの真似をしている偽物な上に、敵だよ？殺さなくちゃ」

「違う… 違うんだ… そのイザイヤは本物なんだ…」

「… え？… 嘘だよね…」

奏汰は禁手を解いて虞淵に聞き返すが、虞淵は首を横に振る。

それが信じられないと改めてイザイヤを見る。

あれ、イザイヤ？… 嘘だよね… イザイヤじゃ…

目から大粒の涙が溢れる。あの時イザイヤを置いていつてしまった時以上にだ。

奏汰につられ虞淵も泣き始める。

それを見ていて随分と悪趣味だなと思ひ曹操

は声を上げる。

「いい加減出てきたらどうだ？祐斗」

「あはは、何か出るタイミングが掴めなくて」

その声は2人が聞きたくて聞けないと思つていた声だった。

すぐに声の聞こえた方に顔を向けると、子供の時と同じ顔で笑いかけてきて

「ただいま2人とも」

「イヤイヤああ!!」

2人とも泣きじやくりながら久々の再開に感動する。
それからすぐに別々の空間にいた皆もやって来る。

「ごめんね迷惑かけて」

「べつにいいさ。生きてたんだからな」

木場からして見れば本の数日ぶりなのだろうが、彼らにして見れば7年ぶり。

死んだと思っていた人物との再開嬉しい事この上ないだろう。

みんなに挨拶を終え何があったのかを話した。禍の団に拾われ治療を受けて戻ってきた事を。

「ありがとうございます。僕のイヤイヤを助けてくれて」

「君のだど？ははは随分と面白い事を言うな」

曹操と奏汰は互いに睨みつけ合う。

「当たり前。なんだって私は結婚しようと言われたから」

「ふはははは、御笑い種だな。結婚しよう？所存は口約束だろ。生憎と私は血が出る程深くさした。そしたらあつという間に背後を取られ押し倒されたよ」

奏汰はそれを聞いて嘘だよねと木場に聞くと、木場はそれを肯定する。

言い方が悪いだけで何も間違っていない。

血が出る程深く聖槍をさして、刺していたのは身代わりですぐに背後を取って組み倒した。

うん何も間違っていない。けど説明不足。だからつけたそうとするも全くこちらの話を聞いてくれない。

「そう…なんだ…いいよだったら…コロセバイインダ

ヨ。アナタジャマ」

「かかってこいクソ豚」

「ふっ！」

2人はすぐさま禁手をおこない聖槍と氷の足をぶつけ合う。

この時に木場はたまたま周りを見てしまった。

「すまない2人とも離れてくれないか？」

「嫌よ。私の方が付き合い長いだよ、だったら私が隣にいる権利があるの」

【時間なんて関係無い。一緒にいた時間の密度】

「へえ……面白い事言うのね。漫才師になった方が良いんじゃない？」

「あははははー！」

「すまないリーダー助けてくれ」

ジークは焰とジャンヌに挟まれイチャつき、

「よし行くぞ飛べ飛べ天まで飛べ!!」

「わーい！楽しい！」

「我也楽しい」

足元にヘラクレスの能力で爆発できるようになった物を設置して、それを上に飛んだタイミングで爆発させて空高く飛び上がる。

それが楽しくて楽しくて仕方がなく、リンとレンとオーフィスは遊んでいる。

「なるほど……そうなるんですね」

「ああ確かに神器と魔術を組合われるのはいいが、貴様はまだ知識が少ない。だからこそ簡単に破られる」

ゲオルグとシエルは結界の事について仲良く話していた。

そう木場以外は基本男女のカップルが出来ていて、木場だけは男が集まっていた。

そんな………確かに原作だとホモっぽいけど、それを回避してきたのに………なんで………何でなんだよ!!!

木場の悲痛の叫びは誰にも聞こえる事は無かった。

まあそうなるよね……マジかよ……

久しぶりのPC投稿なのでかなり短いです。

自分の人生を呪った後、すぐにみんなの住んでいる家に案内される。

外から見た時にも思ったが、中に入るとさらに広く感じていた。それは決して間違えではなく、実際に広がっている。

外観は中世ヨーロッパの屋敷のようで、屋敷の中は『ラオウ・ブラウザイーチリ空間の奏者』の能力により拡大していた。能力としては名前の通り一定の空間を完全支配でき、本来は公園程度しかなかったのを広げ、さらにそこに建てた建物の中を拡大していた。

どんな便利な物にもやはりデメリットがあるようにこの神器にもあり、支配する場所に一か月間居続けなくちゃいけない。

案内された部屋にある椅子に座ると、シエルによって紅茶がだされる。

その紅茶を木場以外が一度啜ると一度ため息を吐き話を始める。

「戦えるのは今ここにいる者で全員かね」

「違うよ、外に出稼ぎに2人出ている」

虞淵の言った通り今ここにいる者以外に2人いる。

名はクラアツツとバン。

その2人には神器は宿っていないが、博打の才能がかなりあり、今では世界中を巡って国家予算ばりに稼いでいる。

世界を巡る途中で自称魔王のレヴィアさんに、眷属にならない？と誘われるぐらいには強い。

「そう言えば琴音さんは？どっどこ？」

木場が辺りを見渡しながら聞くと、禍の団以外の全員の顔が青ざめる。

首を数回横に振りシエルが口を開く。

「残念ながら合流できませんでした。けれど居場所は判明していません」

合流できなかつた？……………まっつてまさか

「魔王の妹リアス・グレモリーの眷属になっています」

原作の木場ポジイイイイイイイ!!!マジかよ……………これがいわゆる世界の修正力か……………

「いずれ時期が来れば救出に行きます」

「なるほど…………」

別に救出しなくてもっつて思うけど、まあ会いに行くぐらいはしようかな。

成長した琴音に会うのを楽しみにしながら、やっと冷ました紅茶を飲む。

「さてでは再会したはいいが、この次はどうするリーダー？」

これから……………そんな事決まってる……………



イタリアの寂れた教会の地下にある牢獄に二人の大人と青年が閉じ込められている。

「まったく貴様のせいでまた飯を逃した」

「ごめちよごめちよ。けど俺つち的には、あんな挑発に引つかかるあつちがおかしいと思うぜ」

「はあ……………フリード次は静かにしてろ」

「かしこま」

「キモいぞフリード」

青年の名前はフリード・セルゼン。

教会の要請により大量の悪魔を殺したが、あまりの実力の高さにごの地下に投獄された。

そしてもう一人の男の名前はバルパー・ガリレイ。

かつて聖剣計画の最高責任者だったが、その被検体であるイザイヤ達の死亡とともに、独自の研究により神の死に感づいたので、表向きは被検体の殺戮と称して監獄されていて。

そんな2人をけだるげに見つめる5対5の白い天使の翼を生やした、蒼い髪をなびかせる女が緑茶を啜る。

死の天使降臨

進まねええてか戦闘が早く終わりすぎ？

木場と曹操と虞淵は気配を完全消しながらイタリアの某所にいる。

「ここだな」

「ごめんね、本当なら僕だけが行くべきなのに」

「気にするな俺達は家族だからな。それにイザイヤの話が本当なら、
ぜひとも挨拶をしなくちやな父バルパーさんにな」

あの後すぐにバルパーの事を説明すると、最初は信じられないと
いった顔をしていたが、必死に木場が説得して納得させた。

そこで虞淵が感謝の礼をしようと居場所を特定するために、神器
フューチャー・オブ・クリスタル『未来を見通す魔水晶』を起動させると、ある寂れた教会を差し不思議
に思い焰が調査に行くと、監禁されているのが発覚し救出に赴いてい
る。

明らかに神器所持者が多いのだが、これはバルパーがいけないそう
バルパーが……………

すぐ目と鼻の先に来ると余りの静けさに疑問を抱く。

「警備がない？」

「怪しいな……………」

怪しみながらもドアを開けようとする、突然ドアが開き中から1
人の女が出てくる。

その女性の背中には5対5の天使の翼が生えている。そのことか
ら女の正体が分かり急いでその場から後ずさる。

「天使だと!!!」

「そうよ。残念だけど今更気づいたところで遅いわよ」

天使が指を鳴らすと100個にも及ぶ光の槍が3人を襲う。3人
は余りにも突然の事により回避が間に合わず、身体中に突き刺さり血
が溢れ心臓が停止する。

それを見届けた女は一度ため息をはくと

「はあ……いつまでこの茶番を見せるのかしら？」

天使の翼を広げ魔力を放つと、光の屈折で姿を隠していた3人が現れる。

「まさか破られるとはな」

「それほど強力な敵なようだな、気をつけろよイザイヤ」

「イザイヤ……なるほど復讐ですか。私的には通したいのですが、クソエルの命令がありますので通せません」

クソエル？……まさかミカエル？いやいやいや、さすがにそれは

「クソエルとは誰だ？」

「無論あのミカエルですよ」

ミカエルだった!! 一体何したのさ。さすがにクソは……てかそれよりも

「僕たちは復讐で来たものではありませんよ、天使様」

「天使様はやめなさい。私は所詮最も堕天使に近い天使、サリエルが私に名付けられた名前です同胞さん」

サリエルの目は不可思議な色を放ちながら、イザイヤに語り掛ける。

「分かりますか……」

「私と同種のように違う、あなた何者？」

「さあ、僕も分かりませんよ」

木場は禁手を使い堕天使の翼を出すと、手元に干将・莫耶を造り構えると、2人を後ろに隠す。

2人は自然に堕天使の翼を出したことに驚き、開いた口が塞がらない。

「そつそれは……」

「後でね。2人には露払いをして欲しいかな」

木場の声と同時に教会の中から武装した神父達がぞろぞろ出てくる。神父達のその服装と相まって、失礼だと思いがゴキブリに見える。

2人は後で絶対に聞くぞと、念押しすると神父達に突撃する。

2人の活躍により2人つきりになり、互いに見合う。

「どうして分かったんですか?」

「この眼ですね」

サリエルの眼は魔眼の元祖であり、見つめるだけで相手の命を奪ってしまふほど強力だ。

それを聖書の神ヤハウエが封印を施して不幸のどん底にいたサリエルを救い、絶対の忠誠を神に誓った。

だが過去に起きた三種族を巻き込んだ大戦により神は死んだ。神の死によりその封印が少し解け、相手の身動きを少しの間止めた。相手の正体を看破するぐらいできる。

今はその神の代理をミカエルがしているが、大戦時に湖から聖剣エクスカリバー強奪したり、人間を改造したりしたのでミカエルに心から忠誠していないが、神に仕えるのが仕事なので渋々従っている。

「それじゃ始めましょう……戦争を」

「僕はしたくないけど……拳で語るなら付き合いますよ」

夢の中で練習していた事を試し翼を使って空に浮かび上がる。

ううう……高いとこ怖!!死ぬううう!!降りたいけど地面から、剣投げても当たらんし……おえゲロ吐きそう。

紅茶が出てきそうなのを必死に我慢しながら、夫婦剣を投擲する。

夫婦剣の独特な動きに対処しづらく、かすり傷をおう。

「なるほど……ですが見切りました」

その言葉通り回転している剣の柄の部分をつまみ逆に2本投擲する。それを木場はサリエルと同じように柄の部分をつまむ。

この少しの攻防だけで互いに理解した、奥の手を隠してる暇はない。

「トレース・オン
投影開始」

「この身は神のために」

サリエルは眼の封印を限定的に解放する。赤い瞳が青に変化し木場の身体中に線が見える。

その線は死の線と呼ばれる物で、その線通りになぞれば一部を除い

て不死の生き物であっても、完璧に殺すことができる。

死の線をなぞるために木場に接近する。

「どういこと？なぜ笑っている？」

木場は握っていた何かをまく。

「見えない？違う!!小さすぎるのよ!!!」

とつさに手で前を覆うが、それは悪手だ。

木場が造りだしたのは、眼で認識できないサイズの干将・莫耶を大量に作った。

だが普通ならそのサイズでは人間一人傷つけられない、そこをとある能力付与した。

『次元^{ディメンジョン}・スラッシュ^{スラッシュ}』例え高位の存在であっても、その次元ごと切る真正銘のチート能力だ。そんな代物を素手で防ごうとしたサリエルは

「なっ!!!」

「終わりです」

翼を6個切り離され、右腕と左足も切られ地面にそのまま落下する。

残っていた羽を使いひっくり返し、近づいてくる木場に声をかける。

「とどめを……さすので……すね……」

「違いますよ」

サリエルの近くに剣を刺すと、サリエルを包み込むように結界が張られ、切られた腕と足がくつつく。

「何を……」

「あなたは死んではダメだ。偽善と言われれば否定はできない……けど死んではダメだと思っただけです」

サリエルはその姿に自分を助けた神と重なり、自然と涙があふれる。

「ヤハウエ私は罪な天使です……彼に新たに仕えたいとおもってしまいました。」

——いいですよ。サリエル。あなたはそれで

ヤハウエ!!なんで……そうか……黄昏の聖槍……

——良く頑張りました……あなたを私の枷から解放します。

ヤハウエによつてかけられた封印がとけ、その瞳は瞳本来の緑に戻る。最後の力を使ったのか、だんだんと声が消えていく。

——す……て……ん……

そうですね……私の好きにしていんですね。まったく……あなたという人は……

サリエルは眠るように意識を失う。

裕斗の最強のパートナー

久々の投稿です。遅れて申し訳ない。
新たに別作品なんか作るから……

それと、ガルパを始めたのですが、30連引いて3体星四ができました。

これを友達に言うのと怒られました。理不尽な……

曹操達の活躍により教会の中には誰もいなくなり、3人は安全に奥まで進んでいた。

「ふむ、そろそろのはずなんだが……」

曹操は神父を倒している中で軽く一人尋問して、バルパーの居場所を聞き出した。

その情報通り進んでいるのだがまったくつく気配がないので、騙されたか?と思いはじめたところで、目の前に魔術的刻印が刻まれた鉄の扉が見えやとついたかため息を吐く。

「……?」

「ああ聞き出した限りではな」

ここがその場所だと仮定して普通にドアノブを回すが、やはり扉は開かない。

曹操はどうしようかと顎に手を当て考えると、木場が『次元切断
ディメンジョン・スラッシュャー』の付与された魔剣で扉を細切れにする。

まったくと少しあきれながら中に入る。

「なんだもう飯か?」

「いやいや飯にしちゃ早すぎだぜ」

「なら何が……」

突然の光のせいでぼやけていた視界が戻り、鉄格子向こうにいる木場が目に入る。

「イザイ……ヤ」

「違うよ父さん、今は裕斗だよ。木場裕斗」

2人は目から涙を流しながら再開を喜び合う。



「いやー良いもん見たね。感動の再開なんてめったに見れないぜ」

「そうかそうか……フリード後でその写真をもらおう」

「ええー無料すか?」

「いくらだ?」

フリードは不敵な笑みを浮かべ、人差し指をつきたて見せる。

それに曹操は惜しみなく財布から諭吉をリリースして、木場のかなり珍しい泣き顔の写真の入手が確定する。

虞淵は馬鹿だなどと思い軽く笑う。

すでに鉄格子は木場が切断しており、バルパーとフリードは外に出て今は動きやすい服装に着替えている。

2人の着替え終わると外に向け駆け出す。

「お前たちはいいのか」

「イザイヤから全て聞いたからな、ある程度は納得してる。まあ詳しい話は帰ってから聞く」

虞淵が軽く答えると「そうか……」とバルパーが走りながら呟く。

監禁場所に着くのには8分程かかったのだが、今度は外に着くのには1分もかからなかった。

かなり短時間で外に出ると、ゴキブ……教会の人間が木場達を囲んでいた。

「ここは私が」

曹操が倒そうと前に出るがフリードと木場が止め前に入る。

「剣は何がいい?」

「西洋剣。刀身は1M程度」

木場はフリードの要望通りの剣を作り軽く放る。

回転する剣の柄を見事に掴み、2人は横に人並びになる。

「ここからは俺たちの戦争だ」

「違うよ。ここからは僕たちの戦争だ」

最強最悪のコンビができた瞬間だった。

木場はフリードの西洋剣とは違い日本刀を腰に差している。

「悪党を狩りつくせ!!」

服装がひと際豪華で周り比べ一回り程大きい男が叫ぶと、周りにいる30人の教会の戦士が雄たけびを上げる。

彼らは相手がたった2人だから余裕だと、思っていたが木場とフリードは軽く人間を辞めていた。

「かかれ!!」

戦士が剣を掲げ突撃を始めると、2人は姿勢を低くして突撃する。手前を走っていた戦士は自分の眼を疑う。

彼らはこれでも悪魔を数体討伐しているのだが、そんな彼らの視界から2人が消え視界が反転する。

その後ろを走っていた者たちは急停止し、4人で背中を合わせて視界を広げ2人を探す。

左右全てを確認するがどこにも2人はいない。

「どこだ!どこにいる!!」

「正解は後ろでしたああ」

4人の隙間の中にいるフリードは、横に水平に回転して切り倒す。

たまたま前を向くと木場も同じような事をしていた。

まさか俺たちに追いつけるどころか、同じような事をするとはなあああ!!

フリードってあんなに強かったのかよ!!!よく一誠勝てたな。

2人が同じような事を考えると、突然振りかぶり剣をたがいに向け投げつける。

投擲された剣は互いの横を突き抜け、背後から切ろうとしていた戦士の心臓を貫く。

その心臓に刺さった剣を抜き戦士の血が飛び散る。

「そんな……こんな事が………」

最初は勝てると思っていたのだが、今日の前では自分の見知った仲間が全員が地に伏せ血を垂れ流している。

「ふぎけるな!!!この化け物どもが!!!」

リーダー各の男は巨大な二本の大剣を抜き、地面を砕いて加速する。

男が大剣を振り上げると、フリードが男の腕の腱を切り裂き、止めに木場が胸に剣を貫く。

「ううん……いい運動になったぜ……」

「にしてもすごいねフリード君」

「いやいや木場の旦那のほうが全然すごいさんすよ」

2人は握手をすると敵がいなくなったので、皆が待っている家へと戻る。



「なかなかうまいなこのお茶は」

「ありがとうございますお父さん」

救出してから3日も経つと案外周りも馴染み、今ではなぜか教会組は「お父さん」または「父さん」呼びが定着している。

そしてフリードも馴染んでいるのだが、

「天使様!!!」

「羽気持ちいい!!」

「あはははあんまり弄っていると頭が飛びますよ」

なぜかサリエルが遊びに来ている。

あ
あんなに死闘したのに普通にいるとか、なんか変な気持ちができるな

サリエルが適当に子供をあやし終わると、木場の方に歩いていき木場の前に着くとその場で膝つく。

「天界の戦力の大半は、裕斗様のものになりました」

なんでさ……俺なりにしたよ。悪いこと何もしてないだろ!!!

「あ、ありがとう」

「いえ、裕斗様の為ですの」

いやー！！！！SAN値がああああ！！！！

軽く心を傷つけられていると、後ろにあるドアが開き曹操が入ってくる。

「リーダーターゲットを見つけた」

「了解。どこに行けばいいの？」

この時なぜ自分で行くと言ったのか、枕を濡らしながら後悔することになる。

Re：呪いは再び発動する

何か最初と比べ確実に文量が落ちてきてる…。何故だろう？

とある街の廃工場の横たわっている電柱に腰を置く。

今の木場は正体を隠すために口元と目が笑っている仮面を付け、黒のシルクハットを被り赤のタキシードを着ている。

「このバケモノが…」

「ヒヒツ…バケモノはそちらだと思いがね」

今の木場の前には四肢がもがれて血が溢れて死んでいる悪魔が転がっている。その中で、1人ギリギリ生きている悪魔が呟いた。

この惨状は別に今日だけでは無かった。

3日間人外達と戦い、その全てを惨たらしく殺していた。理由とはある人物がここにいると分かっているのです、誘うために沢山殺していた。

ギリギリ生きていた悪魔も遂に死に、次はどんな奴かな？と待っていると、廃工場の大きな扉が開かれ、目的の相手の2人と遂に相對する。

「これは君がやったのか？」

「もちろん。君もやるかね？」

「いや遠慮しておこう。なにせ俺は強者と戦いたいからな」

殺気を放ってきた男は、髪が普通の人間であればかなり珍しい分類にある銀髪で、体格もかなり良く戦闘なれしている事が分かる。見た目は20歳程度だが、彼から放たれる殺気は並大抵の物ではない。

その後ろに控えているのは虞淵の出身地である中国風の服装に、手に持っている棒と額に付いている輪っかからその正体は理解でききる。

「いやはや待っていたよ、ヴァーリに美候」

「おっ？俺っちの名前知ってたのか、それにヴァーリの事も」

「今回の目的は君たちだからね」

「目的だど？」

木場は今付けている仮面とタキシードを脱ぎ、綺麗に畳むとその場に置き、両手を広げる。

「ヴァーリくん。付き合っただけいいんだ」

「は？」

「ん？もう一度言うね。僕と付き合っただけいいんだ」

「なっ！貴様理解していいのか！俺は男だぞ」

「うんそれがいい」

木場の心情としてはヴァーリの性格上戦闘にしか興味が無いので、決して家にいるホモにはならないと。だが言い方がかなり悪い。

「くっ…… そんな事を言われたのは初めてだ」

「なら良かったよ」

「だが、本当にいいのか？俺は男だぞ？」

「さっきも言ったけどそれがいいんだ」

ヴァーリは何故か若干頬を染め、数回空気を吐くと息を決めたのか、神器の禁手を使い白い鎧を身に纏う。

「勝てば付き合っただけいいよ」

「なら勝つよ」

木場はいつもの夫婦剣を作り、それを手始めにヴァーリへと投げつける。

投げられた夫婦剣を殴り破壊する。

なら次だと今度は2倍にして投げるも、今度は手足を使い破壊した。

手元に夫婦剣を作ると、足元に魔力を込め壁を駆け登る。

ヴァーリは現在空を飛んでいるので、攻撃を当てるためには接近戦しかない。

「壁上りだど！ジャパニーズニンジャか！！」

木場が駆け登っている壁から離れようとするが、地面から長く巨大な剣が生えヴァーリの行く手を阻む。

「なにー！」

周りに誰もいないか確認をすると、少しづつ猫に近づき手を伸ばす。

黒猫はどうか体力を尽振り絞ってペロツと指先を舐める。

「はううううくく!!!かぁいいよ!!!お持ちかえり!!!」

黒猫を持ち上げ頭に乘せて、さっきの出来事が無かったように元気のいい笑顔になり、魔法陣に乗って帰宅する。

その後名前が黒猫だからと「ちよむすけ」と名付けられ、それに中二病のゲオルグが反応し「我が血が騒ぐうう!!!」と叫び出して、黒猫が浴衣を着た黒髪の美人となり一悶着あったようだ。

原作突入編

原作組と初のご対面

いざ伏線を書くに妙に長くなってしまふ。

それと作者からもうあの事件の事は忘れるように……あれは酷い事件だった

今木場は『神の子を見張る者』と呼ばれる、墮天使の総本山に
来ていた。

その訳はヴァーリ経由でアザゼルにとある物の開発を依頼しているからだ。

総督専用室でアザゼルは手元にある数本の短剣を弄りながら
呟く。

「試作品は出来たな。だがデータがねえから何とも言えねえな」

「ありがとうございますアザゼルさん。それだけでも依頼した甲斐がありました」

木場はアザゼルの弄っていた短剣を受け取ると、満足そうな笑
みを浮かべて部屋から出ていく。

部屋を出た事を確認次第アザゼルは、社長などがよく座ってい
る高級そうな椅子に座ると、背もたれに身体を自由を任せてため息を
吐く。

「まさかこんな事になるなんて…… たくやってらんねえな……
なあ」

アザゼルにしか開けることが出来ない椅子の引き出しを引き、
中に入っている写真に触れる。

その写真には今ほどイケイケ系オジサマではないが、少しちよ
いワル系の若い不貞腐れているアザゼルと、その横で満面の笑みを浮
かべている紅髪の綺麗な女性が写っていた。

「……アルブラ……」

昔を懐かしむように誰にも聞こえないように呟き写真の女性

を撫でる。その女性はアザゼルにとって過去、未来にて唯一心から愛した女だと言える存在だった。



「旦那！一緒に来るんすか？」

「うんもちろん。一応変装はしておくけどね」

木場はおもむろにタキシードを着て笑い顔の仮面をつけ、正体を完全に隠した状態で駒王町へと足を運ぶ。

駒王町に着くとすでに捨てられた協会へと向かう。原作を知っている者なら分かると思うが、あのイツセーが覚醒する場所だ。

内心アニメの世界を目の前で見れると思うとワクワクがたまらないので、フリードだけでなく自分も出張ってきていた。

「にしても…ふふ…それ面白すぎるぜ旦那」

「これの素晴らしさが理解できないとは残念で仕方がない。まあ今はさほど関係ないがね」

教会の門を開くと中には堕天使達4名が寛いでいて、その後ろでトランプ両手で持って、何をしようか迷っている金髪のシスター『アーシア・アルジェント』がオドオドしていた。

アーシアがこちらに気づくと笑顔で駆け寄ってくる。

「フリードさんに影胤さん来てくれたんですね」

「影胤さんはやめると何度も…」

「影胤さん？」

「まあいいか。残念だが今はそれを置いて仕事に行くでしょう」

「そうだぜアーシアちゃん。この人怒ると何するか分かったもんじやないからな」

フリードの腹部目掛けて回し蹴りをするも、紙一重で躲されてしまう。

「フハハハハ!!!死ね」

「いやザンスー！」

どこからともなく取り出した短剣をフリードに投げつけるも、紙一重で躲し一向に当たる気配がない。

それを見て楽しそうにアーシアは笑っていた。

仕事という事で来たのはとある一軒家だった。

その住民は悪魔と契約をしていて、何かを叶えてもらっているとの事だ。悪魔の契約にもクーリングオフなどはあるので、違法な契約内容になっていないかの確認に来ていた。

だがそこである異変に気づく。

「これは……血の匂い」

「あつちやあ……こりやまずいな……」

アーシアは頭を横に傾げて何がなにやらと言った感じだが、戦場を駆け巡ってきた2人にはすぐに理解出来た。ここに殺し合いがあった事を。

3人が中に入ろうとすると、覆面を被つてその手元に血塗れのナイフを持っている男が出てきた。

「な、見たな！てめえらも殺して」

男が何かを言い終わる前に木場が中指を使ってフィンガースナツプを行う。

フィンガースナツプによってなった音を皮切りに、木場の身体から何かが円状に広がり、男に当たると吹き飛ばされまた家の扉を潜り、テレビなどが置かれている大きな洋室の壁に激突する。

「がハッ！」

「痛いかね？だがこれをやったのは君だろ？」

木場は靴を脱がずにそのまま入ると、壁にねじり込んでいる男の近くには、裸で至る所が刺し傷だらけの高校生ぐらいの女性。目の前で行われていた事がよほど悔しかったのか、血が出るほど爪がくい込んでいて、夥しい量の血を出している少し小太り目の男。料理を作っている途中だったのかエプロンを付けたまま、白い服が真っ赤に染まっている女性。

これだけで何が起きたのか一目瞭然だった。

一家団欒としている時に突如目の前にいる覆面の男が侵入して、母を殺して、父の腹を裂くと、娘を捕まえ欲望の限りを尽くしたようだ。

木場の出している謎の力がさらに強まり、覆面の男は壁にめり込んだ状態で、口から大量に血を吐き出して絶命する。

「アーシアちゃんもう無理だぜ。そいつらは死んでる」
「けどけど」

アーシアは必死に神器の力を使って治そうとするが、彼女の神器では死者を蘇られせる事は出来ない。

それでもなお何度も何度も力を使う。

木場はフリードにアイコンタクトを送ると、ため息を混じりにアーシアの首に衝撃を加え意識を刈り取る。

「はああ… なんて俺っちにすぐこういう役目を押し付けるかね？」
「後で何か奢ってやろう… 微弱な魔力？ 悪魔か？ いやにしては何故転移してこない…」

木場が気づいたのはかなり微弱な魔力が近づいて来てること、さらにその独特な気配から悪魔だと分かった。普通は悪魔は転移をしてくるのだがと… そこで一つ思い出した。

しくった!!ここあれじゃね?フリードとイツセーが対面した場所じゃね!!

イツセー覚醒を楽しみにしているあまり、細かいことを忘れていてやっちまったと後悔していると、イツセー到着して走って洋室にく。

「なっ… これは… それにアーシア!!てめえ… アーシアに何しやがった!!」

「これはこれはまさかこんな所で会えるとはね… グレモリー眷属の悪魔兵藤くん」

「俺の名前なんで知ってたんだよ!!」
「興奮するな。まずは私の自己紹介から、私の名前は蛭子影胤。君たち悪魔と違い人間だよ」

イツセーはやはりと言っていいが怒っていた。まあ意識のない女性を抱えてたら誰しも怒るだろ、それが知り合いだとしたら尚更だ。

フリードに手を払うサインを送ると、ベランダへと繋がっている窓を蹴り壊し、ベランダに飛び出ると隣の家の屋根へと飛び上がる。

「アーシア……絶対許さねえ!!」

イツセーはまだ覚醒していない神器『龍トウウイス・クリテイカルの手』を展開して、殴りかかってくる。

イツセーとしては全力なのだろう。それでも如何せん遅すぎる。数々の死闘をくり抜き抜けた今の木場にとっては、少し前まで一般人だったイツセーの拳はあまりにも遅すぎた。

左手を後ろに回し、右手だけでイツセーの拳を受け流すと、バカなと言わんばかりの顔になる。

「クソツタレ!!!」

「はぁ……詰まらん」

バカの一つ覚えのように突き出してくる手の手首を掴むと、攻撃の勢いを使って思いつきり引っぱり足をかけると、宙を一回転して地面に腰を叩きつける。

叩きつけられた衝撃で一瞬呼吸が乱れ、上手く空気が入ってこなくてジタバタしていると、ジタバタしているイツセーをお姫様抱っこの形で抱え白髪の少女が飛び去り、木場目掛けて落雷が落ちてくる。

落雷は自然現象のような物ではなく確実に魔力で作らた人為的な物だ。そのため他の物に飛ぶことなく木場をゴール地点としている。

それを身体から放出する謎の力を円状に自分の周りに配置して、その落雷を地面に受け流す。

このような芸当が出来るものは木場の記憶には一人しかいない。

「まさかリアス・グレモリー自ら出向くとは……驚愕だ」

「名前は知られているのね。まあ良いわ。それよりも良くも私の可愛い下僕を虐めてくれたわね」

綺麗な紅髪を揺らして右手を開いて顔の近くに上げると、その上に紅色の魔力が丸い形で浮かぶ。

リアス・グレモリーの強力な能力。

滅びの力、消滅の魔力とも言われているそれは、防御不能な上ダ

メージも強力。最強最悪と名高い能力だ。

それは木場の使っている謎の能力。

アザゼル特製斥力発生装置を使っているので、消滅の魔力など耐えられるはずが無い。

ここでは戦うべきではないと判断して、懐から閃光玉を取り出してそのまま投げる。

投げてから数秒すると視界を全て隠すような強力なフラッシュが起こり、リアス達の視界を完全に奪う。

「逃がさない！」

視界が奪われ何も見えないがとりあえず、消滅の魔力を投げつける。

結果は誰にも当たらず、木場は逃げ切ったという形になった。

「やられたわね… どうかしたの？ 悠里？」

「いえ別に」

リアスの質問に素っ気なく答えそっぽを向いた悠里と呼ばれた少女は、身の丈ほどある薙刀の神器をしまい、その黒い髪を揺らして一人夜の街を歩く。

あの仮面の男どこかで……

悠里の心には決してあつた事の無い筈の先程の男が、どこか懐かしく大切な人の様な気がしていた。

だがそれはありえないと頭を振る。

悠里にとって大切な人だった『イザイヤ』は自分を助けて死んだのだから……

巡り巡って誤解は拗れる

「なあ旦那本当に来るんすか？」

「もちろん来るよ」

祐斗とフリードは今廃れた教会ではなく、高層マンションの最上階の部屋にいた。

この部屋は祐斗が自腹で購入した部屋だ。

理由としては曹操達との密会やリアス達若手悪魔の監視がある。

ココ最近はこのマンションには近寄らず、教会で寝泊まりをしている。ではなぜここに来たのかそれはとある人物との合流にあった。

2人の前の空間が突然裂けその裂け目からフルプレート製の鎧が現れる。

「え？これ誰？」

「えーと…… オーフイスちゃんていいかな？」

『あつてる我オーフェイス』

鎧によってくぐもった声でオーフェイスは自己紹介をする。

「何かなその鎧」

『我嫌だと言ったのに曹操が無理やり…… 着せてきた』

鎧を消していつものゴスロリ姿になる。が、そのゴスロリ服の所々が違っていた。

まず鎧に関しては曹操が外は危険が多い、可愛いオーフェイスが襲われるかもしれないと強引に着せた。そもそもオーフェイスに勝てるヤツなど片手で数えられるほどいないのだが…… とは言わない方がいいだろう。

今着ているゴスロリ服も前ほど露出度は低く、スカートの丈は膝下まであり、袖は手首をしっかりと覆い白い手袋をはめる。と見せている肌を極限まで少なくしていた。無論これも曹操がオーフェイスの美貌にやられるかもと着せた物だ。

2人はさすが過保護に定評のある曹操だと思った。

オーフェイスは持つてきていたトランクケースを祐斗に預けると、フ

リードと一緒にファミレスへと食事に行く。

受け取ったトランクケースを開けると中には2丁の白黒の銃と、1枚の手紙が入っていた。

その手紙には『よう祐斗。お前の要望通り魔力を玉にして発射する銃を2丁作ってやったぜ。それとアイツらの回収頼むな。アザゼルより』と簡潔に文が書かれていた。

2丁の銃を取り上げ数回確かめるように構えると銃のレベルの高さに感嘆しながら懐にあるホルダーに入れ、手紙を燃やしてベットに飛び込み深い睡眠に入ろうとする。

けれど10分たった辺りでフリードから泣きながら電話され、30万分の食事代を払って欲しいと言われ渋々ファミレスへと向かう。

オーフィスを連れ教会に入る。

突然幼女を連れてくれば他の4人の墮天使は頭を傾げる。

「誰それ？」

「クククこの子は私の娘だ。小日向」

「我… 蛭子小比奈？うん蛭子小比奈」

「娘ね… まあ別にいいけど」

多少疑問には思いながらもまあ影胤ならありえるかもと特に考えない事にした。

「影胤さん私は怒ってますよ！」

「そうか… 小日向相手をしてやれ」

「遊び？我遊んでいい？」

「もちろん構わないよ」

「まっ待ってくだ」

アーシアが必死に止めようとするが祐斗はそれを躲してそこら辺の椅子に座り横になる。

オーフィスがアーシアの袖を引っ張るので後で怒ればいいと昔習ったあやとりで一緒に遊んでいた。

寝ている祐斗の近くにフリードが腰を下ろすと周りにバレないように小声で声をかける。

「旦那悪魔達が近づいてますぜ」

「そうか・・・ならそろそろ動こうか」

祐斗は立ち上がり身体を解すために軽く準備運動をした後、フリードに一振りの魔剣を与え2丁の銃を取り出すと、墮天使4人に向け発砲した。

「な！何をする！」

「裏切るのか！貴様ア!!」

「裏切る？面白い事を言うな。私達は最初から協力関係ですら無かったはずだがね。フリード」

「ほいさ」

フリードは自身の身体能力を魔力で底上げすると、瞬く間に4人の墮天使の羽を切断する。

4人は突然羽が消えバランスを悪くしその場に倒れ込む。

そうするとフリードが1人1人丁寧にロープで拘束していく。

4人とも拘束が終わるとフリード1人で4人を抱え、オーフィスの開けた次元の裂け目からアジトへと帰っていく。

「アーシアちゃん行くぞ」

「え？何が」

「ここは戦場になるからね」

「はい・・・」

それでもアーシアは数多くの戦場を見てきた。

大量の血が流れ辺りは鉄臭くなる。その独特な臭いに何度も何度も吐きかけた。実際に吐いた事すらあつただろう。

それでも戦場に行き続けたのは皆を治療するため、けどフリードの真剣な眼差しにここに残るとは言えずついて行く事にする。

それに影胤が負けるはずがないと信じていたから。

2人が去っていつてすぐに教会の扉が開かれる。

フリードの言っていた通り一誠達リアス眷属が来ていた。

「蛭子影胤エエエ!!」

「随分なぐ）挨拶だね兵藤君」

「アーシアを返せええ！」

祐斗を見て突然殴りかかってきた一誠を片手で止め扉の方に投げ返す。

一誠はまだまだと殴りかかろうとするが、手元に雷を発生させている女が静止する。

「小日向、分かっているね」

「我理解している… ドライグ久しい」

オーフィスは今まで隠していた龍のオーラを解放する。

これこそが今回の件オーフィスの仕事だ。

祐斗は今回ある可能性を危惧していた。

一誠の神器の覚醒。

赤龍帝の籠手が目覚めない可能性だ。

なにせ一誠を殺したレイナーレはすでに捕獲済み、となればもしかすれば怒りで目覚めるとはならないかもしれない。

だから龍の中でも最強クラスのオーフィスに刺激してもらい目覚めさせようとしていた。

その作戦は成功したのか一誠はその場で蹲り左手を抑える。

(ふう… 成功したな… うん良かった良かった)

ほぼ感に近かったが咄嗟に身体をそらす。

すると薙刀が振り下ろされ祐斗のとなりの地面が抉れた。

「お前は私の何だ!!」

「これはこれはまさか君が相手とはね琴音」

「何故その名前を知っている!!」

琴音は1秒にも満たない時間で薙刀の形を変化させ鎖鎌へと変形させる。

武器の変形。これが琴音の神器鋼金暗器の特性だ。

本来この変形を1秒未満で行える者がおらず、その変形の手間からハズレ神器とされていた。

しかし琴音は変形に関しては才能があったのか1秒未満で行える。琴音が扱う鋼金暗器はまさに変幻自在の驚異的な力を見せていた。

今琴音が変形させた鎖鎌は生きているように動き、祐斗の予想を越える駆動で襲いかかる。

「ふん」

銃を鎖鎌に向けて発砲するがあまり効果が無い。ならばと鎌の先端を祐斗が銃の背中の部分で挟み込み動きを停止させる。

琴音はそれを読んでいたのか、瞬きをした瞬間には武器の形がまた変形していた。

今度は巨大な大鋏のような形状になり2丁の銃を絡みとる。

絡みとった銃は床に投げつけ、また変形させる。その形は直角に真ん中で折れ曲がっている武羽冥乱ブーメラとなり、投げはせずにそのまま剣として振り下ろす。

「やっぱり使い慣れない武器は使うものではないな」

祐斗は相手に只の人間と思わせるために懐に手をつ突っ込み、そこで夫婦剣を創り振り下ろされる剣もどきを受け止める。

もし相手が並の相手であれば驚愕ののち距離をとっただろう。

しかし琴音は逆に顔を歪ませ、親の仇を見るように祐斗を見つめる。

「なんで… なんでお前がああ!!イザイヤの剣を持つてるう!!!」

琴音の記憶にはその夫婦剣に見覚えがあった。

教会から脱出する時イザイヤが死ぬ間際に持っていた剣。

その光景は今でも恐怖の夢としてよく見る。だからこそ見間違えるはずが無い。

それは正しくイザイヤの剣だったのだから。

「返せえええ!!」

「君が何を勘違いしているか知らんが、これは私のだ」

剣の柄で隙だらけの琴音の腹部に叩きつけ、意識を奪うために地面へと叩きつける。

地面へと直撃した琴音は口から大量の空気を吐き出すとそのまま意識を失う。

「琴音ちゃん! テメエ良くも琴音ちゃんオオ!!!」

(潮時だな…)

痛みが収まったのかしつかりと覚醒した赤龍帝の籠手で殴りかかってくる。

覚醒したのであれば今はここに残る必要性も無いので、大人しく殴られ教会の壁を突き破って飛んでいく。

「ぶつとべ!!」

殴り飛ばし上がった息を整えると急いでアーシアを探すも、すでに逃げているので見つかるはずもなく、飛ばされた影胤を見に行くと、砕けた仮面のみがその場に落ちていて小日向共々消えていた。

オタクは強し…… 時と場合によるが

一誠覚醒からから一体何日経ったのか分からない。しかし一つだけ分かることがある。

クーラー作ったやつまじ偉大。

「もういい加減出てください」

「あと… 10分…」

「ダメですさつきもそれで誤魔化されました！」

「なら… 3600秒」

「それなら… それ1時間じゃないですか！ダメです起きてえええ!!」

「アジアちゃん無理だぜ。旦那はそうになったら意地でも起きないからな」

「我もそう思う」

「しっしし、チックメイトだぜ姉御」

祐斗は疲れたといい未だにベットに引きこもりクーラーを使い完全にヒキニートになっていた。

どうにかアジアは頑張って起こそうとするが、どんな手を使っても起きない。

フリードとオーフィスはすでに起こすのを諦めチェスでお菓子を買^{ゲーム}つてくる事をかけて勝負した。

そもオーフィスはチェスのルールを知ったのは1時間前、それで勝てれば凄いと云えるだろう。

ゲームの内容はかなり接戦だったのだが……

オーフィスがお菓子を買^{ゲーム}いにドアを開けようとした時、アジアを除く3人が何かの気配に気づき起き上がり臨戦態勢をとる。

アジアは頭を傾げ何が起きているのか分かっていない。

空気は張り詰めクーラーの稼働音が虚しく響く。

2秒ほどアジアにとっては10秒以上に及ぶ張り詰めた空気は、ベランダに発生した小さな音が破壊した。

物音と同時に祐斗は体制を低くしベランダに続く窓に一瞬で移動する。

その速度はフリードの動体視力を持ってしても瞬間移動したように見えた。

祐斗は移動するとそのまま夫婦剣で窓ガラスを粉々に切断し、目の前にいる物音立てた男に襲いかかる。

男は背中に生えた8対の黒き羽の内2つだけを動かし、夫婦剣にぶつけ破壊する。

(強い。俺っちも行くか！)

フリードやオーフィスも相手の実力がどれほど高いのか理解出来た。

祐斗の夫婦剣はいかに即興で作ろうとも、並の人間では破壊できない。カオス・ブリゲードの団では曹操しか破壊できずそれも時々しか破壊できない。

目の男はそれをすまし顔で行っていた。

使ったのは2つの羽のみ。となると未だ本気ではないと思われる。

フリードは祐斗の背中に隠れ男に気づかれないように近づき、祐斗が次に創り出した夫婦剣で切りかかると同時に、顔の横から剣を突き出し隙をついた不意打ちをする。

だが男は口元歪ませ笑う。

この状況下で笑ったのだ。目の前の男は。

2人は油断したと自分の行動を後悔した。この状況で笑えるのは並大抵の実力者ではなく。確実に2人の予想の上に行く存在だ。

夫婦剣は男に当たる前にまたも碎け散り、フリードの持つ魔剣は男の差し出した右腕の掌に当たり、貫通すると思ったがそんな事は起こらず、まるでマンシヨンに爪楊枝を思いつきり刺したような衝撃が腕に伝わり魔剣の根元から刀身はへし折れる。

「争う気はないぞ」

「はは。冗談も休み休み言えよ。そんなオーラ飛ばしておいてはいそうですか、とはならねえよ」

「そうだな… すまない」

男はさつきまで放っていた不気味なオーラを消して羽を自分の身体の中にしてしまう。一応男が消したのでこちらもと武器を消す。

ここでようやく顔を見ることが出来た。

フリードは誰だコイツと思っているが祐斗には心当たりがある。てかコイツしかありえないと断定すらしている。

男の髪は黒だがかなり長髪だ。意地でも切りたくないという意味なのか、その長髪を後ろでヘアゴムを使って止めている。

今はさつき程は笑っていないようだが、その普段の顔からも取れるようにどう見ても悪人面で、耳もエルフのように尖っている。

その男は正しく原作で一誠達を苦しめ、ヴァーリのかませとして処理された残念な男。コカビエルだった。

コカビエルは出された紅茶を啜ると、疲れたとため息を吐き机の上に置く。

「すまないな。お茶まで出してもらって」

「いえ大丈夫ですよ。いつもの事ですから」

アーシアはニツコリと笑い返答する。

それもそのはずだ、少し前にも話したとおりこの場所は密会場所として使われる。

そのため現在ここに住んでいるアーシアは、毎度毎度知らない人が現れその人に対してお茶入れるのが普通となっていた。

なので特に負担ではなく、茶菓子として何を出そうかなと考えてすらいる。

「えつとそれでコカビエルさんで合ってますか？」

「フハハハ！コカビエルさんか、コカビエルと呼び捨てでもいいぞ」

「そうですか。それじゃあコカビエルは何でここに？」

「む？アザゼルから電話が来ていないのか？」

おかしいなと首を傾げる。

今回コカビエルはとある目的のためにアザゼルに相談した。

するとアイツらがいいと言われ駒王町の一角にあるこのマンションへと来ている。

その時連絡入れとくわと言っていたはずなのだが……

祐斗は慌ててスマホを起動させ連絡欄にあるアザゼルを選択して電話をかける。

1回目は留守番電話が出るまで続き、再度かけなおすとすぐに眠たげなアザゼルの声が聞こえてくる。

「ふあ……なんだよ……昨日徹夜で……まだ眠いんだが……」

「ゴカビエルさんがこっちに來てるんだけど」

「着いたのか」

「うんそれはまあ無事にね。けど問題は連絡がアンタから入ってるって言われたけど、1度も連絡はきてない。どういう事？」

寝起きだったのか電話の向こうから何やらがそこそそしている音がしていたが、祐斗が聞いた瞬間その音は消える。

無音の状態はそのまま続く。

「おい」

「いやーごめんごめん忘れてた。テヘペロ」

「オーフィス、アザゼルが自由にご飯食べにこいつて言ってるよ」

「今すぐ行く」

「な！馬鹿おま、それはまず」

アザゼルが拒否する間もなくオーフィスは瞬時に次元の裂け目を通り神の子を見張る者につく。

オーフィスを見つけた墮天使は神の子を見張る者全体に、超絶天災緊急時警報を発令した。

神の子を見張る者では数々の危険な研究がなされている。そしてそれらが流出しないように徹底しているがそれでも完全には行かない。

そこでもしもの事態にさいして警報を定めた。

ウイルスや最近の流出は厄災。

第三者の介入による事件は天災。

それらの脅威度を表すのが、

非常時↓危険↓災害↓崩壊↓絶望と上がっていき。

それら全てを凌駕する時は超絶となる。

オーフィスは過去に神の子を見張る者に出現し、存在していた食材全てを食べ尽くした。

その時全体の約3分の2の施設が機能停止し、墮天使も怪我人が多くでた。

オーフィスに何故そのような事をした？と聞いたら腹が減ったからと答え周囲を呆れさせていた。

そして今宵それが再発しようとしていた。

「アザゼル！急げ侵入を防ぐぞ！」

「なあ！マジでやりやがったな！」

「急げ!!」

電話の向こうから聞こえる慌ただしい音にガッツポーズをして勝手に切る。

電話が終わりコカビエルを見るとあまりにも衝撃的で顎が外れそうになる光景が目飛び込む。

「アーシア嬢。私と契約して魔法少女にならないか？いやなろう是非ともなろう」

「いえあのその… 宗教的に…」

「宗教だど？何をふざけた事を… 神が死んだ上にゴミエルが回して宗教など辞めてしまえ」

「神が死んだですか…」

アーシアの顔からみるみる血の気がひき意識を失って倒れる。フリードは咄嗟に踏み出し地面に倒れる前にキャッチする。

やはりまだ完全に神への信仰心は消えておらず、そこそこの精神的ダメージが入ったようだ。

フリードに指示を出しベットに横にさせる。

「すまなかった… まさかこんなに信仰心が強い者がいるとは思っていなかった」

「別にいいですよ。それがアーシアさんのいい所ですから。それで要件は何ですか？」

「… 実は過去の対戦時にゴミエルはエクスカリバーを湖から強奪した。それを返したいと思っている」

「エクスカリバー…」

エクスカリバーと言う言葉が出てきたのならば物語は多少誤差があっても、順調に進んでいるようだ。

「それとアザゼルが、何でも言うことを聞くと言ったよなと」

「なるほど… なら断れませんか。しかしそれをコカビエルさんが行うメリットは？」

そう原作通りのコカビエルであればまた強者と命をかけて戦いたいと思っていたのだが、どうにも目の前の男はそれとは随分とかけ離れているように感じた。

むしろ悪さをしなすような気弱な男の子と言った雰囲気だ。

「昔は戦闘狂だったはず」

「オーフィスちゃん」

オーフィスは口から黒い羽が出ていて、口が何やらモゴモゴ動いているが今は無視をする。

それに気になるのは昔は戦闘狂だった。

となるとやはり今は戦闘狂ではないという事だ。

「そんな時もあったな… 今はコレがあるから戦闘とかどうでもいい!!!」

背負っていたバックから取り出したのは、小さなお友達から大きなお友達に大人気の『魔法少女プリキヤラ』の一番人気キャラ『村瀬ハクア』のブロマイドだった。

そのブロマイドを頬擦りしながら目をランランとさせている。

まさかのオタクだった。

「おおう」

「そんな俺だが。本来湖の妖精達の物のエクスカリバーを返したいと思っている」

「… うんそれじゃあ今どこまで進んでるの？」

これは当たり前前の問だろう。

今はエクスカリバーと言う名が出ただけであって、すでに数本所持していない場合がある。

そうなると奪還計画を今から考えねばならなくなる。

それ予想していたのかコカビエルは亜空間に手をツツコミ、6本の聖剣を取り出し目の前に放る。

破壊に特化した【破壊の聖剣】エクスカリバー・デストラクション

形態を変化させられる【擬態の聖剣】エクスカリバー・ミミック

使い手のスピードを強化する【天閃の聖剣】エクスカリバー・ラピッドレイ

幻術を操る【夢幻の聖剣】エクスカリバー・ナイトメア

透明化できる【透明の聖剣】エクスカリバー・トランスペアレンシー

祓いの力を強化させる【祝福の聖剣】エクスカリバー・ブレッシング

計6本だ。

聖剣はビームこそ至高。他の能力などいららない

差し出されたエクスカリバー達を眺めるが、殆ど寝て生活していた祐斗には残念ながら大量の知識がない。

なのでその道のプロを呼ぶため今どき旧式のガラケーを起動させる。本当はスマホがいいのだが母が持たせてくれない。何故だ。

一週間だけ持たせてくれた事もあったのだが禍カオス・ブリゲードの団の資金の半分程度で課金したら怒られ、今はキッズケータイにまで落とされた。せつかく高レアを当てたに没収されるとは…

おっと話が脱線した。電話をかけ呼び出したのは二人の男だ。

「ホントですか！エクスカリバーがあると云うのは!!」

「アーサー少し黙れ。老体に大声が響く」

電話してから二秒。部屋の空間が突然裂けゲートのような物になり、そこから出てきたのは神父服に身を包んだバルパーと、聖剣大好き少年になってしまったアーサーだ。

アーサーは目の前に転がる六つの聖剣を見つけると、子供が玩具を見つけたように笑いだし飛びついて一人じゃれあい始める。

「これがエクスカリバー…やはり聖剣ビームの時代。余分な能力など邪道。ビーム…ビームこそが至高。だと言うのになぜこんな無駄な能力が…くつミカエルめ……」

「こいつはいつもこうなのか？」

「まあはい」

コカビエルも名前だけは聞いた事があった。アーサーの名はそれだけ有名で、剣の実力もかなり高い。

今は戦闘狂では無くなってしまったが、名前を聞いた時は血が少しだけ滾った。なので出会えるのを楽しみにしていたのだが、まさかの残念な性格に驚きを隠せない。

ひとまずアーサーの持ってきた『エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣』によりこの場に七つ全ての聖剣が揃った。

「二応話は聞いた。となればこれらを統合させねばならない。だが、分かれても元は最強と名高いエクスカリバー。並大抵の魔力では結

合できん」

「魔力ならオーフィスが」

「ダメだ。エクスカリバーを結合させるには星の魔力を使わねばならない」

エクスカリバーは言うなれば星の力。星の聖剣。それを結合出来るのは星のみだと言っている。

オーフィスは確かに無限に近い有限な魔力を持つてはいるが、龍の魔力なども含めてであり純魔力とは言い難い。

なので星の魔力『地脈』を使う他に無いのだが、この地球上に流れる三つの巨大な『地脈』は三種族に分けられている。

天使と墮天使は警備がかなり高く、確実に突破は出来ない。そも墮天使は今回のこの件コカビエルの独断にしたいので大きな協力が出来ない。

「この事を踏まえれば可能性があるのはここだな」

「駒王学園ですか？」

「そうだ」

バルパーは取り出した駒王街の地図にある駒王学園を呼び指した。

駒王学園の下には巨大な『地脈』が通っていて、それを魔王の妹達が管理しているのだが天使と比べかなり警備が薄い。

魔王の妹達は正直言つて曹操一人だけでも倒せる上に、魔王達もおいそれと来れる場所でもない。

実に今回の作戦にはもってこいの場所である。

「なるほど……術式は出来ているのか？」

「ままだ、五日間くれれば作れる」

「分かった。それではそれまでの間自由行動だな」

話はまとまり今日から五日間後に作戦を結構することになる。コカビエルは立ち上がると頭にバンダナを巻き、リュックサックを背負って眼鏡をかけスキップしながら秋葉原へと出かけていく。

部屋に残った五人はアーサーにエクスカリバーの管理を任せ、バルパーは空いてる部屋に籠り術式の開発を始める。

「ふむ… 後もう数箇所回るぞ」

「流石に疲れてきたぜバルパーの旦那」

「同じく」

フリードとバルパーと祐斗はこの地にある教会を行き来していた。理由としては教会が大なり小なり『地脈』を吸っているのを断ち切り完全な状態で術式を稼働させるためだ。

朝から始めたこの作業は日もくれかけ夕方に差し掛かっている。さっさと終わらせて帰りたいが後二件ほど残っているらしい。

今いる教会も断ち切った時、結界を強引に破った感覚が身体に走る。

断ち切るさいは念の為人払いの結界と認識阻害の結界を同時に張っているのだが、それが今破られた。

フリードは名も無い剣を抜き。バルパーは拳を構え。祐斗は仮面とシルクハットを付け姿を隠す。

着替えに手間取り突撃してくる数秒前に着替え終わり、教会の扉が吹き飛ばされ宙を舞う。

「フリードおおおお!!」

「俺っちかよー!」

あらかじめ強化してスピードとパワーが上がった状態で、一瞬で距離を詰めた一誠の拳を構えていた剣で受け流すが、所詮は名も無き剣。受けたダメージに耐えられずに粉々に砕け散る。

だが伊達に死線を潜り抜けてはいない。砕け散り柄だけになった剣を、一誠の顔目がて投擲する。

一誠はいくら悪魔になったとは言え元は人間。顔に何か飛んできれば手で防ぐと同時に目を瞑る。その瞬間を狙いフリードは距離を取り、今度は祐斗からちゃんとした剣を受け取る。

「お早い到着のようでありアス・グレモリーとその他の者達」

「ええ、まだ貴方がここにいるとは思いもしなかったわ。けど、あったが最後ここで倒させてもらうわね」

「フフフ… なら弓はやめた方がいい。当たりはしない」

リアスは作戦が見抜かれた事に驚き顔の筋肉が一瞬引き締まる。

見抜かれた。何故なせ。いくら頭で考えても答えが出ない。何せ弓で狙撃しようとしている悠里の周りには、認識阻害の境界が張られているのだ。

自分が作った中でも最高傑作と堂々胸を張って言える代物だったのだが、まさかこんなすぐにバレるとは思っても見なかった。

だがいちいちこんな事で動揺しては周りに不安が広がってしまうので、すぐに切り替え悠理をこの場に転移させる。

「蛭子影胤ええ!!お前はなんだアア!!」

悠理は神器を式之型『龍』鎖鎌へと弓から形を変え投擲する。

鎖は影胤を一周するようによう囲み、そのまま圧迫するように小さくなっていく。影胤は最強のバリア斥力フィールドを発動させるが、鎖は飛び散らずにどんどん小さくなっていく。

これこそ悠理が考えた作戦だった。第一に発動させないため長距離からの認識外狙撃。これはバレ不発に終わり、接近戦をなつた時の対処法鎖鎌により締めつけを行った。

未だどんな原理でバリアを張っているか分かってはいないが、分からないなら分からないなりに対策を立て、反発しないように締め付ければいいと至つた。

案外この考えは有効で今の通りバリア事締め上げる事が出来ている。

しかし、この作戦もすぐに失敗に終わった。

「呀ー」

バルパーは自身の最も得意とする八極拳を使い鎖鎌を強打する。たちまち鎖鎌は斥力フィールドから離れ悠理の元へ戻っていく。

鎖鎌をキヤツチした悠理はすぐに形を壺之型『牙』薙刀へと変形させ、刃を影胤達に向け構える。

その構えは素人感は否めないが殺しす分には申し分ない構えである。

と、悠理に意識を向けていると隣のフリードが大声をあげる。

「おや?ゼノヴィアちゃん?おひさー」

「やはり貴様かフリード・セルゼン」

ゼノヴィアと呼ばれた少女は手に持つデュランダルの握る力を上げる。実はこの二人には少しばかり因縁があった。

出身した場所は違えど一時期。ほんの一時期だけ一緒に活動した事があった。あの時はフリードと考えが近く悪魔は何がなんでも殺す考えだったが、悪魔の返り血を浴び、真っ赤に染まっていくフリードを見てその考えをやめ、ある程度会話をするようにした。フリードを危険だと教会上層部に訴え捕えさせたのもゼノヴィアに他ならない。

因縁と言うには弱いかもしれないが二人にとっては因縁そのものだ。

「どうします旦那？」

「ここですべき事は終わった。ひとまず逃げるとしよう」

「あいさ！そなばいにやら！」

フリードは地面に閃光弾を投げ視界を真っ白に染め上げる。三人はすぐに後ろを振り向いたので被害は殆どないが、リアス・グレモリー達は避けることすら儘ならない。二人を除いて。

ゼノヴィアは持ち前の戦闘経験から咄嗟に危険物だと察知し、前方にデュランダルを翳し視界を覆う。

悠理は0.6秒で全ての型に変形ができる才能を持っていたので、すぐに大鍬へと変形させ視界を隠す。

この事で二人は閃光弾により視界を奪われる事無く追いかける事ができた。

「待て!!」

閃光弾の炸裂音により耳が痛い中、リアス達が聞いたのはこの言葉だけだった。

二人は一応協力関係ではあるが内心は納得していない。悪魔と人間。教会の人間と教会の被害者。決して交わることの無い二人が今肩を並べ高速戦闘をしている。

前を高速で移動する三人のうち影胤のみを狙って斬りかかったり、投擲したりするが全ていなされる。

周りにいる一般人には旋風程度にしか認識出来ず、近くを通っていた一般人はズボンが微かに破けたり切り傷が出来たりしている。

段々森へ入り足場が悪くなっていくが、それでも転移させないよう
に攻撃の手を緩める事はしない。

そして、森の開けた場所で三人の足が止まる。そうならば追跡して
いた二人の足も止まる。

直径数十メートルの円状に木々が一切なく、隠れる場所や怪しい場
所も一切ない。戦闘するにはおあつらえ向きの場所だった。

到着するとバルパーが腰に手を当て仰け反り身体を解してから地
面に座り込む。

「老体には少し辛すぎるぞ」

「とバルパーの旦那が申してるぜ？」

「ならば休むといい。ククツ、フリードデュランダル使いを頼む」

「イエッサー！」

影胤は一歩一歩ゆっくり前へ進む。悠理は一番得意な薙刀に変形
させ震える手で刃を向ける。

それを見た影胤からは笑い声が漏れる。

「お前は誰なんだ!!なんで、なんで私の事を」

「まだ分からないか...ならば...: こうすれば分かるかな? 琴音
ちゃん」

声をバレないように変声させていた仮面を外し、少しだけ恥ずかし
かったタキシードを脱ぎ捨てる。

琴音は持っていた神器『綱金暗器《金》』を地面に落とし自分の目を
疑う。

なにせ目の前には、自分を生かすために命を落とした最愛の人がい
ただのだから。嘘だと叫びたい脳とは裏腹に、心で彼が本物のイザイヤ
なのだと感じる。

「うそ... なんで...: 生きて...」

「ごめんね。迎えが遅くなっちゃって、でももう安心していいよ」

涙を溢れさせる琴音をそっと胸に抱き寄せる。これでようやく家
族全員が揃ったのだ。

新たな被害者現れる。

翌日。聖剣結合の当日となった。すぐにでも開始したいのだが、駒王学園には部活の生徒が多数いるので、生徒全員が帰宅し教師のあまりいない九時から開始する。

その際に『地脈』から魔力を抜き取るので光の柱が発生し、近隣住民に迷惑がかかる事を考え学園を全て覆う範囲の結界を張った。中二病を除けば優秀なゲオルクが制作したので耐久力などは心配ない。と、結界を張れば自称この土地の管理者が校舎の方から現れる。

「何をしているの!!」

「先日ぶりとなるのかねリアス嬢」

「影胤：… また貴方なのね：… 今度という今度は阻止するわ!」

現在のリアスの勝率は0%で勝てた試しがない。それでも周りからは相手が悪かった。蛭子影胤は強すぎるから仕方がない。などの励ましばかり。

腸が煮えくり返る程の怒りが溜まっていった。誰もリアス達の実力不足を指摘せず、多分魔王の妹に媚を売るために批判しない。ただただ悔しかった。だから力をつけるため必死に特訓し、万全とは言い難いが力は付いたと思っている。

「あと一時間だ。フリード時間を稼いでやれ」

「俺っちかよ! まあ別にいいけどさ：… はあ：… 時間稼ぎか：…：… はあ：…」

フリードがため息を吐きながら前に出て、つい昨日奪い手に入れた新たな武器デュランダルを掲げる。

「デュランダル! まさか! 貴方達!!」

リアス達悪魔にとつては聖剣はどんなに鍛えてもノーダメージにはならない武器だ。その中でもトップクラスのデュランダルとなるリアスですら一太刀の元に消滅してしまうかもしれない。

だが、デュランダルと対峙する事は無いはずだった。

今回コカビエルと呼ばれる墮天使により保管してあった聖^{エクスカリバー}剣が

六本も強奪され、かなりダメージを負ったらしく唯一派遣されたのが少女一人だった。

最初は教会側も形だけなのかと思ったが、彼女の持っていた武器によりその考えは吹き飛んだ。なんとデュランダル使いだった。

聖剣の中でトップクラスの破壊力を持つデュランダルを所持していた彼女には驚いたが、それならば実力は折り紙付きだと思っていた。

先日自身の眷属の悠理と一緒に影胤達を追跡し結局戻らないので心配はしていたが、まさか殺られ武器も奪われていると思っても見なかった。その事を考えると悠理は……ちなみにゼノヴィアは殺されてはおらず、子供達と遊んでいる。

空に一人だけで浮かんでいる黒髪の男の墮天使が黒き羽を羽ばたかせ大声を上げる。

「さて。お初にお目にかかる私の名はコカビエ」

「そんな事はどうでもいいわ!!悠理は!悠理はどうしたの!!」

「そんな事……ふふ……どうせそうなんだ……はははは……ああ……メルルちゃん可愛いな。メルルちゃんメルルちゃんメルルちゃんメルルちゃんメルルちゃん」

『そんな事』と言われる無視されたコカビエルはいじけ、地上に降りて懐から大人気アニメ『星くず☆ういちメルル』のメインキャラのピンク髪のツインテ少女メルルのブロマイドを取り出し頬刷りし始める。

コカビエルは過去にも何度かこのような経験があり、その果てに自分を無視しない二次元にどハマりしてしまった理由がある。

完全にやばい人になってしまったコカビエルを蚊帳の外に話は進む。

「そうだね。その名前で呼ぶのは勝手だがあまり好ましくはない。琴音が本当の名だ」

「な、なんでその名前を!」

「さてね、それと後ろにも意識を向けた方がいい」

後ろを振り返るとそこにはいつもの薙刀を持っている悠理が立っている。

「悠理ちゃん良かった！無事だったんだね！」

「……………」

「悠理ちゃん？どうし」

様子のおかしい彼女に疑問を思い一歩前へでた瞬間刃先が地面スレスレにあった薙刀が水平に上げられる。あと二歩進めば刺さる距離に刃先があった。

迷いなどがあれば刃先が震えるなどの異常があるのだが、彼女の薙刀は震える事はなく一心に一誠を見据えている。

「それ以上近づくならば切ります」

「なんで…」

「今回ここに来たのは今までお世話になったリアス様への挨拶です。今までお世話になりました、ありがとうございます」

「どうして…まさか洗脳したのね!!」

「洗脳？そんな野暮な事はしていない。全て彼女の意思さ」

「何かあのキャラキモいね」

「やっぱりそう思うよな。俺っちもあれはさすがに」

いつの間にかフリードの隣に移動した琴音と愚痴っていたフリードの頭にゲンコツが落とされ、その場に蹲る。無論ゲンコツを落としたのは影胤だ。

楽しそうに見える光景を見てもなお洗脳されたとしか考えられていなかった。眷属に自主的に逃げられた等と広まれば慈愛の深いリアス眷属の名が落ちてしまう。

結局その場合も周りからは洗脳されたと言われ続けてしまうだろう。それでもリアス自身も逃げられるとは思っていない。

「ふざけるなよ…ふざけるなあ!!」

湧き上がってきた激情のままに神器を展開して殴り掛かる。彼も洗脳されたと思っっているようだ。

「ふむ」

一応基礎トレーニングを行い上がってきた身体能力を倍加した渾身の一撃を叩き込むが、一声の元に拳を人差し指だけで止める。

二次創作物に多い止め方だが普通に考えたら大怪我必至の技だ。

なのに止められたのには理由がある。

見えないレベルで斥力フィールドを発生させ指先だけで止めたように見せたただけだ。結論から言えばカッコつけたかっただけか言えない。

あまりにも無駄に過ぎる行動だが今の一誠には充分心にダメージを与えられ、小さな斥力フィールド弾き飛ばす事で一誠を強制的に吹き飛ばした。

その時と同タイミングでオカルト研究部の地下が爆発し、そこから一人の男が少女を抱え飛び出てきた。

オカルト研究部には地下がある。地下と言っても秘密基地のようなコンクリートむき出しなどの物ではなく、上と同じ作りだ、

なのだが地下に限って大量の罫が設置されていた。

一人地下を進むアーサーは発動する罫を真正面から破壊していく。

魔力の塊が飛んでくれば聖剣で切断。

魔力の鎖が飛んでくればまた聖剣で切断。

ビバ聖剣。叫びたい気持ちを抑えながら進みとある部屋の前で止まる。

KEEP OUTと書かれた黄色いテープで扉を固定し、ドアノブを鎖で封印している部屋だ。

今回この部屋に来たのは祐斗から命令されたためで、どこで情報を得たのか知らないが中にはとても危険な神器を持った少年が封印されている、その少年の確保と目的の手伝いをするとこの事。

目的が何かは当人に聞けと言われたので知らないが、協力しなければいけないほど難関なのは分かる。

「切りますか」

正規の手順ではないと罫が発動するかもしれないが、ここまでの罫で難易度はかなり低いのが分かっているので警戒することなく両断する。

ドアが縦に真っ二つに割れ地面に転がる。その音に反応したのか奥の方にあるダンボールがびくりと飛び上がる。

「ギヤスパール・ヴラデイで合っているか？」

「な、な、なんで僕の名前を知ってるんですかあ!!」

「君の保護をするためだ」

剣を握っている手を瞬時に振る。並の人間には一回しか振ったように見えないだろうが、実際はダンボールを細切れにするほど振っていた。

自分を隠す物が無くなった少年がその姿を現した時アーサーはいつもの無表情な顔を驚きで染める。

出てきたのは自身と似たような金髪ブロードヘアーに、少年と聞いてはいたが中性的な顔立ちで目元に涙を浮かべている。口元には小さな尖った八重歯が見え隠れしている。

それでもまだ序の口で一番驚いたのが服装だった。少年だと言われているのでズボンなどの男子服を想像していたのだが、彼が着ているのは少女の服だった。

フリルがふんだんに施されているスカート。全体的に細い中足先から太ももまで覆う黒いタイトのような物は、彼の顔も相まり小動物のような可愛さを生み出している。

「なん…だと…」

妹至上主義のアーサー出会っても彼との出会いは衝撃的で、男と聞いていなければ問答無用で妹にしていたかもしれない。だが男だ。

何度でも言おうだが男だ。

「くっ…なんだこの気持ちは…私は…」

「大丈夫ですか？」

剣を手元から落としその場に蹲ってしまったアーサーにギヤスパールはオドオドしながらも駆け寄り、背中をさするため膝を曲げる。

彼の履いているスカートはミニスカートのように膝から上までしか無く、しゃがめば自然とスカートの中が見えてしまう。

見てはいけない。彼は男なのだ。そう言い聞かせるが頭は身体は従わない。もしかしたら心も本当は覗きたかったのかもしれない。結局欲望には抗えず覗く。

女装少年の彼は下着までも女物にしている、下着だけは大人びた色

気のある黒だった。

「わ、わわ鼻血が！」

「大丈夫だ、問題ない。ただこれ以上近づいてぐふあ!!」

ギヤスパーは鼻血を流しながらも笑顔の彼が心配で、近くにあったハンカチを持って顔を吹くため近づくのだが、胸元のボタンが上から三つハズレはだけたワイシャツから、ノーブラなためかピンク色の突起物が見え口からも血を吐いてその場に倒れ込む。

男だと理解はしているのだが、どうにも彼を見るたび胸が無性に苦しくなり抱きしめたくなる。

「うろうどうしよう。どうしよう」

「はあ… はあ… 君は何がしたい…」

「立ち上がっちゃダメですよ!!まだ横になってない」と

「いやいいーこれでいい！君は何がしたい」

目を開ければ確実に暴走しかね無いので目を瞑り聞いてはいるのだが、どうにも幼女を誘拐しようとするやばい人にしか見えずこれで喋れる訳がない。

愛想笑いを浮かべるもアーサーは諦める事無く攻め立て続ける。あまりの威圧に徐々に後ろに下がり足元にあったゲームコントローラが引つかかり後ろに倒れてしまう。

目を閉じてはいたが彼の挙動一つ一つを耳で聞いていたアーサーは物音から、彼が倒れそうなのを察知し立たずに、滑るように一瞬で回り込み倒れそうな彼をキヤッチする。

手の中に収まった彼の髪はなびき花のいい匂いが鼻腔を擦り、柔らかい生肌に触れる事が出来た。

と、ある違和感に気づいた。指先に当たる硬い何か。コリコリしたそれは触れるたびに勝手に動き、人差し指と親指で弄り始めると無性に楽しくなる。

子供が家のインターホンで遊ぶような感覚で最後にテツペンの方に爪先を入れた時、これが何だったのか理解した。

「あつ、んっ… はあ… ううん… ああつ… ひやつ…」

天使のような声で妖艶な音が耳元でなり続けるその様は、至福のと

きにほかならなかつた。

ギヤスパーは声を抑えようと手で口元を覆っていたが、次第に激しくなる絶技に我慢しきれず口から喘ぎ声が漏れ出ている。

ギヤスパーは恥ずかしくて自分の神器を使う。

フォービドゥン・パロール・ビユー
停止世界の邪眼それがギヤスパーの持つ神器だ。

神や魔王クラスの者にも作用し、最強とも言える能力時間停止を行える。だが、彼はその制御ができず危険視されたので封印されていた。

能力発動時は周りの世界が白黒く染まり、自分以外が何も動かない。さつきまで話していた人が目の前で固まり、仲のいい人も石のようにピクリとも動かない。

その光景は目に焼き付いていて恐怖以外の何ものでもなく、封印と称して隔離されるのは自分的にも良かった。

そうすれば誰も目の前で動かなくなる事はなく、迷惑がかからない。自分だけが動いて知覚できる孤独な世界。

「なんだこれは？」

「な……んで……」

だったはずなのだが胸を揉みしだいている彼は平然と動いていた。ありえないその現象は衝撃的で、目からは嬉しさのあまり涙が零れていた。

アーサー×ギヤスパークかギヤスパーク×アーサーか迷いどころ

突然泣き出したギヤスパークに何かをせねばならないと慌てて思考する。考えついたのは三つだった。

一つ、押し倒す。

二つ、抱きしめなでる。

三つ、自主規制。

確実に三つめは十八禁サイドに落ちてしまうので残るは上二つだ。その二つも中々危ない気がするが、今のアーサーはかなり慌てていてゆっくりと考える事が出来ない。

ひとまず頭の中でシユミレーションをしてみる。

泣きじやくるギヤスパークを押し倒す馬乗りする。当たり前のように両手を片手で掴み身動きを取れないようにする。

「へ？な、何を」

「泣き叫ぶ悪い口はここかな？」

背の低いギヤスパークの腰辺りに馬乗りした状態でも腰を曲げれば容易に顔に近づけ、耳元で囁くように言い放つ。

何が起きているのか未だ理解出来ないギヤスパークは目を白黒させ、抵抗させぬまにアーサーは唇を奪う。

目を瞑り目元から流れ落ちる涙は純血が散った……………ダメだアアア!!!こんな事をすればルフエイに嫌われる。そうなれば自殺ものだ。

となれば残るは二つ目の物になる。

頭でシユミレーションをせずに胸元へ抱き寄せる。優しく頭を抱擁し、妹であるルフエイを撫でるように優しく頭を撫でる。

「あつ……………う……………ああ……………」

ギヤスパークは自らも顔を押し付け声を抑えようとしているが、あまりの気持ちよさから声が漏れている。

過去においてもここまで優しく頭を撫でてくれた人や悪魔や吸血

鬼はいなかった。誰しもがこの力に恐れ、触れる事すらしない。

撫でられれば撫でられるほど胸が苦しくなる。まるで鎖に締め付けられるような苦しさだ。けれど何故だが心地よさも感じている。

「ふぁ……………あ……………」

「大丈夫…夫…か……………」

ギヤスパーの声質が突然変わり気持ちよさから、何かを解放したような物に変化する。それに気づいたアーサーは声をかけた時足下が妙に生暖かい事に気付き下を見る。

すると、ミニスカートから黄色い液体が流れ落ち太もも膨ら脛を経由して地面に池を作っている。無論立った状態で流れ落ちるそれはアーサーの足にかかり、黒いズボンはピッタリ足にくっついていく。

この年になって漏らしてしまった上に人にかけてしまった罪悪感から余計涙が溢れる。他人に聖水をかけられたとしても抱きかかってくれる力は緩めずに、全てを出しきった後でもそのままだった。

「うう、ごめえごめんざい。ぼくのせいでぐすう、ごんなによごれで」

「構わないですよ。私にとってご褒…この程度何ら問題ではないですから」

他人から聖水をかけられご褒美とまで言いそうになったアーサーはもうダメなのかもしれない。

今は簡易的な魔術で服を乾かしている。アーサー的にはこのまま聖水塗れでも良かったのだが、ギヤスパーが首を縦に振るわけがない。若干名残惜しいが互いの服を乾かしている。

「そう言えばまだでしたね。私の名前はアーサー・ペンドラゴン。名前の通りアーサーの魂を受け継ぐ者です」

「アーサー……………やっぱり騎士様だったんですね」

「私が騎士ならばさしずめ貴方は姫となりますね」

「……………」

軽く言った二人だったがよくよく考えれば全くもってその通りだった。

まるで囚われの姫のように封印されていたギヤスパ。そこに颯爽と現れた騎士ことアーサー。御伽話のような状況に途端に恥ずかしくなり互いに顔を背けて赤面させる。

無言だった。まるで会話が弾まない。冷戦のような冷たい空気が張り詰める。その間でも二人の心は熱々だが。

「あの」

「アーサー様が先良いですよ」

「いえ。貴方が先に」

「……………」

付き合いたてのカップルのようなイチャつきした上でまた無言になる。

正直このままでも良かったのだが何やら地上が少しだけ騒がしくなり始めたようで、こちらも早く動かなければいけない。

「あの、アーサー様どうしても聞いてほしい話があります」

さっきまでの少しふざけた雰囲気ではなく、真剣な眼差しで見つめて来たのでアーサーもふざけた雰囲気を外す。

「僕にはどうしても助けたい女の子がいます。彼女も僕と同じでハーヴアンパイアで、神器を宿しています。その子は僕の大切な友達で、助けたいけど僕にはそんな力はない……………だから助けてください」

「了解した、私のギヤスパ。私はこれからギヤスパの剣となり盾となる事を、騎士王アーサーの名に誓う」

その場で跪いて宣言するが、ギヤスパの身長が低いせいか頭を下げても胸元まで来ているので妙に締まらない。けれども二人にはそれで充分だ。

宣言に頷き承諾すると、立ち上がりギヤスパを突然抱き寄せる。

目と鼻の先にある綺麗な透き通るほど綺麗な金髪に、整った綺麗な美男子な顔。花畑のようないい匂いも相まり

「へやあ……………」

「おっと」

意識を奪われる。抱き抱えていたおかげで地面に落とす事はなく、

気絶した彼を運ぶには抱えることが一番楽なので肩にお腹を中心に
してかける。

そして、空いている右手で聖剣を持つと適当に振り上げる。

一般人であれば何も起こるはずのない無茶苦茶で雑な斬撃だが、剣
術においては祐斗以上とも言われているアーサーが振ればたちまち
空間が裂け、大きな爆発音と共にオカルト研究部の部室を破壊し地上
への道が出来上がる。

軽く足に力を込め飛び上がりフリードの近くに安全に着地する。

「うあつーびつくらした、脅かすなよな全く。うん？そいつが保護対
象か？」

「ああそう」

「ギヤスパー!!!貴方ギヤスパーに何を!!!」

リアスが顔を真っ赤にして大声を上げてくる。

よくよく考えれば、眷属にして夢を叶えると言うだけ言って封印し
ていたリアスが切れる道理がないと思うのだが、そこを突っ込めば余
計めんどくさくなるのでそんな事はしない。

「彼も保護するだけだ」

「なんですって!」

「さて、あともう一人だな。…白音は誰かな？」

自分の今の名前の『塔城小猫』ではなく本当の名前の『白音』と呼
ばれ事に反応したのは二人だった。

一人はリアス・グレモリー。主である時点で知っていてもおかしく
ないどころか、今の名前を名づけたのが彼女だったりする。

残るはもう一人小猫当人だった。

一瞬の動揺だったがそこを見逃す影胤ではなく、狙いを定めた肉食
獣のような眼光になり予備動作を一切悟らせずに小猫の隣に立つ。

「ッ!!」

速いなどの次元ではなく、まるで初めからそこにいたかのように現
れた。転移魔法を使ったなら分かるが、その痕跡は一切無かった。

その事から導き出した答えは単なる技術である事だった。数多く
の武術には数歩以上の距離を一步で詰める方法があるらしいので、お

およそそのどれかだろうと検討を立てた。

小猫は近くに居れば不味い。そう一瞬で判断して横に飛ぶが、離れるより先に中指が弾かれ薬指に当て音を鳴らし、斥力フィールドを半円状に地上に展開する。

直径十メートル程に大きくなりドームのような形になり、転がっていた兵藤を弾き中には小猫と影胤の二人だけにした。

閉じ込められ逃げ道も絶たれ、残るは抵抗のみだが小猫は相手の実力を知っている。とてもでは無いが倒せる訳がない。

勝てる確率は0%だろう。それでも拳を構えないよりはマシなので、ボクシングのような構えをとる。一応はぐれ悪魔と戦闘はした事があり多少マシな構えだ。

「私は君だけに話があつてね、他の者達が邪魔だから弾いたに過ぎない。攻撃の意思はない」

「ふっ！」

両手を上げ攻撃意思はないとアピールしたが戦場でそんな行動を信用するバカはいない。小猫は隙だらけの顔面に全力の拳を叩き込む。

なにせ目の前の男は斥力フィールドをもう発動する事が出来ないからだ。憶測の域を出なかつたが過去の戦闘でも、斥力フィールドを多数発生させる事をしていないからだ。

これがただの慢心からの手抜きだったのであれば最悪だったが、確実に拳に手応えがある。この憶測は正しかった事になる。

「いい拳だ……だが無意味だ」

「くっ、」

顔を遮る仮面に突き刺さるように刺さった拳だが、二人の体格差的にも小猫は上に飛ばねばならない。

近接格闘は足に地面が付いていなければ力が上手く身体全体に伝わらない事が多い。そこで話を聞いてもらうため手首を掴み上に上げる事でぶら下がっているようにする。

それでも身体捻り蹴りやドロップキックを繰り返し続けるが、地面から一步も動いていない。

「なんで」

「まだ力の十分の一も解放していないぞ」
「え」

途端爆発的に魔力が高まりこの場にいる誰よりも高まる。推定だが魔王と同等かそれ以上にまでなる。

よく見れば殴った手や足は赤く腫れ上がり血が吹き出っていて、生の手で鉄柱を殴ったようになっていた。高濃度な魔力は障壁としても役に立つとは聞いていたが、まさかここまでとは思ってもみなかった。

圧倒的実力差の前に為す術がない。握っていた拳からも力が抜け全体的に完全にぶら下がる。

「おつと傷付けたら不味い。怪我を治そう」

黄緑色の魔法陣を作り出し小猫を通過させると、たちまち傷が治っていく。アーシアの治療の神器のようにジワジワ治るのではなく一瞬だった。

治つたのを確認し地面に足を付けさせてから手を解放する。

「私に敵対の意思はないと言っただろ」

「何が目的」

「簡潔に言うならば君の姉についてだ」

一応傷を治し攻撃してこなかったのでひとまず話を聞こうとし、影胤の口から放たれた言葉に衝撃を受ける。

小猫の姉『黒歌』は猫又の中でも最上位の猫？なのだが、悪魔に転生し主を殺した事ではぐれ悪魔となった。

後から聞いた話では仙術の力に溺れ暴走した拳句主を殺したとの事。姉が使えたのであれば妹である小猫に使えない道理はないので絶対に使わないようにしている。

今更聞いた所で何か変わるわけでもない。そう思っていたが

「黒歌は君を守るために手を汚した」

衝撃のカミングアウトだった。

開いた口が塞がらないとはこの事だと思ってしまうぐらい啞然とした。今の影胤の話が本当だとすれば『小猫のせいで黒歌が手を汚し

た』事になる。

「嘘……」

足から力が抜けへたり込む。身体に至る所から冷や汗が流れ溢れ、過呼吸気味になる。

「安心しろ、黒歌本人は別に苦としていない。白音が助かったならと逆に喜んでいるよ」

「姉様が……」

「詳しい話は本人から聞くといい」

「居るんですか！黒歌姉様が！」

「だが、ここではうるさい。付いてきてくれるか？」

数秒間黙り込み差し出された手を掴む事で結論を出した。ドームの外で必死にリアスが叫んでいるが今の彼女には届くはずがない。

今回の任務。

聖剣エクスカリバーの結合。

ギヤスパーク・ヴラデイの保護。

白音の保護。

琴音の保護。

この三つが達成された事により用は無くなったので、手はず通りにいじけているコカビエルをヴァーリに差し出して、影胤達はその場から逃亡した。

因縁の激突。まさかの展開??

月日は多少流れたのだが、祐斗はかなり忙しそうにしていた。休むこと無く電話を掛けられたり掛けたり。相手も男や女の声とバラバラだ。

その忙しさは普通ならば収まるはずなのだろうが、一向に収まらず余計に忙しくなっていく。なにせ、三大勢力で会議をするためだ。

コカビエルの一見によりアザゼルが会議をできるような流れに持っていったとの事だ。予想だが初めからこれを狙っていたのだろう。

エクスカリバーは無事返し終えたが、あのあとはすぐにコカビエルは捕えられ今では冥府にてコキユートスにて永久冷凍の刑に処されたらしい。

これはコカビエルも望んでいたらしいので特に反発はしなかったようだ。

と、話を戻し三大勢力会議の前にここまで忙しくなっているとなると、やはり参戦する事になるのだと思われる。そうなれば、祐斗一人で行かせる訳にもいかない。

「俺が行く。長い付き合いだからな」

「いや私が行こう、この中で一番強い」

「私が行きます。迷惑をかけた分私が行く」

「僕が行く!!」

虞淵、曹操、琴音、奏汰が言い合う中それでも祐斗は一人電話の相手と会話をしていた。



三大勢力会議もかなり終盤に差し掛かってきた。コカビエルの協力によりどうにか開けたこの会議。絶対におシャンにさせられない。

アザゼルは一人机に両肘をつけて心の中で思考を巡らせる。

どうにか会議はいい方向に進んでいる。コカビエルの処分の件

を話し終えると同盟の話になり、すでにその話も終わる寸前。

天界側はミカエルと、その後ろで護衛をしているサリエル。

冥界側は魔王レヴィアタンとサーゼクス。今回の件に深く関わっている残り二人だけの眷属とリアス。

墮天使側は暇人の俺と強引に引っ張ってきたヴァーリだけ。とは言ってもこの後豪華ゲストを呼んでいるが。

「さて同盟はこれでいいだろう、問題はここからだ。禍の団についてだ」

声色が数トーン下がったサーゼクスの発言に辺りの空気が重くなる。それだけ彼らの存在が危険だと示していた。

大逆進を進める赤龍帝を片手間に倒し、リアス眷属の半分を攫っていった。冥界側にとってはいい思い出がない。

「そうですね。彼らはかなり危険です。…仮面の彼は人間ではあるのですが、あまりにも戦闘能力が高すぎます。どこかの組織がバックアップをしているとしか思えません」

「あれが神器での類では無いのが分かっている以上、科学力となるけれど人間にしては高すぎる」

途端に全視線がこの中で一番怪しい人物であるアザゼルに注がれる。

この会議が始まれば自然とこうなる事は分かっていたので特にびっくりする事は無いが、少しタイミングが早すぎる。まだゲストすらも来ていない。

「おいおい、俺を疑うのか？」

「ええ」

「たぐよ少しは信用って事をな」

「天界側を裏切った貴方に信用の一文字もありませんよ」

ミカエルのかなり痛いところを突く一言に舌打ちをする。確かにアザゼルは天界側を裏切り墮天使となったため、信用は一切ない。それでも同盟したのは致し方無かったのだろう。

なにせ、天使は神から作られる者。その神が死んだ今、今後増える可能性はかなり低く希に天使同士の間生まれるかどうかと言った具

合だ。

なのに関わらず悪魔は悪魔の駒により悪魔を増やし、煩惱に塗れた天使が堕ち続々と墮天使になっていく。

それでも小さな戦闘は行われ続けているのでどんどん数が減っている。

そんな時にこの話。乗らなければ天界側消滅の危機でも会った。実質拒否権の無い同盟会議だったりする。

どう弁明しようとも逃れられないこのジレンマをどうしようか考えていると、懐に入れていた機械が振動をする。

「やっと来たか」

「え？」

「いや何どう話しても無駄だからな、同盟が終わるこの時間辺りに呼んで正解だったな」

言葉の意味を理解する前に扉が開かれ中に入ってきた者により全てを理解する。

一人目は黒い中華風の服を身にまとった黒髪の男。服の張り付き具合から確認できる筋肉を見れば、どれだけ身体を鍛えているのか丸わかりだ。

二人目は中性的な顔つきに白髪混じりの黒髪の少年？だ。服は昔の騎士のような白い正装をしている。

最後の三人目はもう見慣れたシルクハットに燕付きの服。顔には笑っている仮面。

一誠は見つけた瞬間殺意のこもった声で奇声を上げる。

「影胤ええええええ!!」

「残念だが、今日は君の相手をしている暇は無いだ」

「もう知ってるやつもいると思うが、蛭子影胤とその仲間だ」

座っていた全員が立ち上がり一斉に嚴戒態勢になる。

「やっと会うことができたねミカエル」

「はて？何用で？」

「とぼけるか・・・ 聖剣計画。この言葉をすれば分かるかな？」

『聖剣計画』この言葉を聞いた途端にさっきまでの笑みは消え、どす黒いオーラに切り替わる。

「どこでそれを」

「どこでか…… こうしても分かりませんよね」

影胤は今までひた隠しにしていた仮面を外して投げ捨て、服と帽子も脱ぎ捨てる。

服はいつもの緩めの感じなのだが、後ろの二人と相まり不気味さを少しだけ醸し出しながら、いつもの笑みを祐斗は浮かべる。

顔をじっくり見るミカエルだがピンと来てないらしい。それもそうだろう。ミカエルは実験体である彼らの顔など知らない。ただ、名前と聖剣適合率ぐらいしか頭に入っていない。

「イザイヤそれが僕の名前です」

「な、何故生きている君が」

名前を告げられ生きてるはずが無いと首を横に振るミカエル。額からは冷や汗が滲み始める。

あの時の報告書ではサリエルが子供達を皆殺しにし、それにバルパーが不服を訴えたとの事だったはずだ。

「サリエルこれはどういう事だ」

「……………」

「サリエル！」

「……………」

サリエルは組んだ手をそのままにして顎を前に動かしてイザイヤの方を見ていろと返事をする。

あまりにも凶々しい態度に握りしめる拳にさらに力が入り殴つても聞きたいが、今まで築き上げてきたイメージを壊してはならないと急いで薄い笑みを浮かべる。

前を向くとイザイヤは高らかに言い放つ。

「僕達は皆生きています。後ろの二人もそうだよ」

「くっ……」

「今まで動いてきたのはこの時このためだったんだ…………… 復讐させてもらうよミカエル」

すぐに同盟を組んだ相手をミカエルは見る。

無論裏切り者のアザゼルではなく、冥界側の魔王達だ。

しかし、二人の魔王は祐斗達の登場に驚いておらず、最初から知っていたかのようにこちらを見つめていた。

実は今回の事に関してはあらかじめ二人の魔王には話が通っていた。

連絡はアザゼルや祐斗の知る所では無かったが、お金を稼いでいるクラアツツとバンはレヴィアタンに追われているため、わざと一度捕まってもらいそこからサーゼクスにまで話を通した。

最初は妹の眷属を奪っていった者達がくるのは反対だと言っていたが、事情を聞いたサーゼクスは渋々頭を縦に振った。

「私のはけものにされていたと言うわけですか…… くくくくくかかははは!!!」

突然壊れたように笑い出したミカエルにサーゼクスが視線を落とす。事情を聞いたとはいえ信じていなかったのだが、この態度を見れば信じざるえなかった。

「そうするのですね。ならば戦争をしましょう!やれオー!」

掛け声を合図に上空からサリエル目掛け魔力の塊が落とされる。

瞬時に上に手を上げ結界を張り防衛するが、結界にぶつかつた途端に結界が砕け散る。だが、すぐに二枚目を張りどうか防ぎ切る。

二つの魔力の塊の衝突は会議室を半壊させ、ミカエルは外へとすぐに飛び出る。

「いーオー」

「了解しました。マスター」

空から降りてきたのは一人の少女だった。

その少女の額の上には幾何学的な模様の光輪が輝き、腰からは一對の白い羽を生やした天使だ。

手には黄金色の身の丈以上あるハンマーを持っていて、ハンマーからは微かに神性を感じられる。

左手でそれを持ち空いている右の手からは魔力が迸っていた。

予想だにしない方向へ会議は終了する。

「紹介しようコレは私が神となるための証明。私の手で人間を作り替え天使にした、その名を天翼種^{フリーゲル}」

隣にいる色白の肌に白いワンピースの白づくめの少女を指さしながら、まるで玩具を紹介するようにニヤつきながら言い放つ。

少女は魔力を迸らせるだけで岩のようにピクリとも動かない。

「驚いてるようだね」

「まさか天使を作るなんてな！だがそいつだけでどうにかなると？」

「誰が一体だけだと言った？これを除き全四十九体作り上げたよ。だが、制御できたのはこれだけだ、なあ01」

「YES。マスターの命令に忠実な物は私だけです」

閉ざしていた口を開くと感情のない声で説明をする。

これを聞いた全員が理解した。ミカエルは洗脳し隷属させているのだと。

「それにコレの強さは私を超える。そんな物を作れた私こそ次の神だ・・・そのはずなのに貴様が邪魔をした!!サリエルうう!!」

「やはり正解だったようですね」

ミカエルを軽蔑の目で睨みながら自慢の羽をはためかせ一歩前に出る。

そして、懐から一枚の紙を取り出す。

「貴方を熾天使の称号を剥奪。代理に私が熾天使の称号を受け取ります。これは他の三方の熾天使から承諾を得ています」

サリエルと祐斗の想定ではこの事を会議の時に突きつけ拘束するはずだったのだが、自ら墓穴を掘るように禁止を破り自供した。

例え否定しようともこの場に居るもの全てが証人だ。戦況的に見ても二人ではどう頑張ってもこの戦力差を覆せるとは思えない。

圧倒的絶望な状況に陥ったにも関わらずミカエルは高笑いをし始める。

「なら見せてやれ01!この場にいるものを殲滅しろ!!」

その中一人だけが雷を紙一重で避けながら接近する者がいた。

「僕が止める。それが少しでももの償いだ」

本来彼女のような不幸な人は現れるはずが無い。簡単に言ってしまうえばバッドエンドのないハッピーな世界のはずだった。

が、異分子たる自分が入ったせいで大きくこの世界は変貌している。

彼女はその被害者だった。だからこそ加害者たる自分が責任を取るため夫婦剣を掴む。

「最初から本気で行く！バランス・ブレイク禁手化!!」

背中から黒き羽が生え身体にはヒビが発生し黒い靄が漏れでる。

この黒い靄が触れた地面は当たった場所がくつきり消え失せる。それこそ、バル家の使う滅びの魔力のように。

「姉さん…」

サーゼクスはありえはすのない人物と見間違えてしまう。自分の居なくなってしまった、姉であるアルブラ・グレモリーに。

そんな事を考えていたサーゼクスの元に二人のぶつかり合う衝撃が響き渡る。

黄金のハンマーの先端部分に白黒の夫婦剣がぶつかり合い、火花が飛び散る。

トレース・オン
「投影開始」

拮抗していた方の夫婦剣が消え、瞬時に新たな夫婦剣を作り切りかかる。彼女の不意を付いた完璧な攻撃だったが、身体に当たる前に剣が魔法陣によって止められる。

攻撃を防がれた瞬間に頭部に衝撃が走り校舎の方まで飛ばされる。咄嗟の事だが羽で衝撃を吸収した事により脳へのダメージはほぼないが、羽には甚大で右半分があらぬ方向に曲がり羽として意味をなせなくなっている。

追撃として膝立ちの祐斗に電撃が落とされる。すぐに雷切を作り電撃を切り裂く。

「いなのっ？」

「もう行ってらっや」

「うん？」

背中に何かが刺さる。抜くために背中に手を回した隙を祐斗は一気に距離を詰める。

「伸びろー！」

背中に刺さった夫婦剣が両方とも伸び羽のような形に変化する。そして、伸びた刃が背中を貫通し正面に突き出てくる。

祐斗は手に持っていた紅い剣を縦長に伸ばしロングソードへと変化させ、魔力で強化した身体能力で突き刺す。

二段構えの不意打ちぎみの一撃だった。胸を深々と貫き生命の源の心臓を穿く。

「いたあいー！」

「な、ぐつつ!!！」

血も大量に流れているはずなのに痛いの一言で普通に耐え祐斗を殴り飛ばした。

飛ばされた祐斗を尻目に刃物を抜く。すると、傷口はすぐに再生し何も無かったかのごとく立ち尽くす。

「やるしか無いのか…！」

今の生物離れした再生能力を見たので生きてまままでの保護は不可能だと判断し、早く安心させてやるために殺す他にないと覚悟を決める。

多分脳みそを切ったとしても今の中を見た限り生き残る可能性が高い。でも一つだけ殺す方法がある。

しかし、それは自分への負担が大きく最悪死ぬかもしれない。けれど自分の後始末は自分でつける、そう心に決め両手を前に突き出す。

「安定しろ僕の魔力！」

「？ワケわからないでも、殺す！」

大げさな構えのせいで大きな隙が出来ている。さすがにそれを見逃す程甘くはない。

瞬間移動のように一瞬で正面に立ちハンマーを振り下ろす。

「そんな」

ハンマーの先端は祐斗に当たる前に何かに当たり消え失せた。い

や消滅した。

祐斗の周りには黒かった靄が紅く変色し、とある一族の物と同じ消滅の力を得た。

「そんなアレは！」

「やはり姉さんの」

この現象に驚愕の声を上げたのはバル家現グレモリー家の二人と、その危険性を知っているアザセルだった。

「今すぐやめろ！それ以上やれば死ぬぞ！」

あれの末路は自分が嫌という程知っている。だからこそ同じ末路を辿って欲しくない。その願いの込めた心配の声は今の彼には届かない。

祐斗のヒビはさらに広がり顔の半分がヒビになり果て、指先も少しずつ塵になり始めている。自分の強大な力に身体が耐えられていないのだ。でも、

「これで終わりだ！」

この状態であれば殺すことは可能だ。再生する肉片を塵一つ残さず消滅させればいいのだから。

くしくもミカエルと同じように心臓を穿く事になってしまう。

「ごめん僕にはこれしか」

「ありがとうございます。これでお姉ちゃんの所に安心して逝けます。けど、死にたくないな」

病原菌のように彼女の体全体に滅びの魔力は広がり、この世から彼女は消滅した。唯一あるのは死に間際に肩に落とした涙だけだった。

彼女を倒した事により禁手を解くが身体への負担はとてつもなく、顔から血の気が引いていき吐血する。

急いで駆け寄ると全員が駆け出すがそれよりも早く一人の男がかけていた。

「何で殺したアア!!彼女は生きてかったんだぞおおおお!!」

怒りの力からか真紅の鎧を纏った一誠だ。その身体能力は倍加によりこの場に居るものよりも早く動き、握る拳の一撃は祐斗を絶命させるには十分だ。

過去の蛭子影胤の時の件と今の件を含め彼の怒りは爆発し瀕死状態の祐斗に止めの一撃を繰り出す。

苦しいながら辛うじて顔を上げた祐斗は躲そうにも身体が動かない。憎しみに歪んだ一誠の顔を脳に焼き付けながらその場に倒れ込む。

下から上へと顎に向け強打を計る一誠の手は白銀の手により止められる。

「兵藤一誠：やはり貴様は相応しくない」

受け止めた拳をいとも簡単に握りつぶす。ヴァーリとて今の光景に怒りを覚えたりした、自分の過去もあったからだ。だからと言って祐斗の決断を恨む事などしない。逆にあれが正解だったと胸を張って言える。

しかし、目の前の男は偽善を並べるだけで行動に移さないにも関わらず、怒りをぶつけようとしている。

心底失望した。これが男のする事なのかと。

握りつぶされた痛みには鎧は消え蹲っている一誠の頭を掴んで持ち上げ、地面に引きずりながらボウリング見たいに校舎へ激突させる。痛みにより身体が動かなくなり辛うじて呼吸だけ出来ている一誠の傍に立ったヴァーリは、懐から四本の剣を取り出し一誠を囲むように投げる。

すると、一誠から赤い玉と黒い玉と緑の玉が出てきた。ヴァーリはなんの躊躇いなく黒と緑の玉を引き抜き、緑を虞淵に投げつけ黒を握りつぶす。

「何をしたの！」

慌てて来たリアスが一誠を守るため身を挺してヴァーリを止める。ゆっくりと右手を上げリアスの顔の前で手を開く。

「死んではいけない。これを見れば何か分かるだろう」

開いた手からは砕け散った兵士の悪魔の駒が無惨に床に転がる。イーヴィル・ピースこれが指し示す意味は一誠が悪魔で無くなったという事だ。

本来人間から悪魔には出来ても悪魔から人間に戻す事は出来ない。一度身体を作り替えたのにまた身体を作り替えるなど副作用が起こ

る可能性があるからだ。

だが、ヴァーリ達はとある研究の産物で安全に悪魔の駒を抜く方法を見つけ出していた。

渡された緑の玉を大事そうに両手で包み込んで虞淵が近づいてくる。

「これは」

「赤龍帝の籠手だ。君なら馴染むだろう」

そう、神器を安全に抜く方法の途中で見つけていた。

ヴァーリの言葉通り緑の玉は自然に虞淵の身体に入っていく、左手に赤い籠手が現れる。

「うおっ、マジかよ」

「ああこの男にはそれを持つに値しない。そう判断した」

リアスの後ろでは神器を奪われたのにも関わらず息をしている一誠がいるため、死んではないという言葉は本当だと分かる。

だが、さすがにこのままではいつ死んでもおかしくない。すぐに抱えサーゼクスの元へと急ぐ。

「お兄様！」

「……」

「お兄様!!」

「おっとそうだった、レヴィお願いするよ。僕は少し彼に用が出来た」
「おっけい」

魔王専用に魔法陣を展開させリアス達を乗せひとまず一誠の家に直行する。そこであれば医療器具などが多少はあるためだ。

冥界に直接行ってもいいのだが人間に戻ったとされる一誠には毒素が強いので危険だろうと判断した結果だ。

自分の妹を見送ったサーゼクスは倒れている祐斗へと駆け寄る。

琴音が泣きじやくりながら血塗れの祐斗にしがみつく。

「死んじやだよおーやだああ!!」

「どけ琴音ー」

アザセルは着いてすぐに呼吸の有無と胸に耳を当て心音を確認す

る。まだ生きている事を確認し電話を取り出し電話を始める。

「祐斗が負傷した！早く救護用意をしろ！再生ポットも使用する、こっちは今から行くから急げよテメエら！」

電話をしながら出血を抑えるため応急処置をしてから抱えあげ、急いで転移魔法陣に乗り転移する。

また大切な者を目の前で失わないために涙を流しながら急ぐ。

過去編

アザセルの思い出。または黒歴史？

「おい、急げ!! さっさとポットに入れろ!」

「はい!」

「絶対に死なすなよ! もし死んだらお前らの首も飛ぶと思え!!」

アザセルの鬼気迫る発言にいつそう緊張感が高まり、ポットの調整をしている墮天使達は丁寧にも尚且つ素早く作業を進めていく。

ポットの調整には殆ど関わっていないアザセルは祐斗に付いてきた者達全員を自分の部屋へと案内する。

転移した場所から数分歩くと嚴重な鉄の扉が見えてくる。

「はあ... 我は墮天使なり」

鉄の扉にアザセルが手を当てると電子機械の小さな音がなり、それを確認してから開閉パスワードをめんどくさそうに言う。

声を認証し終わり最後にアザセル本人だと認証するための光が全身を包み込みやつとこさ扉が開く。

生死の判断。指紋認証。生体認証。身体認証。四つの工程を終えて開くかなり嚴重な警備体制だった。

中に入ると黒い戸棚に大量の本が入っていて、いかにもな研究者の部屋だった。

目の前にあるこれまた黒いソファアームに腰を下ろし、アザセルは自分の椅子に座る。

「祐斗は大丈夫なのか?」

「安心しろ。死にはしない。ただ、二度とあの魔力を使わせるな、次は確実に死ぬ」

「それならば彼の魔力について何か知っているようだけれど、聞いてもいいかな? 何故僕達の... いや姉さんの魔力を彼が持っている?」

祐斗のあの力を見ていた時から思っていた疑問をぶつける。あの時アザセルだけが反応が違っていた、まるで一度見た事があるよう

に。

「そうだな、これはお前には特に話しておくべき事だったな」

近くにあるポットからお湯を出し茶を作って三人の前に置く。これからする話が長くなる事を暗示しているようだ。

自分の分の茶も入れ座り直し引き出しから一枚の写真を取り出す。その写真は嚴重に保護が施されていて見たサーゼクスは驚愕し立ち上がる。

「姉さん！」

「そうこれはお前の姉アルブラ・グレモリー。そして、これから話すのは本来はしてはいけない馬鹿な事をした男の話だ」

過去の忘れたくないけれど、忌々しい記憶を呼び覚ましながら静かに語り始める。



遙か過去の事だ。その当時はまだ墮天使はおらず、アザセルが天使の頃だった。

当時から腐れ縁のコカビエルは胃に穴が開いた事がしばしばあった。何故かと問われればアザセルの自由さにはかならない。

自分の知りたい事があれば最後まで研究し続け、危ないと分かっても知識欲には勝てず突っ走る。いつも後処理をしていたのがコカビエルだったのだ。

その日も同じように人間の文化が気になったアザセルが突っ走った。

「たく天界はつまらねえな。人間を見てる方が楽しいわ」

一人天界の研究所から抜け出てきたアザセルは一応変装して人間界をぶらついていた。

天界では数々の物を発明し発明王とまで言われているアザセルだが、もう一月もすれば飽きてくる。

それに、娯楽も少ないせいでつまらない一日を過ごしていく。そのための息抜きだ。けして、発明がめんどくさい訳では無い。

日々成長していく人間達の有様を眺めながら歩いていると、魔力の

ぶつかる気配を感じる。

「こっちは…アレは悪魔か？」

自分の感覚を頼りに進んだ先には人払いの結界が張られた森があり、気の隙間から中を除くと紅髪の女が目に入る。

髪を必死に振り乱しながら足場の悪い森を転がりながら進んでいる。その少女を狙うように背後からはアザセルの使う光の槍が飛んでくる。

光の槍を使えるのは天使だけなので天使が狙っているという事は、唯一の敵悪魔だとすぐに思いつく。

「おいおい外すなよ。全く」

「ち、やっぱり動くのは難しいな。次はお前の番だろ俺的には外して欲しいな」

「ふん。外すかよ」

まるでゲームを楽しむ子供のような会話をしている二人の天使は、先程からずっと交互に光の槍を投擲していた。

先に致命傷を当てた方の勝ち。天使の癖に中々酷な事をしていると思うが、悪魔に至っては天使は基本どんな事をしても墮天する事は無い。そのため、娯楽代わりにする者も多い。

彼らも同じような事だろう。これも欲を抑えられている天界の汚点の一つだ。

アザセルもこれに関しては知人が戦闘狂の理由がそれなので、否定する気にもならない。いつもならば見捨てたであろう。

「誰か… たす… けて」

大きく切られた肩を抑えながら泣き叫ぶ彼女の声を聞かなければ。

「ふん！」

「なっ」

「馬鹿な！光の槍だと！」

気配を消した状態からの光の槍全力投擲は次に投擲しようとしていた天使の胸を深々貫き絶命させた。

生き残った方は必死に辺りに意識を向けるが背中の一対一の羽からわかるように、アザセルとは絶対的な力の差がある。

そのせいで一度気配を消したアザセルを男は発見することが出来ず、背後から飛んできた光の槍で胸を貫けさせて気づいた。もつともその直後に死んだため意味はないが。

「だ、だれですか」

「そんな警戒するなよ。通りかかった天使だよ」

自分を襲っていた天使を殺した天使が手を上へ上げ攻撃するつもりはないと語っているが、先程のこともあり安心は出来ない。

アザセルも今更になって何故こんな事をしたのかよく理解が出来ていない。

悪魔は敵だと教え込まれてきたはずだ。それなのに助けてしまった。

二人は互いに考え込み始め冷戦状態になってしまう。この状態を動かしたのは襲われていた彼女の腹の音だった。

「ああ… まあ何だ飯でもいくか。一応言うが強制だ逃げられると思うなよ」

「… 分かりました。行きます… こんなことになるなんて」

土に座り込んでいる彼女に手を差し出し起き上がらせる。

「一応自己紹介をしとくぜ。アザセルだ」

「アルブラです」

この出会いが二人の運命を大きく変えていく事になるとはまだ誰も思っていないかった。

ひとまず人間界での隠れ家に連れていき食事の用意と手当を始める。

「何か嫌いな物あるか？」

「いえ、よく分かりません。食べたことがあるのがスープぐらいですから」

「なるほどな… なら肉でいくか」

位置的には日本で木でできた家の中にいる。極一般的な二階建ての木造。周りと比べれば多少大きいのが、あまり目立たない。

なのだが、中に入れば風景が一変する。

空間が歪んだみたいで外より中は大きく、近未来的な電子機械が何かしらを計算し続けている。下手に触ると壊れそうなので見るだけになっている。

キッチンではアザセルが一生懸命肉と睨めっこしていて、暇なアルブラはソファアーに腰を下ろす。

「すごい……とっても柔らかい」

ソファアーのあまりの柔らかさに驚きを隠せなかった。自分の窓のない部屋ではもつと硬く長時間座るなどありえない。

だが、これは柔らかくこのまま寝れそうなレベルだ。

「飯は少し待てよ今焼いてるからな。それに飯の前に治療をしよう」

「治療？」

「ああまず服を脱げ」

瞬時にアルブラの右手が加速し強く握られた拳がアザセルの頬に深々と突き刺さる。

予期せぬ行動にワntenポ回避行動が遅れ、身体を扇風機の羽のように回転させながら壁に激突する。

「この変態！悪魔！」

「悪魔はお前だろうに。いて何しやがんだ」

「何しやがるって服を脱げなんてなんて事を」

「はあ……いいから服を脱げや！」

数多の女と遊んだ技術を惜しむことなく使った早脱がせを行った。

ボロボロに破けた囚人服みたいな灰色のワnピース。見た感じこそそこ歳はいつているのでお洒落をするはずなのだが、服からはとてもそんな物は感じられずメイクも何もしていない。

脱がしたら脱がしたで胸には雑に巻かれたサラシに、申し訳程度の陰部を覆う布。女子には有るまじき姿だった。

「はあ……色気がねえな」

「くうー殺す、お前を殺して私も死ぬう!!」

「たく暴れんなよ」

その場でドタバタ暴れるアルブラの背中に跨り強引に押さえつけ

る。

やっぱりか。傷が多いなこりや、それも新しいのだけじゃなくて古いのもある。

背中には血を垂れ流している傷の他に、もう塞がっているが自然治癒だったためか古傷が幾つもある。

ある程度予想はしていたがここまで酷いとは思っておらず、さすがにこのままにしとく訳にも行かない。

「冷たいが我慢しろよ」

「へ？はうう… あう… あつ… あうん…」

ひとまず見えている傷の箇所すべてに天使特性の塗り薬を塗っていく。

この塗り薬を塗ると細胞を活性化させ再生力を高め古傷も消してくれる優れものだ。しかし、欠点が一つだけある。

それは、温度が上がる事が一切なく生肌に塗るととてつもなく冷たい事だ。そのせいかあまり頻繁には使われないが実用性は高い。

事実、アルブラの傷は見る見るうちに治っていく。

「なるほどな。悪魔だところも早く治るのか」

「傷が」

「だから言ったら治療してるってよ… さて残るは正面だが男にやられたくないだろ。目の前の部屋に行きな、監視も何も無いただの空き部屋だ」

特性塗り薬を渡し起き上がらせて歩かせる。ついでにちゃんとした下着と服もセットで。

「あ……」

「うん？何か言ったか？」

「ありがとう」

恥ずかしいのか急いで部屋に入っていく。扉はタッチ式なので触れれば横にスライドする。

「さて後は肉肉っと」

数十分経ったのだが一向に出てこない。何か問題でもあったのか確認しようと動き出しす前に、扉が開かれ中から大事な部分を手で隠

したアルブラが出てくる。

「な、何してやがる！お前痴女か！痴女なのか！」

「違うの！この付け方が分からないの！」

これといって差し出したのはブラだった。天界では当たり前のように使われているのだが、アルブラは全く意味が理解出来ずお手上げ状態のようだ。

見なければ問題ないよな、よしやるか。

見ないように着付けさせるのがここまでキツいと、初めて知る事になった。

通い妻始めました。

私は生まれながらにして異常だった。

身体に流れる血のグレモリー家には特徴があり、滅びの魔力と呼ばれる物がある。だが、個人差が大きく使なかつたり使えたりとまちまちである。

なのにも関わらず過去において最強クラスの滅びの魔力を持っていた。いや持つてしまった。

最初は周りは喜んだ。過去でもあまり類を見ない最強クラスの力。超越者になるのは必至だろう。そう言われていたがすぐにその言葉は聞こえなくなる。

生まれながらに身体が弱い事が発覚してしまう。その弱さはかなり酷く、滅びの魔力を使えば自分の身体を滅ぼしてしまう。

そのため、すぐに隔離された。一生魔力を使わなくていいようにと。

家の本邸から離れた高い高い塔の頂上。そこにアルブラ・グレモリーは住んでいる。

「外に行きたい……外の景色が見たい」

外への思いを日に日に積もらせていく。外の知識は本でしか得られない。

巨大な滝や熱を放つ太陽。人間の世界は平和だとか信ぴょう性の怪しい事も私には否定する事が出来ない。

親の顔もほとんど忘れている。もう何十年何百年会っていない。唯一覚えているのは弟のサーゼクスぐらいだ。

「姉さん！姉さん！」

「どうしたのサーゼクス？そんなに慌てて」

「実は僕も使えるようになったんだ」

慌てながらも掌に意識を集中させる。すると、紅い一つの球体が現れる。

球体が完成すると喜びを身体全体で表しその場で飛んだり跳ねたりする。

「良かった。サーゼクスは普通のなのね」

「普通？姉さんは違うの？」

「そうよ。私は黒い靄みたいなのよ・・・そうね他の人には秘密よ」

そう言っつて右手を前に出すと右手に突然ヒビが発生する。それも右手すべてを覆う領域でだ。

サーゼクスは突然の事に驚き誰か悪魔を呼ぼうとするが、アルブラの左手に掴まれる。でもと振りほどこうとした時異変が起きた。

ヒビから黒い靄が出てきた。靄は少しづつ広がっていき壁に当たるとその場所だけを的確に消滅させていく。

「これが私の醜い力・・・貴方は絶対にこうなってはダメよ」

見せてすぐに靄を押さえ込みヒビを消し、いつもの右手に戻す。

サーゼクスは驚きつつもこの時に気づいていた。姉さんは魔力を完全に掌握している事に、まだまだ自分は不甲斐ない事を。さらに精進をする事を決める事になったが、アルブラはその事を知らない。

その後も比較的穏やかに過ごして行つた。近くには誰もいないため怪我をしたとしても血を流し過ぎない程度の応急処置。

そのせいで身体には女とは思えない量のおびただしい傷が残っている。

ある日事件が起きた。

いつもの本に飽きたアルブラは新たな本を所望し持つてこられたのが魔道の本だった。

外に出れるかもしれない。そんな思いですぐに読破し独学で魔道を極めていく。

元から才能があつたアルブラにとつて、転移魔法陣作成など簡単ですぐに塔から抜け出し外へと探検に出かけた。

「凄い・・・空が青いし空気が美味しい・・・これが外・・・」

外に出れた感動からゆっくりと瞳から水滴が滴る。いまいるのは人間界で位置は日本の地脈の上だ。

時空間転移は初めてで本当はヨーロッパに行きたかったのだが、残念ながら日本に転移してしまった。それでも来てしまった物は仕方ないので、頭を切り替え近くを探索する事にした。

「おや悪魔がこんな所に」

「おいおいいい獲物だなこりゃ」

探索に乗り出してすぐだった。悪魔の宿敵天使に出会ってしまったのは。

天使は聖書の神が作り出した存在。悪魔に致命傷を与える光の力を使うことが出来る。戦闘を一度もした事の無い彼女には勝ち目はない。咄嗟にそう判断し駆け出した。

草木をわけながら森の奥に入っていくが上空から追ってくる天使は意に返さずに、まるでハンティングゲームをするかのように光の槍を放ってくる。

顔の横を通り過ぎ。ふくらはぎに掠り。髪を切り裂き。身体にかすり傷がどんどんついて行く。

逃げ回り始め一時間程が経ち身体はすでに限界に来ていた。限界の身体を突き動かすのは生きたいそんな気持ちによるものだった。

だが、次の瞬間には肩に光の槍が抉り口から声が漏れる。

「誰か… たす… けて」

飛びかけている意識を連れ戻したのは後ろから聞こえる二人の男の悲鳴だった。

後ろを振り返ると新たな天使の男が現れ、二人の男が殺されていた。

目の前にある死に身体は本格的に震え始めその場に座り込む。足は痙攣を起こすだけで役に立たない。

こうなれば滅びの魔力を使おうかそんな事を考えていると腹の虫が鳴ってしまう。

「ああ… まあ何だ飯でもいくか。一応言うが強制だ逃げられると思うなよ」

差し出された右手を握る事しか今のアルブラには決定権がなく、いやいやながらも握ることにした。

「アレ？私は」

「おつやつと起きたか。まさか肉を食ったら寝落ちするとは思わなかったぜ」

寝ぼけているせいで何があつたのか忘れていたアルブラは、目の前にある山のように積み上がった骨を見つめ思い出す。

アザゼルの持ってきた塩コショウで味付けされた焼かれた肉をどんどん平らげ、アザゼルの分も食べた自分が疲労から寝落ちした事に。

「美味しかった…です」

「今更敬語か？気持ち悪いからタメでいいぜ」

「ならタメ口で。これ美味しかった、それとなんで私を助けたの？」

素朴な疑問をぶつけた。

二人は本来交わるべきではない敵同士だ。なのに関わらず傷を癒し食料まで分けている。波の天使なら絶叫物だ。

なのに目の前の男はさもそれが当然のようにしている。それが分からなかった。

アザゼルは当然の質問に即答が出来ない。と言うより何故助けたのか自分でも理解出来ない。

いくら自分を自問自答してもこれと言った理由がない。強いて言うならば女だったからだ。

「ああ…。なんだその何で助けたんだ？」

「ぶくす、私が聞いているのに何で聞き返すの？面白い天使さん」

「いやーこれ結構ガチなんだよな。なんで助けたのかこれと言って理由がないんだよ。まあ助かったんだから良かったってところだな」

二人は見合つて吹き出す。この光景を他人が見たとして敵同士だとは誰も思わないだろう。

「あつ、急いで帰らないとバレちゃう」

「そうか」

「また来てもいい？」

「別にいいぜ。俺がいるとも限らないけどな」

「それじゃあまた来るね」

「またな」

二人は軽い挨拶をして別れた。

自前の転移魔法陣に乗っかってアルブラは帰路につき、アザゼルは自室へと向かい酒をチョビチョビ飲み一日を過ごした。

その後もその奇妙な関係は続き、アザゼルの帰る場所がこの家に変わったのは言わなくてもわかる事だ。

それに、最近ではアルブラが殆どの家事を担当しまるで通い妻のような生活を送っていた。

「後は洗濯と晩御飯の準備つと」

手馴れた手つきで掃除を終わらせると大量の洗濯物を籠に山のように入れせつせと洗濯機へ向かう。

洗濯機があるのはドアのかなり近くで洗濯物を詰めているとふいにドアの開く音が聞こえる。

いつもより少し早いアザゼルだろうと一旦洗濯物を置き出迎える向かう。だが、玄関口にいたのは全く知らない男だった。

「ほほう… 悪魔か」

アザゼルと同じオーラ放つ目の前の男は手をアルブラへと伸ばす。

墮天使への道のり

その日は何故か異様に仕事に追われた。いつもの数倍にも及ぶミカエル雑からの虐め用をどうにか片付け、彼女の元へ帰宅する。

全身疲労困憊で満身創痍。四字熟語のオンパレードになってしま
うが、それ程忙しかった。

結界に守られた家の敷地に入った時だある違和感に気づいたのは。

「結界が緩い?…まさか」

それでもアザゼルは頭の回転が早い。瞬時に最悪の事態が頭をよ
ぎる。

誰かしらの天使がここに侵入しアルブラが殺される。これは最悪
の想定だが、最低でも怪我をしている可能性は高い。

ドアなど気にしてる暇もないので、思いつき蹴り破り家へ強行突
入する。

それはリビングにいた。8の白い羽に赤い液体をつけ、高笑いして
いる見知った顔だ。

「コカビエルううううう!!」

「ん?な、おい待て」

コカビエルの声など届くわけもなく、光の槍を細く長く圧縮し全身
全霊で穿つ。

アザゼル自身ですらここまでの速度が出るとは思っていない。ま
さに火事場の馬鹿力だった。

玄関からリビングまでは5メートル。直進の道を一秒未満で走り
心臓を狙う。

「チ、待てと言ってるだろうがアア!」

このまま命をどうぞと差し出すわけもなく、二本の槍を作り盾の代
わりとして使う。

槍同士が激突した瞬間一本目は碎け散り、二本目にも大きな亀裂が
入る。

だとしても槍を止めた。それは大きな成果だ。

「何を血迷っているアザゼル！」

「何をだと……。テメエがアルブラを、俺のアルブラを殺したんだろうが!!」

「殺していないわ！逆にお前の発言の方が致命的だ！」

通常の槍の間合いになって気がついたが、羽に付いている赤い液体からはトマトのような匂いがする。

さらに、奥からは顔を真っ赤にしているアルブラが両手で顔を隠している。

やってしまった。心の中でそう呟きながら自分も赤くなった顔を両手で覆う。

「はあ…… 早とちりな上勘違いで仲間を殺すか…… 呆れて物も言えな
いぞい」

「すまん」

「さらにはその後に告白する…… はあ……」

「いやマジですまん。だからその事を言うな」

「俺の…… 俺の…… 俺の」

「お前もいつまでも引きずんなよ！」

あの後どうにか落ち着いたアザゼルに何があつたのか説明をするため、改めて椅子に座り合う。その間もアルブラはボソボソ呟いていた。

結論としては簡単で、料理を手伝おうとしてケチャップを入れていた袋を、握り潰してしまい白い羽にかかってしまったのだ。

白は洗濯物の時にも醤油やケチャップが命取りなのに、かけてしまったので自暴自棄になり笑っていた。

その光景を見事に勘違いしたアザゼルの攻撃からの告白。B級映画でももう少しマシな話を作るだろう。

と、巫山戯た会話も程々にコカビエルは真剣な表情になる。

「ここに来た目的だが…… 一緒に墮天しないか？そうすればその悪魔とも結婚できる」

「はあ？墮天？無理だろ。絶対にミカエル達が邪魔するだろうし、それに最悪熾天使全員出てくるかもしれないねえ」

「安心しろ。ガブリエルとラフェエルは手を出してこない。そう約束させた」

コカビエルはさも当然のように言っているがそれはとてつもなく難関だ。

まず、熾天使は天使の中でもトップクラスなため墮天などは決して許さない。

次に、買収などしようとも彼らは神至上主義のため根本的に無理だ。

なのに、コカビエルは約束させたと言う。その言葉が本当ならばかなり可能性は出てくる。

「半分か…頭数がいればなんとか」

「今集めているさなかだ。下手に広めれば他の二人の耳に入る可能性があるからな、慎重に集めている。予定では百人だろうな、今は二十人程度だな」

「なるほどな…」

普通に考えればメリットの方が大きい。デメリットを強いて言えば天使でなくなる事と狙われる事ぐらいだ。

天使に飽きていたアザゼルには別にデメリットとすら認識しないレベル。だが、アルブラも狙われる可能性が高くなってしまう。

即答は出来ない。これは二人の今後の人生がかかった大きな別れ目だ。

チラリと横を見る。もう落ち着いていつも通りのアルブラがこちらを見つめている。その瞳から伝わる思い。それしかないと覚悟を決める。

「その話乗った。俺も墮天するぜ」

「よし、お前が入ればかなり引き込みやすくなる、助かったぞ」

コカビエルはガッツポーズを取り、握手を求め手を前に出す。

これからは運命共同体となった友の手を握り返し、契約はその場になされた。

すぐにコカビエルは家出て仲間を増やしていくらしい。

そして、残るは二人だ。いつもの通りであれば会話も弾むのだが、告白の件もあり互いに話を切り出せずにいる。

無言で茶を飲み、少なくなつたので新たに無言で注ぐ。

「ああそろそろ帰る時間だろ？帰らなくていいのか」

静寂を破つたのはアザゼルだ。

時刻はいつも間にか進んでいて、そろそろ帰らなければまずい時刻だ。

アルブラは一度深呼吸をして、覚悟を決める。

「私は帰らない」

「はあ？おいそれは」

「アザゼルが今の種族を捨てるのなら、私も捨てるそれだけの事…それに、あの家に私の居場所はないから」

「……いいのかお前はそれで」

「うん。私はアザゼルの物だから」

「なっそれを言うのかよ！」

「うん」

さつきまでの静寂が嘘のように音が生まれ、笑顔の花が咲き誇る。

本格的に泊まるのであれば寝る部屋を用意しなければならぬので、部屋に布団を運ぼうとするのだが

「一緒に寝ないの？夫婦って同じ布団だつて」

「いやいや、まだ早いだろ。それはなほら色々進んでから」

「そっ…か…」

「あああ！よし寝よう。一緒に寝よう」

女の泣き顔に逆らえる男は極限りであろう。無論アザゼルは逆らえず布団をしまい同じ布団で寝ることにする。

アザゼルの部屋に初めて入ったアルブラは多少興奮しながらも、互いに色々疲れたのですぐに布団へ身体を沈める。

呼吸の音が耳の横で聞こえ、彼女のいい匂いが鼻腔をつく。

邪な事を考えればすぐに墮天してしまうので、一生懸命素数を数え

誤魔化すも、3. 14までしか知らないので頭の中でゲシユタルト崩壊を起こしそうになる。

布団に潜って十分、二人とも未だ眠れずにいた。隣に好きな人が入ればそれが普通の反応だ。

「ねえアザゼル」

「なんだ？今素数を」

「襲わないの？本ではそうだったんだけど」

彼女の知識はかなり偏っている。一般常識は疎いのに関わらずこういう変な事はよく覚えている。

自分の羽が白黒に点灯しているが分かる。

耐えろ。耐えろ。と念じて一回目は耐えられたが、二回目の誘惑には勝てずにそのまま二人は熱い一夜を過ごし、先んじて墮天してしまう。

終わりの始まり

墮天使製造計画から十ヶ月程経った。墮天使になりたい者は規定の百人もゆうに超え二百人集まり、本格的に計画が始動し始めようとしている。

「明日だろうな産まれるのは」

「いよいよか」

「何かドキドキする」

「俺は別の意味でドキドキだ。一応言っておくが俺には知識があるだけで、実経験は殆どない。そこら辺忘れるなよ」

ラブラブ過ぎる馬鹿夫婦に真剣なトーンで言い放つ。

そう、この会話通り二人の間には子供が出来、出産予定日まで明日となっている。

コカビエルはその事も踏まえ墮天計画は出産予定日と同じ日にし、産婦人科医の代わりに自分も立ち会う事になった。

アルブラの病弱は未だ治っておらず、出産が近づくとび弱くなっていつている。どうにか立って歩けてはいるが、顔色も悪くあまり出産はオススメ出来ない。

それでも二人は産みたいと決意が硬いため渋々折れ、念の為に立ち会うようにした。母体の身体が弱いと出産ごとに母体が死ぬかもしれないためだ。

三人はいち早くヘルモン山へ到着していた。

二百人に及ぶ天使達が欲望の限りを尽くしている間に出産する手はずだ。

何重にも防壁を展開している部屋にアルブラを閉じ込め、男二人は外の山から下を見下ろしていた。

「遂に明日か…長いようで短かったな」

「ああそうだな。翌日いきなり墮天した時はどうなる事かと思ったがな、今となつては笑い話だ」

「すまねえな」

「別に構わん」

地上から2814mも離れたここではかなり気温も低くなってきていて、二人が言葉を発するたび白い煙が出ている。

持ってきていた熱いコーヒーももう生ぬるくなってきている。

「これを一応渡しておく」

「なんだこれメモ用紙か？」

「最悪の場合はそこに行け」

「おいおい縁起でもねえな」

「ミカエルは何を考えているのか読めん。それに準備しておいて損はない」

「まあそうか」

ヘルモン山の麓にある術式で隠された小屋への行き方が記された紙を懐に入れ、一人寂しいであろうアルブラの所へ向かう。

「よしお前らしいな、自由に自分勝手に面白おかしく過ごせ！」

『おう!!』

翌日遂に作戦決行の日となった。

頂上では好き勝手に行き及んだり、酒を浴びるように飲んだりと本来ならありえない行動をする。

あまりのどんちゃん騒ぎに気づかれる可能性が高くなるが、これも想定済みだ。

戦闘が得意な者や名前がある程度有名な者もいるのでどうにかなる。なので、出産現場へと急いで向かう。

重い鉄扉を開けると白いベットに横になっているアルブラに、手を繋いでいるアザゼルがいた。

「作戦は決行された。陣痛はどうだ？」

「まだ大丈夫です」

「そうか。まあ急ぐ事はない、バレルまでまだ時間は」

ある。その言葉を言う前に山を揺らす衝撃が爆音と共に訪れる。

天井に付けている電球は落ちて粉々になり明かりが失われ暗闇が訪れる。

「どうなってやがる！」

「こう言う事ですよ、裏切り者達」

頑丈に作られているはずの鉄扉は光の槍に貫かれ、ドロドロに溶け原型を留めていない。

そして、廊下の明かりに照らされ熾天使の一人ミカエルが、ゴミを見るような目で見下している。

「早すぎる、早すぎるぞー」

コカビエルが叫ぶのも無理はない。想定では開始から四時間以降に襲われるはずだったのだが、十分足らずで捕捉され襲われてしまっている。

半年以上をかけて作り上げた隠蔽術式も何もかもが無駄になってしまった。

今すべき事は単純明快。アザゼル達を逃がす事だ、例え自分の命が消えるのだとしても。

「ミカエルウ!!」

「貴方程度では私には勝てませんよ」

「行け！俺が殺る！」

「後で酒飲むぞコカビエル！」

布団事抱え込み、非常装置を発動させる。

出入口から最も離れた壁に触れると瞬時にひっくり返り、部屋の裏側に出る。友の命懸けの時間稼ぎを無駄に出来るわけがない。

急いでその場から駆け出した。山をくり抜いて作った新品のアジトの壁はボロボロに崩壊していて、夥しい量の血痕が残っている。

爆発音のする方を避けながら進んでいき、アザゼルとコカビエルしか知らない裏道へ入り込む。

構造途中で余ってしまい急遽適当に仕上げた道だったが、まさかこんな形で役に立つとは思っていなかった。

「ごめんなさい。私のせい」

「違う、そんな事は関係ねえ。単に誰かが情報を漏らしたって事だ」

走り上がっていた息を整える。いくら見つからないとしてもこの場に留まり続けていれば、最悪見つかってしまうかもしれない。

一度昨日貰っていた紙を見て、南口の方が近いのでそちらの方に一本踏み出した時、壁が砕け散り一人の天使が血まみれで飛び込んでくる。

「なぜだ… 情報を話したら、殺さないやく」

「俺には関係ない事だ」

突然炎が発生し天使を燃やし尽くし、羽の一片すら残さず灰に還した。

灰になった奴は上級天使。いくら相手が強くてもここまであつさりやられるはずがない。

であればこんな芸当が出来るのは上級よりかなり上の天使であり、炎に関係する者は一人しか思いつかない。

「ウリエルか」

「これは、神への冒読者らしくこんな裏道にいたか、死して侘びよゴミ共」

直径十mの三人を包む炎の結界が張られ、これで逃げる事も隠れる事も出来なくなる。

ウリエルの使う炎は他の天使には見られない敵を葬り去る力で、推進力にしたり結界を張ったり剣にしたりと凡庸性がかなり高い。

そのため、サシでやった場合アザゼルが勝てる可能性は限りなくゼロに近い。だとしてもはいそうですかと諦めるわけにはいかない。

「オラァー！」

「無駄」

光の槍を投擲するが、炎に包まれウリエルに当たる前に消失する。

これこそがウリエルの炎の恐ろしい所だ。全て燃やし尽くし神の炎。まるで、グレモリー家の消滅の魔力のような力だ。

当たり前だが炎には聖属性が付与されているので、墮天使したアザゼルには大ダメージとなる。故に一撃も受けてはいけないハードモードである。

今度は槍を剣のように変形させ、近接戦を挑む。

逆に近づけばウリエルも自分の炎に焼かれる可能性があるので、勝機があるとしたらそこしかないと実行に移すが、その事を警戒してい

ないウリエルでもない。

「去ね」

「がハッ」

近づいてくるアザゼルに身体の捻りを加えた衝撃波をぶつける。中国拳法的に言うのであれば発勁と呼ばれるのだろうが、原理が少しばかり違う。

基礎的には体重移動による『突き飛ばし』で、異質な力によって吹き飛ばす。そのため、そこまで爆発的な威力は出ない。仙人や達人はこの事に該当はしない。

では、何を行ったのかそれは身体のしなやかさを活用した『拳骨』である。

天使と言えども肉体は人間にかなり近いので、空中で戦うより地面の方がやりやすい。それは足場が安定しているからに他ならず、しっかりと踏み込めるからだ。

だが、殆どはその踏み込みから一撃を放つ際に何割か力が落ちてしまふ。それを身体を捻りしなやかさを活かして100%を掌に集め放つたのだ。

その一撃をモロに受けてしまったアザゼルは肋の骨が何本も砕け散り、炎へと自分から飛び込んでしまふ。

「がアッアあ」

「痛いか、それが貴様の罪だ。では断罪の時だ、悔やみながら逝くがいい」

手元に剣のように展開した炎振り下ろす。

この時ウリエルは思い違いをしていた。アルブラを戦闘が出来ない弱い悪魔だと判断し、後回しにしてしまったのだ。

結果として彼女はアザゼルが傷つけられた怒りにより覚醒を果たした事になる。

「俺の剣が消えた…。いや消滅したのか。女お前の力だな、まさかグレモリー家がいるとはな」

「お前を許さない…。確実に仕留める、だからもつと力よ安定しろオ!!」

彼女が無意識に抑えていた力が爆発的に高まり、至るところがヒビ割れ黒い靄が出てくる。

いつも通りの暴走。だと一瞬思ったが暴走ではなく安定だった。ヒビはドンドン広がり身体の全体を支配した時には、黒い靄も真紅の魔力へと変貌し完全支配下に置いた。

アルブラが十二分に魔力を扱えば悪魔最強になれる。誰が言っただか分からないがその言葉は現実の物となる。

「はアアア!!」

「ぬっ悪魔がアアア!!」

燃やし尽くし対消滅。互いに相殺しあい殆どダメージにはなっていないが、どちらが押しているのかは一目瞭然だった。

炎は無制限に使える物ではなく、顕現出来る一定の量が定まっている。

その殆どを結界に使ってしまったので、戦闘においてあまり使えない。だから格闘術を習得したのだが、それが仇となり戦闘が万全に行えない。

覚醒した直後で力が上手く扱えていないおかげで今は耐えられているが、次第に慣れ始めかすり傷を負い始めている。

「ああああああ!!」

「貫け滅殺の槍」

魔力で象った槍は最強の矛となりウリエルを穿つ。

それに対し死を覚悟をしたウリエルは結界を解除し、最強の盾『インフェルノ・ブルク神炎の城塞』を発動する。

最強の槍と最強の盾。矛盾の対決は双方の力の消滅の形で現れた。一命を取り留めた。そう思ってしまったウリエルはいつの間にか背後に回っていたアザゼルに気づくのに遅れてしまう。

「吹き飛ばやアアア!」

「何イツ!」

確実に肋を砕いたはずの男は立ち上がっていて全力の拳を奮ってきた。咄嗟に防御するが、その一撃は何物よりも重い。

骨は砕け散り強引に破られ、顔面に拳が迫りそのまま撃ち抜く。

殴られたウリエルはそれで意識を失いはるか後方へ吹き飛んで消えていく。死んだか生きているか分からないが、立ち上がれるわけがないと理解している。

肩で息をしているアザゼルはその場に膝から崩れ落ちる。別骨が治った訳でもなくて、アドレナリンで痛みを消し強引に殴つただ。

そのせいで身体は震え殆ど力が入らない。だとしても立ち上がる。そうしなければならぬ。

血反吐を吐きその場で痛みから倒れてしまったアルブラを抱えあげ、足を引きずりながら進む。

何ら変哲もない木製の小屋なのだが、深い霧に覆われていて特殊な入り方をしなければ辿り着く事は出来ない。

アザゼル達はどうにかその工程を終わらせ小屋に入る。

中はシンプルな木の壁なのだが、異質な存在の暖炉に小さなベットが一つだった。

とにかく彼女の安全を確保するために小さなベットに横にする。

「大丈夫… 夫か？」

「くあつあはあ」

「どうすれば」

「暖炉に火を灯せ。陣痛だ」

窮地に現れたのは血まみれで、左手をだらんと垂らしているコカビエルだ。

最初は意味が分からずボケつとしていたがすぐに理解し、急いで暖炉に火を灯し温める。

「よし、俺に続け、ヒツヒツフー」

「ヒツヒツフウウ」

「ヒツヒツフー」

「ヒイー！ヒツフウー」

今のアザゼルに立ち入る隙はなくなつただ祈るばかりだった。神を裏切つたのだがそれでも神に祈る無事に産まれてほしいと。

彼女の苦痛の声を聞き耳を閉じたくなるが我慢し、耐え抜き遂に産まれる。

「おぎゃーおぎゃー」

「産まれたか……」

すぐに暖炉で軽く炙ったあつたかいタオルで子供を包み、アザゼルに渡す。

「これが俺の子か……ふはは何だろうなこの感覚」

「私にも……見せて」

「おうほれ」

ベットで横になっているアルブラの横に赤ちゃんを置く。

産まれたばかりでまだ殆ど毛もない可愛い我が子の頬を突つつく。柔らかなく反発し鳴き声から笑い声に変化した。

「良かった……最後に見れて」

「最後つて縁起が悪いだろうが、お前はこれからも」

「無理だよもう。ほら足を見てみて」

言われた通り見てみると太ももから下が消えていた。

考えるまでもなく原因は明確だ、先程の戦闘による覚醒だろう。

元々身体の弱かった彼女の身体では全てに耐えきれず、徐々に身体を消滅させていつている。

「何か何か」

「無理だ出来ることは無い」

頭を抑え始めるアザゼルの肩にそつと手を置き、残酷なようだが事実を突きつける。

認められない。認めたくない。これから幸せになるのに、幸せになるはずだったのに。

彼女は消えようとして、それに自分は何も出来ない。自身の無力さを今痛感してしまう。

「すまねえ俺がもつとしつかり」

「ううん。これでいいの、最後に好きな貴方を守れただからもういいけどね最後は」

「ああ……分かってるよ」

溢れ出る涙を払い唇を合わせる。

彼女が完全に消えるまでずっとずっとそれは続き、心の底から彼女は笑顔のまま消えていった。

最後にか弱い力で頬を触れた手も消滅。完全にこの世から彼女は消えた。

「うあああつああ」

ただ泣き叫んだ。それしか彼には出来ないからだ。

子供はこのまま連れていけば確実に死んでしまう。そのため、善良な民間人に預け生き残った半数の堕天使を率いる事になった。

奇妙な出会いから始まった奇妙な関係は、たったの一年にも満たない期間であり、彼ら人外にとってはあつという間の時間だ。

だが、アザゼルは今まで生きてきた期間よりも熱く強い思い出がそこにはあった。

△△△△△△△△△△△△△△△△

「てなわけだ」

「そんな事が…」

「それでだ。祐斗は言わば俺の子孫であり、先祖返りして俺たちの力を得てしまったんだろうと思われる」

あの後から延々と血は引き継がれ、どんどん血が薄まり力も弱くなって行ったのだが、時々先祖返りとした力を取り戻す者もいた。

結局その者も魔女狩りと称して殺されていった。

その中でも祐斗は特別でアザゼルとアルブラの直の子供と、同等の力を持っていた。それが会議の時に一時的に覚醒し、結果として自分を攻撃し倒れてしまった。

どうにか手足の消滅は回避出来たのだが、次禁手を使えばどうなるか分からない。そんな事態なのは変わらない。

「これは私怨だ」

「あぁいいぜ」

サーゼクスの拳を避けることなく、手をおおっぴらに広げ殴られる。

これはある意味いつか伝えねばならないと思っていた事だ。そうすれば殴られるのは容易に想像出来、最悪殺される事も想像した。もっと殴つてもいいのだがサーゼクスは一撃でやめ、椅子に座り直す。

「いてて。まあてなわけでだ、今後の方針としては絶対に力を使わせるなよ。次は分からねえからな」

「任せろ。確実に止めてやる」

虞淵は頑固たる意思で宣言し、未だ寝ている裕斗の元へ全員で向かう。

△△△△△△△△△△△△△△

そこは山である。

富士の樹海。迷いの森などとも呼ばれているそれは、人外ですら避けて通る。

過去に何度も挑んだ調査隊は見事帰らず、天使、悪魔、墮天使、妖怪。種族問わず入れば帰らないため不干渉を決定した。

そのはずの森を一人の青年が登っていた。

山登りの適した格好ではなく、どこかの学校の制服の青年は、全身ボロボロにしながらひたすらに登っている。

登り始め一時間遂に歩みを止めることになかった足は止まる。

そこは少し開けた場所で、目の前に巨大な穴がある。

青年はなんら臆することなく穴へ入る。すると、置くから唸り声が聞こえる。

『GEYAAAA』

「やはりここにいたか。これで俺の願いは叶う」

出てきたのは四足の王道の黒いドラゴン。なのだが、金と黒のオーラを全身から放っていて明らかに威嚇している。

「クロウ・クロワツハだろ？」

『ほほう俺の正体に辿り着いたか』

突然流暢に喋り出した龍の正体は三日月の暗黒龍である。クレッセント・サークル・ドラゴン

ケルト神話において戦いと死を司る龍で、邪龍と呼ばれる存在ながら二天龍と同等の強さを秘めている最強格の龍である。

この場所は実はこの龍の隠れ家であり、勝手に侵入してきた人や人外共を始末したに過ぎない。

この事を予め調べて知っていたのにも関わらず青年はこの場に来たのだ。ではその理由は何なのかクロウにはまるで分からない。

「俺と契約しろ」

『契約だと？この俺にか……フハハハハハ。いいぞ面白い聞いてやる』

「復讐だ。俺の全てを奪った一人の男を殺したい。そのためにお前がいる」

『ほうなるほどな……いいだろう。但しその身体は』

「全てくれてやる。だから力をよこせ」

まさかの即答にまた笑ってしまう。それ程までに目の前の人間は常軌を逸していた。

そのせいなのか異様に引かれ興味が湧いてくる。

『名前はなんだ、俺だけ知らないのでは契約ではないだろう。それと復讐の相手の名前もだ』

「兵藤一誠、相手は木場祐斗だ」

ここに運命が狂わされた一人の人間の復讐劇が始まった。この後一誠は家に戻らず失踪届けが出されるも、見つからず戸籍上死亡した。

最終決戦 コカビエルの憂鬱

昼間ながらも一通りが異常に多く、ビルに付けられている大量のアニメポスター。これだけ言えば分かるだろう。

そう、オタクにとって聖地。外国人に取っては行くべき場所、秋葉原へしかめっ面のコカビエルは来ていた。

本来は嬉しく、楽しみたいのだがその身は投獄されている身…だからではない。気分が進まないのは背後にいる

「これが秋葉原か」

「おお！凄いつすよ、あつ、アレ！」

「落ち着きなさい。カメラで記録し後でもう一度楽しめばいいのよ」

「そうだな、我の分も頼むぞ」

「御意」

冥府の主たるハーデスとその配下死神達であった。

なぜこうなっているのかは少し前まで遡る。

現在冥府でとある会議が行われていた。

会議に出席しているのは、冥府の主神ハーデス、その腹心プルト、どこからか湧いて出たベンニアー、冥府においてハーデスと同等の権力を待ち崇められているコカビエルだ。

『さっそくだが、アレはどうなった？』

「はい。今制作をしています、サンプルとなる駆け魂が一体程度欲しい所です」

「私も頑張ってるっすけど、捕獲アイテムがないと逃げられるだけっすね」

『そうか。どうにか神聖書のみより引き出す他ない』

冥府ではコカビエルにより伝わったアニメや漫画が大ブームとなり、冥府の方針すら変えようとしている。

死神などが登場する作品が特に人気が高く、中でも神のみは大ヒット

トで人間の心の隙間に入る駆け魂を捕まえようと開発が日夜すすんでいる。

そして、それらを広げたコカビエルは拘束が全て外され、自由に闊歩している。

「コカビエル様、どうにかありませんか？」

「いや、さすがにそれは守備範囲外だからな…。いつそ秋葉原に行けばいいだろう」

『…………では秋葉原へいくぞ』

この発言を後悔するのは言わなくても分かっってしまう。

それで、秋葉原に来ているのだが

「「アキハバラー」」

人間に擬態し、ハーデスは全髪が真っ白で杖をつくぐらいのお年寄りになり、プルートのボロボロのジーンズに白のサイズのあってない半袖を着て、長い黒髪を後頭部で纏め二十代の女性へ。

ベンニーアはフードを深く被り目元をかくしているが、手につけているフワフワの猫の手もどき手袋は可愛さをより表している幼女になっている。

「それでどこに行くんだ？」

「アニメイト」

「メイド喫茶」

「ゲームセンター」

「…で？」

「主神の我が先だ」

「言え、ここは毒味のような感覚で」

「パーっと遊ぶっす」

三人とも主張を周りと揃えようとせず、自分が自分が！となっているので、仕方なくコカビエルが意見を纏める。

「先にアニメイト、その次にゲームセンター、最後にメイド喫茶だな。それが無難だ」

「いいだろう」

「御意」

「りよ」

主神より権力のある投獄者とはいかに。

そんな事を思っているせいかな、最近胃が痛くなってきたのはここだけの話だ。

駅近くの六階まであるアニメイトへ入っていく。

さすがは、アニメ専門店。多種多様な品物が売っていて、三人とも籠いっぱいに商品を詰めている。

一体どこにそんな大金があったのかなどは聞かない方がいいのだろう。

「これがいいだろうか」

手に取ったのはメイドのドラゴン事カンナのキーホルダーである。この商品を欲しているのは相部屋のサマエルだ。

最強の龍殺しがドラゴンキャラが好きな事に疑問は浮かぶが、熱く語って来るのでよく軽く引き気味で聞いている。

特にカンナが好きなのなので適当に買っていく。フィギュアも近くにあったのでそれも持ってレジへ行く。

全員会計して驚いたのだが、三人とも手持ち袋パンパンのが四つ程あり、かなりの大金を払ったようだ。

「これ持って行くつすか？」

「超越せ。先に冥府^{あちら}へ送っておこう」

ハーデスの権能を無駄な事に使うなど言いたいが、自分も送ってもらうので言いたくとも言えなくなる。

次の目的地ゲームセンターへたどり着く。

『SEGA』の文字が大きく表示されている建物へ入っていく。

途端に尋常ではない音が耳に届く。コインが落ちる音、UFOキャッチャーが動いている音。多種多様な音がなっている。

ベンニアは迷いつつも看板の指示に従い地下へ降っていく。

地下へ下ると雰囲気が一変し、それぞれが

目の前の巨大なモニターとにらめっこし、イヤホンと機械を繋いでいる。

かの有名な音ゲーゾーンである。

「ここに来ることになるとは」

「ここが」

「ベンニーア？なぜ？」

プルートの声をかけようとした時にはベンニーアの目は獲物を狙う目になり、猫の手手袋のままイヤホンを機械と繋ぎ百円を投入する。

そこで目を疑う事になる。

画面から高速で流れてくるノーツを巧みに計十本の指でパーフェクト判定をもぎ取っていく。

背後から見ている三人はあまりの腕の速さに驚き、ベンニーアがゲーム終わるまで眺め続けていた。

「いやー疲れたっす」

「凄いのね、見直したわ」

「我也久々に本気を出した」

「腰が…腰が」

のち、ハーデスとココビエルも挑戦し戦場で鍛えた反射神経をフル活用して楽しんでいた。

プルートは一人UFOキャッチャーへ赴き大量にフィギュアをかっさらった。

最後に訪れたのはメイド喫茶である。

「どうぞー♡ご主人様♡」

「うっひょい！」

「やはりメイドは尊い」

「美味しいっすねお姉さん」

「もう可愛いな♡」

「なんだこれ」

「ご主人様あーん♡」

店の全商品を買って占めキャバクラ状態になってしまった。金に物

を言わせた結果こうなってしまった。

このメイドさんたちがこいつらの正体を知ったらどうなるのか気になってしまう。まあ信じないと思うが。

結局三時間程戯れた所で冥府へ帰還することになった。多少名残惜しいところではあったが、サマエルへの土産を渡さなくてはいけない。

すると、駆け魂センサーと専用の捕獲道具が完成したと知らされ、驚きと共に当初の目的を忘れていた事を思い出した。

ウホツ☆男だけの温泉回くホモを添えてく

「やっぱり露天風呂にいかないとな」

「そうですね、アザゼルさん」

「おいおい、アザゼルさんはねえだろ。せめて父さんかパパにしろ」

「もう義父はいるのでダメです」

「なら呼び捨てにしろ、さん付けは気持ち悪いからな」

アザゼルと裕斗は身にまもっていた服を脱ぎながら雑談をしていた。

先程会話でも上がっていた通り、ここは露天風呂であり、傷の治りが早くなったり美容にいいなどのいい事づくめの温泉である。

今は何事もなく生活できるようになった裕斗ではあるが、完全に復活した訳ではなく、このように身体に効果のある事をしている。

一応二人は薄くではあるが血が繋がっていて親族ながらも、仲がよいとは言いがたい。なので裸の付き合い一つでもすれば良くなるだろうと、二人きりで温泉に来ていた。

裕斗は言葉巧みに曹操などにデータラメを吐き、温泉に来ている事を知られないようにしていた。理由はもちろん貞操を守るためである。

最近自宅の風呂に入っている際に突撃してくるようになり、温泉ともなれば広いためその可能性がより上がる。まさに貞操の危機だ。

それを回避してきて、久しぶりにゆっくりと湯船に浸かる。

「うひよ凄いなこりゃ」

「星が…綺麗だ」

服を脱いだ場所は小屋で、そこまでは転移で来ていたので気づいていなかったが、雲ひとつない夜空は星が輝くには絶好の舞台であった。

湯船から上がる白い湯気。それは天高く上り消えていく。

人避けの結界が張ってあるので人は一人もいない。完全に貸切である。そのおかげで風で揺れる水の音しかない。

「はあ…いい湯だな」

「久しぶりです、こうやってゆつくりするのは」

「だろうな。となればだ、お前は誰が好きなんだ？たくさんいるだろう？」

「いやそれは」

まるで親子のように湯船の中で楽しく談話している。

で、その二人を遠くから監視している者が多数いた。

露天風呂は標高の高い位置にあり、周りは木で溢れている。その中の一つに

「ふう…耐えきつたのはこの三人か」

「はあ…はあ…危なかった。さしもの俺でもあと少し我慢出来なかったら、あいつらと同じだったな」

「全くだぜ」

木から落ち鼻血を池のように垂れ流している琴音、奏汰は死人のようにピクピクしている。

どうにか耐え抜いた虞淵と曹操とヴァーリは鼻を抑えながら、望遠鏡を覗いている。

そう、彼らは全員揃って怪しげな裕斗を追跡し、裕斗の裸を覗き戦死者が多数現れたのだ。

「だが、イマイチ声が聞こえないな」

「確かにそうだな…」

「くくく、ならいい物があるぞ、これだ」

「いな、なんだってー」

驚愕の声が響き渡らない程小さな声で驚いた。

追跡者がバレる大きな要因は隠れ眺めているからだ。怪しい視線を感じ気づかれる。

ではだ。隠れなければバレにくいのではないか？

『透明マント』これはとある漫画より作り上げた道具だ。被れば魔術的にも視覚的にも感知出来なくなり、最強のステルス状態になる。

だが、今はまだ未完成のためかなり衝撃に弱く、下手な衝撃が加わ

るとステルス状態が切れてしまう。

だとしても彼らは大見得切つて覗く。

『すまない…… 本当にすまない』

『馬鹿！ジークみたいいな事を言うな！』

『俺も…… もう…… ぐはあ』

魔術的にも感知されないので魔術により脳内に直接語りかけている。

既に裸でかなりのダメージを受けたのに、触れられる距離にあるのだからもう死んでもおかしくない。

鼻をねじ曲げ血が流れないようにしているが、それももう限界が近い。

「ふう…… そろそろ出るか」

「そうだね」

裕斗達は湯船から出て立ち上がる。

そうすれば、今まで隠れていた物が頭になるのだ。

人類悪顕現。

顔が少し童顔チックな裕斗の股間に一匹の無限が佇んでいる。

顔に見合わず凶悪なそれは、水を弾き月明かりで輝く。えげつない

それは三人の瞳を奪うと共に死を宣告した。

「うん？なんかやけに濡れてるな」

「そうですか？よく分からないけど」

「まあいいか！よし、下の街のそばでも行くか、昔から変わらない美味いどこがあんだよ」

「美味しそうですね。楽しみにしてます」

「おうよ」

変な生ぬるい液体が足に当たったが、特に気にすることなく服のある小屋へ戻っていく。

そして、血に伏せた三人含めストーカーし倒れた五人は五日間家に帰る事はなかった。

平和が崩れる音が聞こえる

三勢力会議から約一年経過した。
駒王町にて二度目の夏を裕斗達は感じる事になる。

この町は大きく変貌を遂げた、！

この町を管理していたリアスは部屋に籠ってしまったので、代理でソーナが担当する事になった。

そのため、方針が色々変わり。町に張られる結界がより強固の物となり、魔王以上のレベルでしか破壊できず、転移魔法陣で外から入る事が許可無しには出来なくなった。

はぐれ悪魔も一掃し、悪魔に人間が狩られる事が無くなり安全性はかなり上がった。

住んでいる住民は嬉しいほか内が、当のソーナは沈んだ表情で扉の前に立っている。

「リアス外に出ない？」

扉に声をかける。

だが、向こうからの返事がない。これはいつもの事だ。出てくるのは本当に気まぐれ。それだけリアスは追い詰められていたという事だ。

「ダメですか」

「ごめんなさい。力になれなくて」

「いえ、いいのですわ。リアスには色々あったのですから、たまには休憩も必要です」

「また来ます。朱乃さん」

「ええよろしくお願い致します」

可憐で美しく、風に綺麗に靡いていた黒髪は毛先から壊れ、頬もやせ細り過去の姫島朱乃の面影はほとんど無くなっている。

申し訳なさを感じながら軽くお辞儀し、彼女らが住んでいるマンションを後にする。

そして、すぐに魔法陣により駒王学園へ跳び旧オカルト研究部の中

に入る。

屋根はボロボロに崩壊しており、中も荒れるだけ荒れ、部屋と呼べる物が何も無い。

そんな場所へ何故来たのか、それは彼女にも分からない。ただの気まぐれとしか言えず、彼女に扉越しに会ったら毎度来ている。

「私にもっと力があれば……リアスも……」

「君が弱気になってどうするのかね？」

「曹操さんですか」

誰もいないはずの部屋に突然現れたのは、会議後突然教師として転職してきた曹操だ。

なんでも、彼の家族の一人が大食漢らしく食費がかなりまずいらしく、慌てて仕事を探しここに就職した。

一応教員免許は持っていたのでなんら問題はなく、今ではイケメン先生として女子人気はかなり高い。

コツコツ。革靴の底を鳴らしながらリアスが使用していた机に近づき、その上に置かれているノートを手に取り中を見る。

それには、数々の彼女の苦痛の聲が刻まれていた。管理者として表に出さず、こうやって誤魔化していたようだ。

「私には本当に資格があるのでしょいか……この町を守る資格が」

「有る無しに関わらず、誰かがやらねばならん。それがたまたま、次に権力の強かった君に移っただけの事。失敗しても誰も何も言わんさ、いや言わせないと言い換えよう」

「ふふ」

ドヤ顔を決める曹操に、思わずに吹き出してしまう。

いつの間にか教師が板に付いた曹操は、このように小っ恥ずかしい事を平気で言うようになった。

どこぞの物語であれば恋愛が始まるのだろうが、彼が誰が好きなのかなど知っている身からすれば笑い事である。

「それでは君に鍵を渡しておくよ。出る時には鍵をかけ返してくれ」

「はい、分かりました曹操先生」

ホント何のために来たのか分からない曹操は、嵐のように去ってい

く。

けど、多分励ましに来たのだろうと、思ってしまう。

ああ、アレで男好きでなければ良かったのにそう思ってしまう。

リアスの椅子がふと目に入り、飛び込むように座る。

埃が溜まっていたのか埃が舞い上がり

「目に埃が…くっ…あ…くうっ」

何ヶ月ぶりの涙だろうか。もう思い出せない。

今までせき止めていた物が溢れるように流れ、涙は二十分間止まる

事は無かった。

「あと一時間程暇ですね。休憩の時間を長く取りすぎましたね」

どうにか感情の爆発を抑え、管理人としての義務を全うすべく心に鍵をかけ、部屋の鍵を職員室へと戻す。

今は年齢的には大学に行くはずだったが、思った以上に管理人としての仕事が忙しくなり、殆ど行っていない。

この炎天直下の元変わっている町を眺めながら歩いている。

小さかったビルはより大きくなり、空き地だった場所にはビルが建つ。正しく都会と呼べる物に至ろうとしている。

「懐かしい場所も殆ど消えましたね」

辺りを見回しても子供の頃見た光景はほとんどなく、初めましての物ばかりだ。

正直悲しいと思う心もあり、嬉しいと思う心もある。

今は無き光景に思い耽ながら歩いている時、何か嫌な予感がし空を見上げる。他にも周りにいる一般人や人外も同じく空を見上げる。

「なんだあれ？鳥か？」

「いや、鳥にしては人形で羽が」

「天使？」

見上げた先に合ったのは、太陽と重なる黒い羽を持った人型の影だ。

かなり遠いせいで黒い点のようにはしか見えていない。何が？そう

な疑問を思っている中、一人だけ頭の回転が早いソーナは異変に気づく。

本来ここは不可侵条約のような物があり、人外が生活できる代わりにその本来の姿を晒さない事が決められている。

ハロウィンなどのイベントや非常時には除くとされている。

今は特別なイベントなどは無く、普通の平日に近い夏休みである。太陽から注がれる日差しを眩しそうにするいつもの日常。一体どれだけの苦勞がこの平和を気づきあげたのか、極一部の人物しか知らないだろう。

だが、いくら丁寧に組み上げ大事にしても、破壊は一瞬である。その日ソーナはそれを痛感することになる。

「眩っ！」

雲一つない晴天の中。空が何故か光。そして、極雷がこの町に降り注ぐ。

俊足の如く降り注ぐ雷を止めたのは強固にした結界だ。

衝突した瞬間大量の火花が飛び散り、鼓膜が破れると思ってしまうぐらい甲高い音が鳴り響く。

その音を聞いた全員がその場でしゃがみこみ、耳を抑える。中には気絶している者もいる。

ソーナもその場でしゃがみ必死に耐える。結界なら大丈夫だ。そう心に言い聞かせながら。

だが、抑えていた耳に最悪の音が聞こえる。

バリッ。

ガラスを床に落としたような、何かが割れる音。今の状況において割れる音が発生する要因は、結界が割れる音に他ならない。

何も知らない一般人は頭を傾げているが、何が起きたのか理解した人外は顔を真っ青にする。

「攻めてきた……攻めてきたんだ！」

「逃げろ！殺されるぞ！にげろおお!!」

「死にたくない！死ぬのはいやだ！」

悲痛な叫び。悲しみは伝染し何ら状況を理解してない一般人まで

もが叫びながら散り散りに走る。

「まって、おちっ」

本能的な嫌悪感が身体をなぞる。

空を見上げると見つけてしまった。この世の全ての負を集めたような危険な存在を。

黒いフードを深くかぶっているので分かりづらいが、纏っている雰囲気は今まで見てきた中で一番邪悪で気持ち悪い。

その物体は天使もどきの近くに突如として現れ、すぐに消える。境界が消えた事で転移が出来るようになったからだろう。

『ああ、テストス、聞こえてるかにや?』

巨大な黒い魔法陣が空中に展開され、そこから陽気で可愛い女の子の声が聞こえてくる。

『我々は天翼種^{フリユージェル}。恨み憎しみが残された感情。その思いのままに我らは復讐する。天使、墮天使、悪魔、人間、無事に帰れると思うな』

黒い魔法陣のそばに黒い塊が三つ現れ、こことは違う映像が流れる。その光景はまさに絶望そのままだった。

すぐに目がいったのは見慣れた場所である冥界であった。

街の建物は軒並み破壊され、あまりの強さから超越者ともまで呼ばれている二人の魔王が、二人の少女の前で片膝をつき息をあげている。

『アジユカはどう思う?』

『アレは魔術でも魔法でもない、ただの魔力の塊だろうな』

『作戦会議は終わったかしら?』

『魔王弱すぎ。勇者の気分の気の字も味わえない』

紫の髪の少女とピンクの髪の少女が、魔力を掌には集中させ電撃を放つ。

次は悪魔と対極的な存在である天使だ。

潔白なる城は崩落し、天使の白い羽が赤く染まっている。見るも無残な光景だ。

『くっ、もどき風情が!』

『あらら? そのもどき程度に勝てない貴方は、ゴミかしら?』

『チツ、神炎よ!』

『それ、私も使えるの忘れたのかしら?』

ウリエルと黒髪の女性から放たれた炎は互いが互いに燃やし尽くす。二人は全く同じの炎を使っているのだ。

最後は、悪魔とまだ関わりの強い堕天使だ一番衝撃的だったのはここだった。

黄金の鎧を身に纏ったアザゼルの胸を右手が貫通し、掌には未だに鼓動している心臓がある。

『アザゼル!いま助けに!』

『バカやろお!選択を吐きがハツ... 違えるな!』

『しかし』

『もういい?』

空気に触れていた心臓は握りつぶされ、大量の血が空を舞う。

三勢力とも壊滅的な被害の光景は、人外達にとっては絶望の他ない。至る所でその場に倒れ込み、目からは生気が消える者が続出している。

『うにゃ?いい感じに絶望してるね... ならもつと絶望しようか!天撃砲撃まであと3秒』

『逃げ』

まだ2も1もカウントしていないのだが、多数の極雷が町を蹂躪するため降り注ぐ。

結界が破壊される少し前、駒王町の中で一番高いビルの中ではこの後の悲劇を夢に思わない彼らは談話していた。

「ふあっ... 眠う」

「おはようフリード」

「寝坊だぞ、フリード」

「あいあい」

微妙にはだけ見えている腹を抑えながら、髪がボサボサのフリードが出てくる。

あまりにひどい格好に手招きで虞淵がおびき寄せ、クシを使って髪を整えていく。これはいつもの事だ。

第二の母と呼ばれる由縁はそこにある。

「あつ？奏汰はどこいった？」

「朝風呂だそうさ。身だしなみを整えたい年頃なんだろうよ」

「ふーん。突撃してやろうかな」

「やめとけ、殺されるのがオチだ」

一瞬風呂場に行きそうになった足を回転させ冷蔵庫へ向かい、飲みかけの牛乳パックとヨーグルトを取り出す。

持ったままソファアールへ向かい座り、二つを一緒にし合わせて食す。フリードの奇妙な食い方だ。

その時だ結界が破壊されたのは。

とてつもない魔力の衝突に裕斗は窓へ近づき、感覚を頼りに空を見上げる。そこで見たのは天使だ。

「天使？」

「いや、天翼種だな」

「まさか攻めてきたのか」

「その通り」

「なっ！」

普通に会話をしているが、質問に返答した声は聞いたことのない声だった。いや過去に聞いたことはある声だ。

丁度それが現れたのはフリードと虞淵が座っているソファアールの向かい側で、フリードを深く被った男がいた。

瞬時の動きはフリード達が早く、すぐに消滅させるためフリードは亜空間から魔剣を取り出し、虞淵は赤い鎧を身に纏う。

「ギガンティック・インパクト赤龍帝の衝撃ツツ！」

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣ツツ！」

「すでにそれは視た」

裕斗に作ってもらった最強硬度のエクスカリバーは男の指に当たっただけで崩れ、指を立てなぞるように肩を触ると、フリードの肩から先が切断される。

魔力を拳の先に集中させ放つ、爆発的な拳はいとも簡単に片手で受け止められ、そのまま握りつぶされる。

そして、人差し指を弾いて腹部に当てると、鎧が陥没し骨の碎け散る音が鳴り壁に頭から埋まる。

「あぁ」

「お前に用はない」

フリードは頭を鷲掴みにされ床に投げ出され、三十階の床から一階の床まで止まることなく進み続ける。

この間わずか三秒。彼らが弱いわけがない。それは、共に肩を並べた事のある裕斗は分かっている。

となれば、この男が強すぎる他にないのがすぐに理解出来た。

フランス・ブレイクウウ ゲフリーレン・ケーニギン・シユビテン
「禁 手 !! 氷結の女王蜘蛛 !!」

ドア一枚挟んだ向こうから声が聞こえ、みるみる温度が下がっていくのが理解出来た。

奏汰の最強最悪神器の禁手。

それだけでも強いのにさらに手を打つ。

「摩訶鉢特摩」

空間全てを瞬時に凍結させ、時間すらも凍らせる究極の一撃。

これは裕斗ですら破る事は不可能に近く、最強最悪の技だ。

「良くも虞淵達をおお !!」

「騒ぐな耳に響く」

「なんで、動いて」

本来凍ってなければおかしいはずの男がさも当然のように、動いておりゆっくりとソファーから立ち上がる。

もしかして不発？ そう思い裕斗を見るもやはり凍っている。

おかしいのは目の前の男なのは確定する。

「確かにこれは不意打ちには強いだろうな。だが、一度視たのだから対策も立てるだろう」

男は『視た』と言ったが、この技は裕斗との戦闘以来一切使っていない。無論その前も誰にも見せていない。

だからこそ、ありえないのだ。この技を『視る』事など。

いや、そも百歩譲って『視た』としても対策を立てることすら不可能。それがこの能力のはずだ。

一体どんなトリックを使っているのか、相手の節々を確認すると信じ難いことがわかった。

男からは常時煙が上がっていて、自分の体温をかなり高温にし凍らないようにしているのだ。その証拠に男の周りは床も何も凍っていない。

「そんな！」

「驚いてるようじゃダメだな」

男は一瞬で間を詰め、背後に回ると背中に生えている六つの蜘蛛の足を強引にもぎ取る。

当たり前だが、この足は神経と直結していて、この痛みは足をもがれるのと同様だ。

強引にもがれ激痛のあまりその場に倒れた奏汰の頭を男は蹴り抜いた。

抵抗の余地なく吹き飛ばされ窓から地上へと叩きつけられる。

「準備運動程度にはなったか」

「奏汰…… よくも！」

「はっ、怒ったふりか？ 木場祐斗ではない別の男」

「なんでそれを」

「なんで？ そりゃ見たからだろうな」

この男は先程から『視た』と言う言葉を多用している。それは比喩表現だと思っていたが、裕斗の過去前世まで知っているとなるとその言葉の信用性は少しばかり上がってくる。

「何者だ」

「やっつと、そのキモい演技をやめたか。ならあいさつだ。初めまして木場祐斗、俺はただの復讐者^{アウエンジャー}。名も無いただの復讐者だ」

フードを取った先に居たのは死んだはずの兵藤一誠だった。

髪は黒く変色し顔の首近くは鱗で覆われており、もう人間としての気配すら薄くなっていた。

最終決戦開幕、偽物VS復讐者

目の前に立つ男から放たれるオーラはオーフィスに似ている。言ってしまうえば龍のオーラだ。

自称復讐者^{アウエンジャー}は明確な殺意をぶつけてきていて、額から汗がたれ落ちる。

「兵藤…一誠」

「そんな男は死んだ。ここにいるのは貴様を殺すためだけに生きてきた、ただの復讐者だ」

「僕を殺す」

「また演技か、ほとほとつまらないな。そこまでバレるのは嫌か、偽物という事」

「くッ…」

喋り続けようとする復讐者に急加速して夫婦剣を振り下ろすのだが、彼は避けることすらせずに身体で受け止めニヤリと口元を歪ませる。

「弱いな」

「そんな」

「お前が本気出して殺してこそ復讐は達成される。ここで、お前が本気出せないなら移動しよう」

彼は裕斗の首根っこを掴み床を踏み砕く。

とてつもない早さでビルから飛び出るので、その体にかかる負荷はとてつもない物で、どうにか身体強化でやつとこのところを復讐者からは魔術の気配など一切なく生身で耐えていた。

身体から発せられる龍のオーラなどを合わせて考えると答えがすぐに出る。

（龍に身体を明け渡したのか。となると、もう戻れない）

虞淵から聞かされた話では龍にはその肉体を明け渡せばかなりの力を手に入れられるようで、復讐者は何かしらの龍に身体を渡したのだと推測できる。

ただ、弱い龍に身体を渡したところでここまで強力な力を得る事はまずできない。身体を超高温にしても耐えられ、強力なGにも耐えられる。

その事から強い龍に限られるが、まず龍王達はありえない。となれば考えられるのは最悪の予想。

「ここならいいだろ」

数秒の空の旅を終え辿り着いたのは少しだけ開けた森の中だった。時間的にも駒王町の近くなのは分かるがそれ以外は全く分からない。

復讐者は着地と同時に裕斗を投げ捨てる。それだけ戦闘がしたいとの事なのだろう。

「君は… お前はクロウ・クロワツハに身体を渡したのか」

「ああそうだとも！ 神器を抜かれた俺では力が足りない。だから身体を差し出し力を得た… お前を圧倒的に超える最強の力をな!!」

両手を広げ先程のマンションの時よりも莫大な量の魔力を解放する。

オーフィスが無限に近い有限の魔力量だとすれば、復讐者の魔力は無限に届きうる魔力量だ。

さらに、とてつもなく禍々しく、邪龍であるクロウに身体を渡したのは明白である。

「マスター随分とお早い到着のようで… おやそちらの方が？」

「ああ、そうだ木場祐斗もどきだ」

「なるほど」

空から現れたのは目を疑う程の美女であった。たとえ女神だと言われても信じてしまうほどに。

彼女は長いピンクの髪を靡かせ、腰にある二つの白い羽をピクピクと動かしている。頭の右側に小さな円状の紋様が浮かんでいて、その事からも天翼種だと分かる。

いや、そもそもそんな事を考えるまでもなく彼女を知っている。

(ジブリール… いや確かに天翼種を聞いたあたりから疑っていたけど、まさか本当にいるとわ。こう出てくると感動モノだな)

彼女の容姿や口調含め全て脳内の記憶と一致していた。

自分の知っている通りであれば戦闘においては天翼種トップであり、戦闘による負けも見ることがない。最強の天翼種である。

感動している場合ではないと首を横に振って改めて空を見上げると彼女は消えていた。

「アレ？どこに」

「止める。それは俺の獲物だジブリール」

「ええ分かっています。しかし、本当に宜しかったのですか？私程度の攻撃に反応できないこんな存在に命をご使用になって」

彼女は消えたのではなく高速で移動したに過ぎず、一瞬で背後をとると魔力で作り上げた鎌を首に当たる寸前で止めていた。

全く気づいておらず、復讐者の声により知覚した瞬間、命を刈り取られる恐怖が襲いその場から数十歩の距離を瞬時に離す。

今のアクションから彼女の力はサーゼクスやアジュカなどよりも圧倒的に強く、一対一であれば自分ですら勝てるか怪しいと喉を鳴らす。

「随分と逃げるのは早いようですね」

「逃げるが勝ちだからな」

「では、マスター結界の補助をしておりますので、何かありましたらお呼びください」

服の裾を少し掴み腰を軽く折って上品な挨拶をする。裕斗の事をガン無視して行いすぎさま飛び上がり消えていく。

それから殆ど待つことなくこの場を囲むように結界が張られる。

「さて、始めよう俺の復讐を」

「ふう… だったら先制攻撃貫うぜ。 投影開始」

夫婦剣ではなく巨大な二本のバスターソードを投影する。自身の身体より大きく長い獲物を片手ずつで軽く持ち上げ、両側から挟むように薙ぎ払う。

当たり前だが復讐者は避けることなく挟まれる。力一杯にへし折ろうとするが折れないので次の攻撃に移る。

二つのバスターソードの刃の部分には小さな凹凸があり、分かりやすく言うならばノコギリのようになっている。

その刃を肌突き立て拘束で前後に動かす。確かに硬いのだろうが、これで少しは碎けるだろうと思っていたが顔の表情を一切変えずに、ゆっくりと前に歩き裕斗の腹部に右足蹴りを入れる。

「温いな」

「がハあゝ！……だっゝだらゝ！」

蹴られた箇所を抑えながら後ろに吹き飛ばされるもどうにか立つたまま堪える。

蹴られたせいで骨が何本か砕け、食道を通して血が上がってくる。それでも止まらず血を吐き散らし長ら奥の手の一つを切る。

両手に無数の小さな剣を投影し全てに『次元切断』デイメンション・スラッシャーを付与させて復讐者目掛け投擲する。

あまりにも小さいそれらは裕斗の目ですら目視は不可能。そのため風向きなどにも細心の注意を払って投げた。

「確かにそれなら防御も意味無い……しかしそれも視た」

身体を少し逸らし大量に空気を取り入れ、体制を戻すと同時に口から獄炎を放つ。小さな剣たちは次元を切断することなく全て燃え尽きる。

これぞクロウ・クロワツハの恐ろしき点だ。

アイルランド人は過去にクロウを崇拜しており、金銀の銅像立てたその周りを十二の偶像で囲んだ。

この十二の偶像とは王道十二宮を指しており、その事から太陽神の神格も持ち合わせていると考えられていた。奏太の技を破ったのも神格の一環だと思われる。

その通り放たれた獄炎は太陽に匹敵し、裕斗は咄嗟に取り出したゲオルグ印のマントで全身を覆い熱波から身を守る。

「クロウやるぞ」

『いいだろう。俺の力を存分に使い相棒』

「はああああああああ！」

両手を上に掲げ作り出したのは太陽そのもの。

顕現した太陽は境界内の草木を灰へと還しそのとてつもない熱量を物語っている。

まともに受ければ死は確定。となればまともに受けなければいいのだ。全身にオーフィスの魔力を巡らせる。

そもオーフィスとはウロボロスと呼ばれる自身の尻尾をくわえている龍である。

その事から自身だけで『死』と『生』を体現し無限を司っている。さすがに魔力を巡らせれば不死者になれる訳ではない。だが、オーフィスの魔力は言ってしまうえば何ものにも染まり、何ものにも慣れる純粋な魔力である。

太陽とは『生』である。その逆『死』を表せる月になれない通りがない。

「はあああああああ!!!」

魔力は裕斗の中心で円を描くように集まり光を飲む闇『全てを消し去る渦』を作り出す。

太陽対月(全てを消し去る渦)の激突の結果は裕斗の勝利に終わる。

「はあはあはあ」

「太陽が消えた…。なるほどなそう言う事か。戦闘以外視ていなかったのが仇になったか」

復讐者は右目を抑えながらボソリと呟く。左目の色は鮮やかな青へと変化している。

「オーフィスがバツクにいたか、どうするクロウ?」

『どうするだ? 俄然やる気が湧いてきたさ、あの無限と戦えるのだからな』

「だそうだぞ」

「はっ、嬉しくとも何ともないな。けどおかげで大体分かった」
切れていた息を整えしつかりと直立する。

「魔眼だろ? 過去を見ることの出来る」

「正解だ。『過去を見通す魔眼』と呼んでいる」

復讐者は余裕そうな表情でネタを明かす。

元の彼には魔眼など無かったが、クロウに身体全てを一気に明け渡した事により変質し、魔眼へと昇華したと思われる。

能力は名前の通り過去を覗け、過去に使った全ての技はまるでそこ

にいたかのように視られてしまっていたのだ。

ならばだ。過去に一度も使ったことの無い技を使えば対処ができないという事だ。

「だったらこれをお見舞してやるよ！集え我が剣よ」

右手を上空に掲げ言葉を告げる。

すると、裕斗の背後に津波が現れ復讐者を飲み込むように動き出す。否、津波ではなくそれらは全て剣の塊であった。

この世に存在する全ての剣。存在しない剣。その両方を無限にかき集めた技、さしずめ『無限の剣軍』である。

「くっ、そんな馬鹿な」

例え視なくても分かる。それら全てに『次元切断』が付与されていることなど。

咄嗟に防御の姿勢を取るが剣はすでに目標に狙いを定め降り注ぐ。まるで流星群のように。

一本や二本は躲せたが次第に増える剣に対処できなくなり

「遊戯か何かか？」

龍のように肌が鱗になり鋭く尖った爪になってしまった左手で軽く薙ぎ払うだけで、『無限の剣軍』は全て消える。

「確かに過去に使った事ない技を使えば対処は遅れるだろう。だが、そんな物所詮付け焼き刃。そんなんで倒せると思っていたのか？呆

れるな」

徐々に復讐者は身体を龍へと変化させ、両手両足が完全に龍へと至ったところで第二回戦の火蓋が落とされた。

世界は刻一刻と崩れ壊れる。

「くっ… こっ… は」

「目覚めたようだな小娘」

ソーナは目覚めるといきなりの真っ暗に何が何だか分かっていなかったが、数秒で目がなれ近くから聞こえた男の声の方を向く。

そこに居たのは大量の瓦礫からソーナを護るように覆い、左手が関節の逆方向に曲がっている黒髪の男であった。

「す、すみません！今助け」

「止めろ、下手に動けば倒壊する。ひとまずお前が魔力を回復させてからだ」

「魔力？何故その事を？」

「覚えてないのか？」

男は疑問気な表情で空から光が落ちてきた後の事を教えてくれた。

結界を破壊した極光はすぐさま二発目が放たれ、街の至るビルに衝突し破壊の限りを尽くした。

咄嗟に魔力で水を作り水の触手で近場にいた全員を、水のドームの中に入れソーナは護ったのだと。

だが、魔力が無限に続く訳もなく、数十分後には魔力切れでドームは消えあわや瓦礫の下敷きになっていた所を、彼が身を挺して護ったのだ。

「すいません、記憶が曖昧で」

「致し方ないだろう、気にするな。それに今の問題はここからの脱出だ」

「そう… ですね」

ソーナは未だに頭が追いついていないのでどことなく上の空で返事をする。

その直後だ。男は何かに気づいたように上にある瓦礫を見上げる。

「ソーナアレを感じるか？」

「何故私の名前… 強大な魔力、いや違う。天翼種!!」

「全員身を屈めろ!!」

小さな空間に男の怒号が響き渡る。

やっと安全だと安堵していた彼らは目元に涙を浮かべながらその場で、頭を抑えながら地に伏せる。

男は辺りを見渡し全員伏せたのを確認をすると

「うおおおおおおおおお!!」

数十キロはあるであろう瓦礫を全て持ち上げ、天翼種がいるであろう場所に投げつける。

あまりの規格外の怪力に人外のソーナや、地に伏せた人間達は目を点にしている。

瓦礫が全て飛んでいき久しぶりの光が身体に当てる。

外に、外に出たのもつかの間羽を生やした二人の少女に囲まれる。

「アレ?こんな所にいたのか」

「せっかくの一張羅が埃で汚れた!お前ぶつ殺してやる!」

天翼種フリーユゲル達の見目麗しい外見とは裏腹に、持っている力は魔王以上。

彼女らこそが本当の人外であると断言出来るほどに力の差は圧倒的に離れている。

それも、目の前には二人もいるのだ。怪我人を庇いながら戦うなど死ねと言っているようなもの。

魔力も殆ど尽きたソーナの頭には絶望の二文字がよぎる。

それでも諦めないと首を横に振り、高速でいくつもの選択肢を選び脳内で再現が全て死。脳が焼きちぎれんばかりに熱くなる。

だとしても止めない。

そんな彼女の頭に男は手を置く。

「深く考えなくていい。私が何とかしよう」

男が一人前になる。確かに先程の怪力などを含めれば少しは戦えるだろう。

だが、人間の彼では少し程度なのだ。今ここにいる全員を逃がすにはとてもではないが時間が稼げるとは思えない。

「私も、やります」

震える膝を叩き立ち上がる。

正直いえば彼に任せ逃げたい。だが、それは駒王町の代理管理人として許容できるものではない。

男は止めようとするが、覚悟を決めた彼女の目を見て諦めたのか頭を横に振る。

「全く君はかなり頑固のようだな」

「よく言われます」

「そうか。ならば君を信じよう。背中を任せる」

「はい」

人間？とソーナは肩を並べて天翼種に向かい合う。

宙に浮かんでいる二人は呆れたようにため息を吐きながらも、魔力をフル活用し電撃を放つ。

町中で大戦闘が始まった中、とある場所では別の問題が発生していた。

「リアス早く」

「どこに行ったってどうせ私なんて……もういやいやいやいやいやいやいやいやいや」

「リアス!!」

唯一の眷属である朱乃は引きずるように駄々をこねるリアスを屋敷から出そうとしていた。

のだが、リアスは相変わらず外に出たがらずに部屋のベットへと戻ろうとしていた。

眷属全てを失い。

周りからは笑われ蔑まれ。

絶望のどん底にいる彼女にとっては家から出て逃げるよりも、部屋にこもりベットで寝ることの方が大事なのだ。

「いい加減にしなさい!!」

ここ一年何も文句を言わずにずっとずっとついてきてくれた唯一の眷属は主に吠えた。

どれだけ我慢をしたのか。それは彼女の身なりを見れば分かる。それなのにリアスは自分の駄々をつき続けたのだ、爆発するなど言う方が無理だろう。

「毎度毎度!!昔の貴方はどこにいったの!!もう無理よ... 私にはもう無理...」

「あ、けの?」

「リアス... もう戻れないの?昔の時には」

「もど、る?どこに?どうやって?」

リアスの目には光が宿らない。やる事なす事全てに絶望した彼女はもう元には戻れない、それが分かった。

朱乃は目元に涙を浮かべながら最悪の言葉を呟こうとする。リアスは耳を両手で抑え聞こえないようにするも、強引に剥がしドゴンツツ!!

廊下の壁が勢いよく吹き飛び、外に広がる阿鼻叫喚となった町を見せつける。

だが今はそんな事よりも問題なのが誰がこのような事を行ったのかである。

腐っても純血悪魔の一人にして、現魔王のサーゼクス・ルシファアの妹となれば警備は厳重であり、家に至っては何重にも結界が張つてあるはずなのだ。

それにもかかわらず、朱乃達が気付かぬうちに破壊するなど並大抵の人外や人間に出来ることではない。

リアスは恐る恐る穴が空いた方を見ると、そこにいた人物に目を点にする。

腰から生えた白い一對の翼に、頭上にある少し傾いている輪っか。

全体的に白を基調としたワンピースを着ながら、黒い漆黒のブーツを履き耳に付いている十字のイヤリング。

顔はかなり整っていてリアスや朱乃と並んでもなんらおかしくない美貌。

見たことない人物ではあるがその種族はすぐに分かる。天翼種なんだと。

「みーつけたー!ああ時間かかった。下にいるゴミ共喋らないから、いないんじゃないかって思ってたよ」

淡々と語る少女の言葉に衝撃を受ける。

ゴミ共と言ったのはおおよそ護衛のためにいた悪魔達だろう。なにせ、下からは血なまぐさい臭いなどが漂ってきているからだ。

彼らはみな上級悪魔、中にはそれ以上もいたのかもしれない。だと言うのに目の前の少女はかすり傷一つない様子で皆殺しにした。

勝てるはずがない。咄嗟にその判断が出来た朱乃では、あつたが身体が恐怖に震えピクリとも動かない。

一年前の朱乃であれば動けたかもしれないが、この一年戦闘に参加することなくずっとリアスのそばにいたのだ。

身体が恐怖に耐えられなくなっていたとしてもなんらおかしくない。

「ああ、喋らなくていいよどうせすぐ終わるし」

少女は手のひらの上に紫色の剣を作り出す。

それが一体どんな原理であるのか不明だが、ほとぼしる雷から魔力の凝縮体であるあと思う。

少女はその剣先をリアスに向け告げる。

「去^行ね」

剣は手のひらから唐突に高速で進む。狙いは心臓一択だ。

当たり前だがリアスは動けない。身体を震わせ目元に涙を浮かべているだけだ。

情けない。これが私の主なのかと思うとそう思ってしまう。

敵の目的はリアスの命なのだろう。リアスが死ねば私はしなないのかもしれない。それに、どうせ身体は動かないのだから諦めたついでいはずだ。

そう諦めて

「られるわけがないわね」

覚悟を決めた直後、硬直していた身体は途端に動き始め身軽になる。今なら何でも出来るのではないかと思えてすらいる。

動き出した朱乃は、リアスを突き飛ばして剣の前に入る。

「え、」

「リアス生きて」

先程見くびったはずなのにリアスを突き飛ばして代わりになった彼女は笑みを浮かべた。

儂い笑み。正しく死ぬ寸前のそれを。

やめたと声に出す前に剣は朱乃の胸を深々と貫く。口からは血が溢れ、地面に横たわった彼女の胸からは大量の血が溢れる。

「あゝあゝあゝ!!」

いつもそばに居てくれた者の死。

文句を言わずに耐えて耐えて耐えた彼女は目の前に横たわり、血を流し続けていた。

あまりの衝撃に声にならない叫び声を上げ、天翼種を呪い殺すように睨みつける。

「おいおい、私は関係ないだろうに。あんたがさつきと死ねば良かったんだよ、まあどうせすぐに会えるからいいじゃん」

少女は呆れたように言い放ち、二撃目の準備を終える。

今度は躲されてもいいように大剣のように太く大きい剣だ。

「^行去ね」

三秒かけて作り上げた剣は高速回転を始め、何物も貫き破壊するよう突貫する。

空気の壁を引き裂き。

どうにか張ったリアスの魔力結界を破壊する。

せっかく朱乃が命を賭して助けてくれた命がもう消えようとした。死という絶対的な恐怖を前に彼女は

「誰か助けて」

死にたいとすら言っていた彼女が助けを求めた。

だが、近場には誰かいるはずがない。護衛の悪魔達は皆殺しにされているのだからだ。

死を覚悟しリアスは目を瞑り、朱乃の手を握る。最後まで一緒にいてくれた彼女と死ねるのならば本能だと。

それなのにいくら待てど待てど死がこない。

なぜ？疑問に思いながら目を開くと

「ふっ、とんだ場面に来たようだな。祐斗のところへ向かうはずだったんだがな」

銀色の全身を包む鎧は太陽の光を反射し、より神々しく光を放つ。仮面の下に顔が隠れているので多少声が籠っている。

「なんで」

「物はついでだリアス・グレモリー。お前の兄はルシファーを名乗っているんだ、その妹がそれでは馬鹿にされるだろう。手を貸してやるだから立てルシファーの名が泣くぞ」

真のルシファーの血を引くヴァーリ・ルシファーは座り込むリアスに言い放つと、拳を天翼種へと向けた。

ルシファアールとルシファアの妹

瓦礫の上に立つ少年と空中に浮かんでいる少女は互いに睨み合っていた。

それは、予期せぬ出会い出会ったからだ。

ヴァーリは兵藤一誠（仮）と共に失踪した木場祐斗を探して周囲を全速力で探している途中に、突如崩壊する家と強大な魔力反応を知覚しその場へと急行したのだ。

まさか、現魔王の妹を特にルシファアの血筋を助ける事になるとはかなり計画外であった。

それは少女も同じく、彼女ら天翼種には殲滅対象がある。

第一位が現魔王、墮天使幹部、熾天使達である。

第二位が現魔王の血筋、木場祐斗一向達である。

事実ヴァーリは第二位なのだが、下級の者達は決して戦うなど言われてるのが、曹操、虞淵、ヴァーリ、奏汰の四名である。

今ヴァーリの前に立っている彼女では勝てないと言われていたのだ。

「はあ！だからなんだってんだよ関係ないね！ご主人様誠のを虐めたんだ、だったら下僕である私にやる権利がある！」

「なんだ独り言か？随分と弱気なようだな」

「うるせええなああ!!」

先程までの余裕が無くなったのか、はたまた猫をかぶっていただけなのか、そんな事はヴァーリには分からないがそれでも関係ない。

兵藤一誠に関わっていると思われる者は何がなんでも潰すも決めているからだ。

二人の間に流れる空気は凍りつく。冷たく凍てつく。

基本戦闘は先行が有利とされているが、二人とも言ってしまうえばカウンター型であり先行が不利なのだ。だからこそ、相手が出るのを待つ事になる。

でも、そんな時間すら待てねえと少女は二対の剣を魔力で型どり、

双剣を構え後方に魔力を吹き出し突貫する。

二対の剣先を前に伸ばし、自身ごと巨大な槍になり家ごと突き穿つ。

「避ける訳にもいかないか… アルビオン!!」

『ああやるぞヴァーリ』

本来なら避ける場合なのだが後ろを軽く見て、リアスが避ける様子がないのを確認すると受け止めるため両手を前に突き出す。

「な、舐めるなあアアア!!」

『うおおおおお!!』

両手に剣が当たると甲高い音が響き渡る。

当たった直後に剣は回転を初め、ドリルのようにヴァーリの鎧を砕き始める。

削られた白銀の鎧は粒子となってリアス達の方へ流れる。

だがヴァーリとして作なしに受け止めたのではない。

受け止めたそばから機械的な音声で『Divide』と流れ、背中にある機械的な龍の翼から青白い粒子が溢れる。

これは少女の魔力を半減し自分の力となすものなのだが、たったの一回でヴァーリの魔力上限まで達しすぐに背中から余剰分の魔力が排出され始めた。

五回半減されたところで分が悪いと判断した少女は攻撃を中止し廊下へと足を下ろす。

「はは、所詮はこの程度かアズリール達は過剰評価しすぎなんだよ」「なつに、」

少女の降り立った方へ向いたヴァーリだったが、すぐさまその場に崩れ落ちる。理由は両肩と両膝に貫通している実物の剣であろう。

確かに白龍皇の力は強大だ。相手の力が大きければ大きいほど大量の力を吸収でき、決して自分の魔力等が尽きることがない。

言ってしまうえば赤龍帝以上に厄介である。

それでも効かないのは魔力攻撃であり、実物の剣を半分になど出来るはずがない。

そこを突かれ生き物の柔らかい部分であり急所でもある関節を見

事に貫かれたのだ。

これを横に飛んだ時に咄嗟に行つたのだから彼女がどれだけ化物じみているか分かる。さらに逆に言えば彼女でも天翼種の中では弱いのだ。その事を知らないヴァーリが知れば絶句してしまう。

「くっ、毒か」

「ご名答！かの大英雄達を殺したヒュドラの毒なんだから、結構効くでしょう？アハハハハ！」

抜く時の痛みに耐えながら四本の剣を抜いた後にヴァーリを襲つたのは目眩と倦怠感だった。その原因が本当にヒュドラの毒なのだとしたらとてもではないが耐えきれぬものではない。

ヒュドラの毒はヘラクレスの十二の功業の一つに登場するヒュドラが持つ最強級の毒である。

ヘラクレスは倒した後に間違えて師匠でもあつた不死のケイローンを射抜いてしまい、結果は不死を献上して死を選び、後に自分も受けた時は焼身自殺を行つた。二大英雄を死に至らしめた毒はかなり凶悪なのだ。

奇跡的にと言うべきなのかヴァーリはどうか意識を保ち生きているが、あと数分もすれば倒れてしまふだろう。

「ち、逃げろリアス・グレモリー」

「無理よ私じゃ」

「ふざけるなあア!!」

毒に全身を蝕まれているせいか鎧は解除され中からは苦痛に顔を歪ませているヴァーリが出てくる。

額から流れる汗の量は尋常ではなく、関節から流れるちと混ざり合い池を拡大させていく。

動くはずのない身体を無理やり動かし背後にいるリアスの方を向いて叫ぶも、見ている箇所にはリアスはいない。毒により殆ど視界も奪われたようだ。

「なんのためにその女が命をかけたと思つている！貴様を生かすためだろ！それなのに貴様が命をむだにしてどうする！」

「じゃあどこにいけばいいのよ！私にはもう行く場所なんて……」

朱乃だけなの… 朱乃だけだったのに…」

血を大量に流し顔が真っ青になった朱乃を抱えながら泣き叫ぶ。今まで溜めに溜めた悔やみや苦しみが爆発したのだ。

家にすら自分の居場所はない。両親は温かく迎えてくれるが逆にその温かさが苦しかったのだから。

眷属に裏切られたのにも関わらず誰も責めてこない。責められない。なら何をすればいいのか。

部屋にこもってみた。数日で飽きた。

ボードゲームを極めてみた。数週間で飽きた。

自分の体を傷つけた。数ヶ月で飽きた。

やっつては飽き、やっつては飽き、何度新たに経験しても何も思えない。しまいには考えることをやめた。

もう何もしない。どうせ悪魔の寿命は長い。簡単にはしないのだと腹を括って。

半年程だろうか何もしなかったのは、でもその間に朱乃が話しかけてこなかった事は一度もない。

『美味しいお菓子をみつけたの食べない？』

『雪よりアス』

『桜が綺麗に咲いたわ見に行かない？』

『新学期が始まったわ出てこない？』

だが、その全てを拒絶し否定した。その結果最後の眷属の一人も死なせてしまった。

もう何も思えない。思いたくない。知りたくない。気づきたくない。関わりたくない。

「甘えるなア！」

青年の叫びはリアスの心を抉る。

「それは貴様の逃げだ。眷属が逃げた？だからなんだ新しく作ればいい」

やめて

「誰も責めてこない？好都合開き直り新たにやり直せばいい」

ヤメテ

「何も成したくないと本当に思っているのであれば、貴様はどうの昔に死んでいるはずだ！なら何故今のお前がある！過去とはなんだ！未来とは貴様にとってなんだ！」

「うるさい」

無駄に伸びきった紅色の前髪をかき揚げ立ち上がる。

殆ど瀕死状態であり、動けないヴァーリに近づくと胸ぐらを掴んで持ち上げる。

「うるさい!!なんで、なんで、私だったの... 私ばかり... こんな目に」

「は、自意識過剰も程々にしろ」

彼女の姿はヴァーリにとって昔の自分を見ているようだった。

悪魔と人間のハーフとして生まれヴァーリは幼少期虐待受けていた。

父にとっては遊びで作った子だったのか、本気で愛して出来た子だったのか分からないが、ハーフ人間であった事で白龍皇の光翼が宿り穢らわしいと罵倒された。

日に日にます暴力に耐えきれずどうにか家から抜け出すことに成功する。

偶然通りかかったアザゼルに保護され、本当の親というものを知った。だが、まだこの時には憎しみは抜けきってはいなかった。

生きる希望を憎しみにしていたさなか、木場祐斗との衝撃的な出会いと共に生きる希望も変化する。

普通に生きたい。

なんら不思議のない当然な事であったが、昔からしたら考えられない事だ。

だからなのか無性に彼女が放っておけない。だからこそこんな事に手を出しピンチにまでなってしまった。

「今貴様はやっと真の人生を歩める。悩み、模索し、経験し、失敗し、成功する。これらの積立で人生とは進んでいく。」

なんだ、一回程度の失敗で泣き叫ぶなど弱いにも程がある。どれだ

け自分が甘やかされきたのかようやく理解したか？ 貴様の居た世界はまだまだ生ぬるか？ たんだリアス・グレモリーや

リアス」

指先も完全に駆動を停止させ動くのは辛うじて首から上だけ。流石にこれ以上お遊びに付き合うのも疲れたと感じ始める。

「ゲオルグもういいぞ」

「なんだもう少し待ってやろうと思っていたが、もういいのか呆気ないな」

どこからともなく男は現れた。

身に纏う漆黒は世界の理から外れ。

変色した右の金眼。腰からぶら下がった小さい魔導書。右手を拘束するようにまとわりつく銀の鎖。

異形。いや奇つ怪。それがヴァーリ以外の心の内だ。

一歩歩む事に彼の足跡通り廊下を焦がし確固たる存在を刻む。

「ふむ、なるほどなこの程度なら赤子をひなる程度だな。

フエッセルン・リリス エレクトリック・ヒール パーフエクト・ベッセルング
拘束解除・完全回復&完全再生」

影が光の当たる角度によって消えるように男は一歩でその場から消え、いつの間にか朱乃の横に移動する。

拘束解除の掛け声の元右手を覆っていた鎖がはじけ飛ぶ。

鎖が消えた右手は人間にあるまじきオーラーを放つ。絶対なる死を、絶対なる呪いを。並のものであればそんな物を宿した時点で死んでいたろう。あいにくゲオルグは並では無かったのだ。

死者の復活とは魔術において禁忌とされている。理由は単純明快、倫理を外れているからだ。

一人二人ならばいいが、十人百人を超えればそれは呪いとして身体を蝕む。

実際ゲオルグは一人山に籠もり修行する際に自身に禁術をかけた。何度も何度も何度も復活する禁忌の魔術を。

そのせいで、右手は呪いそのものとなり日常では封印しなければいけない。なのだが、代償として死して名を他社を蘇生する事が出来る禁断の力を得た。

血がほとんど空になり真っ青になっていた身体に血液が巡り、ひんやりとしていた肌からは人肌の温度が戻ってくる。

「次はお前だヴァーリよ、ヒュドラの毒はなかなか面白い研究しなかったところだ丁度いい、汝の呪い厄災貰い受けよう、吸ギフト・フエアウユニシエン収」

ヴァーリ蝕んでいた毒は粒子となり身体から離れると、同じ呪いであるゲオルグの右手に引き寄せられ付着する。

目には目を歯には歯を毒には毒をと。

一通り仕事が終わるとはじけ飛んだ鎖がまた右手を拘束する。一時的に稼働させた右手の様子を少し確認した後、身体が徐々に影となり消えていく。

「先に行くぞヴァーリ、なるべく急げよ」

「分かっている」

二秒も経たずに身体は完全に影となり消え去る。まるで初めから何もいなかったように。

影とは神出鬼没なりや。そうゲオルグが言ったが全くその通りだとヴァーリは内心思う。

「で、どうするリアス。その女は助かった逃げるなら今だぞ?」

「逃げる? ずっと部屋に籠ってたのよ? 運動も必要よ、ねヴァーリ」

「では貴様に背中をたくそう」

「ええ任せて」

朱乃を壁にもたれかからせてから、何かが吹っ切れたりリアスはヴァーリと肩を並べる。

「やっと、茶番が終わったか。ヒュドラの毒が無くなった時はどうなる事かと思っただけ、その方が楽しいそうだ」

「だそうだ」

「なら上々ね、だって気づいてないのでしょ?」

「はっ、」

前兆なく少女を囲むように現れた四つの魔力の塊は音を置き去りにして加速する。

元来物が飛ぶには空気が壁となり邪魔をするのだが、リアスの消滅の魔力にはそれが意味をなさない。

空気の壁がなんだ。重力がなんだ。物理法則がなんだ。

「力で吹き飛ばす、過去も未来もそれが私の答えよ！」

地球や太陽の重力をも振り切る速度第三宇宙速度で消滅の魔力は少女に飛ぶ。

見えなくとも対処は出来ると四つ全てに魔力の剣を飛ばす。例え切断できなくても、数秒だけでも時間を稼いで回避するためだ。

だがそれを易々と許すほど甘くはない。

消滅の魔力の攻撃とともに、鎧を着直したヴァーリが急速に肉薄する。

「馬鹿な！死ぬ気か！」

「いや死ぬ気などない！」

右手を前に伸ばす。『Divide』聞き馴染んだ音がなり何かを半減にする。

後方に飛ばうとジャンプした少女は突然ヴァーリの目の前に移動する。

距離が半減されたのだと思いが行き着く前に、強く握られた左の拳が顔面に突き刺さる。

元から後方に飛ばうとしていたためにそのまま後ろへ飛び、丁度剣を破壊した消滅の魔力が少女に容赦なく降り注ぐ。

「やったな」

「ふう… 疲れたわ」

互いの手の甲をぶつけ合わせ勝利の余韻を味わう。

完璧なコンビプレイだが、二人は先程あつたばかりなのだと言われども、とてもではないが信じられない。

そう安心した時だった、あの放送が流れるたのは。

『全員全力解放を許可するにや、遠慮はしないでいい徹底的に殺せ』

死んだと思った少女は先程の時よりも何倍に膨れ上がった力と共に起き上がる。まるで不死身の化け物のように。

英雄は誰ぞどこを見る？

自身の全長より長い槍を片手で持ち上げている男は易々と山に登っているのだが、顔がかなり険しい。

「裕斗…待っている」

ゆっくり歩いている時間すら勿体無いと、姿勢を低くし足場の悪い中速度をどんどん上げていく。

数十分そのまま移動すると男は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべその場で停止する。

「やはりいたか」

「それはこちらと同じですよ、英雄曹操さん？」

「嫌味か、俺は英雄などではないさ天翼種^{フリュウゲル}」

「そうでございましたかそれは失礼。それと間違いを訂正させてもらいます、私はその様な名ではなくマスターに貰った『ジブリー』と言う名がございますゆえ間違われませんように」

木々を砕きながら空からゆっくり降りてきたのは天女だ。

腰まで長く伸びた手入れの行き届いている淡いピンクの髪。瞳は黄金に輝き、三日月に曲がった口は美しいと言うよりいやらしいの一言だ。

服は重要な大部分は隠しているがへそや肩、足などはもろに出ている。

腰には天翼種の特徴である小さく白い翼がピクピク動いていて、頭上には奇天烈な模様をしている魔法陣が一つ浮かんでいる。

少女は笑みを浮かべペコりと頭を下げる。それは敬意をしめしたのではなく、ひたすらに雑魚だと害虫だと蔑んだ上での礼儀である。事実曹操は目の前の少女の実力を肌で感じている。彼女が現れてから空気はピリつき肌は砂漠のようにカサカサになっている。

「用は聞かなくてもよろしいでしょうか」

「そうだな。どうせ貴様と私では相容れないさ」

「そうでございませうか…。でしたら少々ここでは手狭ですね」

少女は呆れたような声を零し、手にちよつとした魔力の圧縮球を作り地面へと叩きつける。

それは地面と衝突の瞬間爆発となって当たりの木々を吹き飛ばし、巻き起こされた突風に曹操は目を閉じる。

開いた際に目に映るのは初めから木など無かったような更地である。

(まずいな、木に隠れながら殺り合う作戦だったのだが、これではできないな。正面からぶつからなければいけないか)

槍を握る手にさらに力が入り、額からは汗が流れる。

「どうかなさいましたか?」

「いや別になんでもない」

「そうでしたか、さっそく始めたいと思いますが、準備運動も必要でしょう」

ジブリールは指で音を鳴らす。

すると、かなり大きな魔法陣が空中に現れそこから八つの首を持つた龍が顔を覗かせる。

次第に頭以外も見えてくる。

瞳は赤く血走り、着地時短い四本の足は地面を砕き、長い首よりも長く太い尾。胴体は硬い青黒い鱗が覆い防御力はかなりのものだろう。

「ヤマタノオロチか」

「さようです。何やら魂が転がっていたので、回収し復元強化した肉体を授けました」

「余計な事をしてくれる」

「先程貴方は英雄ではないと言いましたが、この子を倒さば英雄となりますね」

過去日本を恐怖に落としていた最強の龍ヤマタノオロチ。神の座から追放された須佐之男命ですら、倒す時には酒で酔わせて不意をつく他に無かった。

正面からの戦闘を日本の最高峰の英雄が避ける。それほどまでに

強く、討伐されていなければ龍王に入っていた事だろう。

英雄たれない男は不敵に笑う。

「なぜ笑いを？」

「さあな、私にも分からん！」

馬鹿なのか、いや馬鹿なのだろう。何せ強敵に心がワクワクしているのだから。

槍を前に突き出し大声で叫ぶ。

バランス・ブレイク
「禁手化ツツツ!!」

槍の形は変化はしない。強いていえば裝飾が無くなり、あるのは一本の槍のみ。だが、身体の方は大きく変化していた。

纏っていた軍服は和服に近くなり、全体的にゆとりがうまれている。

髪は短髪だったのが長く伸び、後頭部で赤い髪留めで纏められ戦闘に支障は内容になっている。

さらに、瞳の色が紫色へと変貌し纏う雰囲気は禍々しく、オーフィスのような物になっている。

この姿をみたゲオルクはこう名付けた。

ポースロンビ・ロンギヌス・アルギュロス
『極光なる白銀神槍』

最初は多彩な攻撃方法を持った禁手にしようとしたが、それでは裕斗に追いつけないと考え、大量の手数より圧倒的な一つまるどころ量より質を取った。

オーフィスと何度も相談し研磨に研磨を重ね完成し最強の禁手へと至った。

『GEYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAEEEEEEEE』

「ふ、感じたか貴様の嫌いな神の力を」

軽く横に払う。

並の武器であれば効果のない攻撃なのだが、ヤマタノオロチは大きく仰け反り鱗は見事に裂かれボロボロになってしまう。

思った以上の威力にヤマタノオロチのリーダー格の頭は、須佐之男命と同等の敵だと判断しそれぞれに最大威力の攻撃を支持する。

ほかの頭たちは了承し各々の持つ最大技を放つ。それぞれの属性が違う火・水・雷・土・闇・光・風・毒だ。

それを曹操は真つ向から受ける。

曹操の背中に三つの光の輪が浮かび上がり、額にもう一つの目がギロリとヤマタノオロチを見定める。

神降ろし。過去に何度も行われた禁呪である。

人間に神を憑依させるなど容量不足もいいところであり、瞬く間に人間の寿命が無くなり死に至る。成功例は数少なく挑戦するだけ無駄である。

それを曹操は行つた。普通なら即死だろうが禁手の時のみ別だ。

まず憑依させている神はちようどいい所にいた神ヤハウエである。

黄昏の聖槍には聖書の神の意思が宿っているとされ、それが容量の減つたヤハウエだったのだ。

寝ているところをオーフィスに強引に目覚めさせ、半ば無理やり契約を刻み、肉体を強化するためオーフィスの瞳と交換した。

無論本物ではなく、失敗作として転がっていたオーフィスのクローン体から拝借し、本物のオーフィスが調整し本物とほぼ同じに仕上げた。

そのおかげで一時間だけなら神降ろしをしても問題はなくなった。

擬似神格を得ている曹操はその一撃に全魔力を注ぐ。

「うおおおおおおおおお!!」

『GEYAAAAAAAAAAAAAAAA!!』

槍より放たれるエネルギー体はインドの英雄が放つそれと何ら遜色はなく、即ち世界を破壊する一撃に至っている。

八つの首より放たれた最大技は全て混ざり合い、こちらも世界を破壊する一撃に至る。

世界VS世界。神々の戦闘でも滅多に見ることの出来ないぶつかり合い。

その影響は周辺に顕著に現れ始める。

地面は激突地点に向け抉れ浮かび、木々は一瞬で枯れ果てる。

一人と一体の叫び声は重なり合い、最後は世界を白で包み込む。

ヤマタノオロチは持ち前の強靱な鱗で耐え抜くが全てひび割れ防御には使えず、リーダ格の頭を守るため他の七つの首は代わりに受け全て地面に倒れている。

『G… E…:…』

勝った。そう確信した龍は、天高く遠吠えをしようと上を見上げ

「随分と気が早いな」

空から近づく銀に片目を引き裂かれる。

『GEYAAAAA』

「叫び声か？随分と可愛いな」

突然右半分の視界が真っ暗になり、目を切られただけなのに体全身を貫かれたように痛みが脳を刺激する。

痛みを苦しみながらもどうにか敵を見定めた先には、笑顔があった。

気づいしまった。この男は自ら言った英雄などではないと、その言葉は真実であり化け物や人類の敵の類なのだ。

須佐之男命に殺された時ですら感じたことの無い恐怖が頭を支配し正常な判断を行かせない。

「どうした、その程度か？準備運動にはまだ足りないぞー！」

最大の武器である尾は切り離され宙を舞う。

地面に立つための足は細切れにされ立つことすら許されない。

重い体が地面に落ち大量の血煙をあげると共に、最後の頭も地面に横たわる。

ほぼ閉じ掛けの視界の先に男がゆっくりと近づいてくるのが映る。

『助け…』

「死者は死者だ、そこに許すも何も無い。恨むならば恨むがいい。お前を殺すのに変わりは無いのだからな」

油断も躊躇いもない無慈悲な槍の投擲は脳天を貫き、首を渡って心臓を穿ち地上へと姿を現す。

役目を終えた槍は生きているように角度を急転回し主たる男の元へ飛んで変える。それを右手一つで掴み後ろを振り向くと、龍の死体は爆発し曹操を血で染め上げた。

二対一の最終決戦

戦闘開始から一時間。二人の死闘は正しく神話のそれと同等であつた。

結界で覆い核爆弾にすら耐える耐久度まで格段に底上げした地面は、戦闘の凄まじさから凸凹になつて至る所にクレーターができている。

「しかし、所詮はその程度か」

「なん…で……」

復讐者は地面に横たわり空を仰ぐ男に告げる。

祐斗は何が起きたのか理解が出来ていなかった。半龍となつた復讐者の防御力は凄まじく、剣は軒並み皮膚を裂けず『次元切断』が付与された剣すらかすり傷しか付けられなかった。

攻撃の手段を殆ど封じられた裕斗はどうか起死回生の一撃をと多彩な攻撃を繰り出していた。

「流石に、『全てを消し去る渦』を剣に纏わせた時は少し焦つたが、なんて事は無いな」

剣にオーフィスの魔力を纏わせた一撃は圧倒的な防御力を打ち破り明確なダメージを負わせる。

結果、身体中に走っている数多の傷からは血が零れ、片膝について男を見つめる。

「どうした紛い物。その程度で終わりか？」

「あ…あ……」

言葉とは呼べないうめき声を上げる裕斗は、呆れたような声を悔しそうに聞く。

復讐者の龍の鉤爪は鋭利に伸び、容易く裕斗を切り刻んだ。

腹部には大きく空いた風穴。臓器の重要な部分は辛うじて動いているが、腸や胃は地面に撒き散っている。

血管も裂け血が溢れ横たわる裕斗のそばは真っ赤に染まっている。

横たわる裕斗は現状の腹部の状態が分からず手で確認しようと動

かすが、視界に入るのは無残な物だった。

右手は肘から先を失い赤い鮮血を垂らし、左手に至っては視界にすら入らない。それは、肩から先を失っていることの証明だ。

その上足も同じで、何度立ち上がるうとしても膝から先の感覚が一切ない。

四肢は復讐者によって分離されてしまったのだ。

大量の血を流しすぎたせい、か、視界は徐々に暗くなり死を告げる音が耳のそばでなっているような気がしてくる。

「動けないか……哀れだな木場祐斗いや、遠山隼司だったか？」

なんでその名前をと心の中で聞き返す。

遠山隼司。それは転生する前の日本に生きている時の名前だ。ここに来てからは一度も名乗っておらず、誰も知ってきけるはずがない。「驚いているのか？ふっ……俺の眼は過去を見る。それが例え前世であつたとしてもな。すべて知っているさこの世界が何のために作られ、何故俺らが生きているのかな!!」

上がっていた息はどこへやら、すでに整っていて立ち上がりさまに大声を上げる。

「ああ、つまらない。これほどつまらない存在だったのかと俺は悔やんだ。だがお前は違う。別世界から来たお前は別だ。この世界の理から外れ異常な存在たる貴様はな!!」

だから俺は恨んだ。本来主たるべき俺を壊し、自分は悠々自適に暮らす貴様をなああ!!

何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故。俺が何をした？何が悪いことをしたか？ふざけるな、巫山戯るな……ふざけるなあア!!

と、怒りを燃やしていたが、終わると意外と呆気ないんだな。復讐者の後に残るのは無だと知っていたんだけどな……ああ、残念で仕方が無いよ紛い物」

情緒が不安定な言葉は重々しく裕斗の心を抉る。自分が来なければ彼はこの世界で普通に生活できていたはずなのだから。

彼自身が言った通り彼が本来の主人公なのだから。

朦朧とする意識は彼の嘆きに苦しみに悲しみに怒りに激情に引き戻される。

視界は未だ暗いままだが、耳や脳が彼の復讐者たる言葉を聞き逃す事は無い。

「そうだな、次はどうしてやろうか。お前を殺す前にお前の家族の頭を並べるのも良さそうだな」

「やめ…ろ…」

「なんだ反応したのか？アハハハアアア!!ああそうだ感情を見せてみる。俺と同じ憎悪をぶつけろ!!お前の家族を皆殺しにしてやるよ、無限を無様に殺してやるよ、友達をバラしてやるよおお!!」

「やめろおおおお!!」

復讐者の言葉に身体は燃え盛るように熱くなる。

血はマグマのように煮えたぎり、無限の魔力はその全てを解放する。

人間が一番力を発揮するのは愛である。友愛、親愛、仁愛、寵愛、情愛、熱愛、慈愛、敬愛、恩愛、憎愛、愛憎、愛悪。

愛とは人間が人間たる由縁と言っても過言ではなく、今の裕斗の頭に渦巻くのは愛に由来する憎しみである。

自分の不甲斐なさ。力があれば守れるはずなのにその力がない。自前の魔力さえ封じられ残っているのは残念な残りカス。

惨め。それ以外の言葉が見つからない。

だからこそだ。家族を守りたい、そのための力が必要なのだ。それでたとえ自分が死ぬとしても。

「アハハハハハハハアア!!最高だ、やつぱりお前は最高だよ。四肢もいで立ち上がるのはお前ぐらいだよ!!」

身体 of 足りない部分を魔力で補い立ち上がる。

オーフィスの黒い魔力ではなく、赤く紅い自前の『消滅』の魔力で手足を作る。

腹の風穴も同じく紅で埋め、血管を強引につなぎ戦闘ができる状態まで強制的に持っていく。

そして、左右の手には本来白黒の夫婦剣を投影する。夫婦剣は刀身から塚まで紅く輝いている。

「覚悟を決めた」

「覚悟だと?」

「敵を殺す。お前を殺す覚悟だ」

貧弱な瞳ではなく、殺意に満ち溢れた鋭い眼光で射抜く。

「クロウもう少し付き合ってくれよ」

『全く呆れた相棒だな。敵を元気にさせるなんてな』

「その方が倒しがいがあるだろ?」

『全くだ。昔より血が滾る』

二人の男も覚悟を確認し合い拳を強く握り構える。

その構えに武術的何かは無く、自分が最も使い安く戦いやすいデタラメな構え。だが、それがいいと挙動一つ一つに細心の注意を払いながら視る。

「木場祐斗改め遠山隼司。お前を殺す男だ」

「兵藤一誠改め復讐者の男。名はないがお前を殺す男だ」

互いに口を歪ませ不敵な笑みを浮かべ合いながら睨み合う。

「勝負!!」

互いは地面を砕く速度で動き始め、拳と剣はぶつかり合い大きな衝撃波を起こした。

愛とは何ものよりも強い

「クソ！」

「随分と苛立っている様子ですね」

「最悪だよ。こちらは既に切り札を切っていると云うのに、君は随分と余裕のようだからねッ——」

ヤマタノオロチを容易く倒した曹操ですら、彼女——ジブリールに有効な打撃を与えられていない。

先程から繰り返されているのは魔力で作られた鎌と槍のぶつかり合いだ。

ポースロンヒ・ロンギヌス・アルギュロス
極光なる白銀神槍は、その使用上神をその身に降ろし続けなければ行けなく、長く使用し続ければそれだけ肉体への不可は増していく。

使用時間は三十分を超えている。もし、ゲオルグ達が居れば是が非でも止めなければいけないほどの危険領域。

例えこの戦いに勝ったとしても、もう曹操は普通に生活すら出来なくなる可能性がある。

だとしても、なのだとしても。

「俺達を救ってくれた真の英雄を助けられなくてどうする！なんの為に力をつけた！他人を守るため？違うだろ、護りたいものを守るためだアアアア!!」

「その考え方嫌いじゃありませんよ」

槍に全神経・全魔力を集中させて穿つ。

絶対的絶命のさなかジブリールは依然としてその表情を崩すことは無い。

手に持っていた鎌を消失させ、指先を向かってくる曹操にのみ向ける。

「天撃」

その一撃は惑星一つを破壊するのに十分すぎる威力を誇る。

海は蒸発し、山は消し飛び、生命は消失する。現代最強の平気核兵

器すら足元に及ばない最強の攻撃。

無論人間に向ければどうなるかなど考えるまでもない。

指先から放たれる雷が近づく度に肌が焦げていく。少しでも触れようものなら一瞬で溶けることだろう。

「あああああああああああゝ！」

「無駄です。人間の身である貴方ではそれを止めることは」

「できないか。だろうな……だがな、それではい諦めますとはいかないんだよ。英雄とはどんな困難にですら、勇敢に立ち向かわなければいけない。そう教えられたんだ!!」

「全くその通りだ」

「だな」

天から声が聞こえ上を見上げるとそこには二天龍がいた。

背中に身体より大きい翼を羽ばたかせ『Divide』『Boost』の両方の音声が高らかに響く。

そして、緑の輝は最果てへと至りその全てがヴァーリへと受け渡される。

「二天龍は結託し新たな力を得たそれこそが」

「愛だあああああああああああ!!」

二人の声の重なり.answersるように籠手の輝きは増しその空間全てを照らす。

雷に触れると初めからそれが無かったように掻き消える。アルビオンの力半減が反応し続け、背中から緑色の粒子が大量に分泌されている。

それが意味をするのはジブリールの最強の一撃を防いだのだった。

「なるほど。貴方達に手加減をしているわけにいかないと言うことですか……いいでしょう。全身全霊をかけて貴方―劣等種を淘汰しましょう」

ジブリールは押さえ込んでいた力を全て解放する。

天使ミカエルは最強の人口天使を作り上げようとし、フリーユージェル天翼種を作ったがその際に一体だけ例外を作った。

他の者達のモデルは自分や他の熾天使だが、それは違う。

モデルにしようとしたのは地上最強の人外「無限の龍神オーフィス」と「夢幻を司るグレートレッド」だ。

当たり前だかその力を目にした事はない。彼らが力を振るう時こそ、世界の終焉の時だからだ。

それでも一切情報が無いわけではなく、信徒やコネを使い数々の情報を手に入れとある情報を手に入れた。

二人に最も近い存在、永遠を生きる蛇だ。

ギルガメッシュ叙事詩に登場した、不死の薬を最後の最後にかすめ取った蛇がその力を蓄え続け、凶悪な力を手にしていると。

ミカエルはその話をすぐに信じ蛇を求め旅立つ。結果として五日五晩戦闘を繰り返しなんとか捕縛し、それを例外としたそいつに埋め込んだ。

そいつはコード00と名づけられ将来的にジブリアルと呼ばれる事になる。

「まだ上があるのか」

「そうみたいだな、早く祐斗の所にいきたいんだけどな」

「仕方あるまい。どうせあいつは倒さなければいけない相手だ、今やるか後でやるかの違いだけだ」

意気込みはよし。圧倒的な力を見せつけられても脳裏に諦めの言葉は浮かばない。

逆にやってみると気合いが過ぎない。

人間にしては中々と敵を認めたジブリアルは背後にいくつもの門を開く。

門は水滴を垂らした水のような波紋状で、それがいくつもの展開されていく。総数百、その全てから先程の天撃と同等の魔力を肌で感じる。

「では始めましょうか、最終決戦とやらを」

チャージが完了しいつでも放てる場面でジブリアルは右手を上げ、下に下ろす——寸前に地を揺るがす大きな爆発が背後で発生する。

空を飛ぶジブリアルですら、その異様な波動を感じ振り向く。

「そんな… 結界が破壊された？ありえない、まさかっ！」

一誠が誰にも邪魔されず存分に戦えるようにと張った結果は、現状の一誠では破壊できないであろう耐久性にしていた。

だからこそ一誠では結界を破壊する事は不可能であり、必然的に相対者たる木場祐斗が破壊した線が濃厚になる。

となると、一誠は負けた・・・そう考えるといてもたつても居られず、すぐに翼を開いて空へ舞い上がり現場へと向かう。

「ちよっ」

曹操の引き止める声も虚しく一瞬で加速しその姿を神速へと至らせ移動する。

敵が突然いなくなった三人は互いに顔を見合わせ、とりあえず着いていこうとアイコンタクトを取って背中を追う。